

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第60集

MOTOJYŌ
本 城 跡

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVI

2002年

宮崎県埋蔵文化財センター

『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第60集』

「本城跡」 (2002 宮崎県埋蔵文化財センター)

正誤表

訂 正 箇 所	誤	正
本文25頁14行	曲輪Xに～	曲輪IXに～

本 城 跡

東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ

2002年

宮崎県埋蔵文化財センター



北西から見た本城跡

序

宮崎県教育員会では、日本道路公団福岡建設局の委託を受け平成7年度から東九州自動車道（西都～清武）建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設に伴う発掘調査報告書であります。掲載した宮崎市古城町所在の古城跡は、平成8年から平成9年の2ヵ年にわたり調査を行ったものです。調査の結果、当遺跡の丘陵では縄文時代から近世にかけての人々の生活の痕跡が確認されました。なかでも、遺跡の主要な時代である中世から近世にかけての城跡は、見張り台や堀切・虎口といった施設が確認され当時の縄張りの一端が解き明かされるとともに、近隣には、古城・山ノ城といった地名もあり関わりが推定されます。また、多量の土師器や陶磁器が出土しました。これらの遺構・遺物は、今後、当地域の歴史を解明するうえで貴重な資料と言えるでしょう。

本書が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待しています。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜りました先生方に対して厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した本城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日本道路公団福岡建設局の依頼を受けて宮崎県教育委員会が主体となり、平成8・9年の2カ年にわたり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成8年5月7日から平成9年8月12日まで行った。
- 4 現地での実測等の記録は、崎田一郎・高橋祐二・小山博・橋本英俊・代田博文（現 南郷町教育委員会）が行い地形測量図については有限会社ジバング・サーベイに委託した。
- 5 本書で使用した写真は、崎田一郎・橋本英俊が撮影し、空中写真は有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 6 整理作業は埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、遺物の実測、トレースは整理作業員の協力をえて崎田・橋本が行った。
- 7 本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1図を基に作成し、周辺地形図は宮崎市作成の1万分の1図を基に作成した。
- 8 本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）である。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SB・・・掘立柱建物 SC・・・土坑 SE・・・溝状遺構 SI・・・集石遺構
- 10 土器の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に拠った。
- 11 陶磁器類の整理にあたって、家田淳一氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に御教示賜った。
- 12 本書の執筆・編集は橋本が行った。
- 13 出土遺物・その他諸記録は埋蔵文化財センターに保管している。
- 14 報告書内での調査区割と平成8・9年度の概要報告の曲輪番号との対照は次のとおりである
北側の城……曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴ・曲輪Ⅵ
南側の城……曲輪Ⅶ・曲輪Ⅷ・曲輪Ⅸ

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第2章 調査の経過	
第1節 調査区の設定	5
第2節 調査日誌	5
第3章 調査の記録	
第1節 縄張図から見た本城跡	11
第2節 中世から近世の遺構・遺物	11
1 曲輪Ⅳ	11
2 曲輪Ⅴ	11
3 曲輪Ⅵ	12
4 曲輪Ⅶ	16
5 曲輪Ⅷ	25
6 曲輪Ⅸ	25
7 出土遺物	37
第3節 城跡に関わらない遺構・遺物	88
第4章 まとめ	93

挿図目次

第1図 位置と周辺の城跡	3
第2図 遺跡の周辺地形	4
第3図 調査区とグリッド配置図	7
第4図 本城跡縄張図	9
第5図 曲輪Ⅳ～Ⅵ遺構分布図	13
第6図 曲輪Ⅳ遺構分布図	15
第7図 曲輪Ⅴ・Ⅵ遺構分布図	17
第8図 曲輪Ⅴ－Ⅵ断面図	19
第9図 曲輪Ⅵ土塁断面図	19
第10図 曲輪Ⅵ道1土層断面図	20
第11図 曲輪Ⅶ～Ⅸ遺構分布図	21

第12图	曲輪Ⅶ堀切1平面・土層断面図	23
第13图	曲輪Ⅶ堀切2平面・断面・土層断面図	24
第14图	曲輪ⅦSE1平面・断面・土層断面図	26
第15图	SB1・SB2	27
第16图	SB3・SB4	28
第17图	SB5・SB6	29
第18图	SC1・SC2・SC4・SC5	30
第19图	SC6~SC8・SC10・SC12	31
第20图	SC13~SC16・SC18・SC20	32
第21图	SC21~SC25	33
第22图	SC3・SC11・SC17・SC19	34
第23图	SC9・SC26・SC27	35
第24图	土師器実測図(1)	38
第25图	土師器実測図(2)	40
第26图	土師器実測図(3)	41
第27图	土師器実測図(4)	42
第28图	土師器実測図(5)	44
第29图	土師器実測図(6)	45
第30图	土師器実測図(7)	46
第31图	土師器実測図(8)	47
第32图	陶磁器実測図(1)	49
第33图	陶磁器実測図(2)	50
第34图	陶磁器実測図(3)	51
第35图	陶磁器実測図(4)	53
第36图	陶磁器実測図(5)	54
第37图	陶磁器実測図(6)	55
第38图	陶磁器実測図(7)	57
第39图	陶磁器実測図(8)	58
第40图	陶磁器実測図(9)	60
第41图	陶磁器実測図(10)	61
第42图	陶磁器実測図(11)	63
第43图	陶磁器実測図(12)	64
第44图	陶磁器実測図(13)	65
第45图	錢貨(1)	67

第46図	錢貨(2)	68
第47図	錢貨(3)	69
第48図	金属製品実測図	70
第49図	金属製品・石製品実測図	72
第50図	石製品・土製品実測図	73
第51図	SI1・SI2・SI3	89
第52図	縄文～古代遺物実測図	90
第53図	石器実測図	91

表 目 次

第1表	掘立柱建物(SB)計測表	36
第2表	土坑(SC)計測表	36
第3表	本城跡出土土器観察表(1)	74
第4表	本城跡出土土器観察表(2)	75
第5表	本城跡出土土器観察表(3)	76
第6表	本城跡出土土器観察表(4)	77
第7表	本城跡出土土器観察表(5)	78
第8表	本城跡出土陶磁器観察表(1)	79
第9表	本城跡出土陶磁器観察表(2)	80
第10表	本城跡出土陶磁器観察表(3)	81
第11表	本城跡出土陶磁器観察表(4)	82
第12表	本城跡出土陶磁器観察表(5)	83
第13表	本城跡出土陶磁器観察表(6)	84
第14表	本城跡出土錢貨計測表	85
第15表	本城跡出土金属製品計測表	85
第16表	本城跡出土石製品計測表	86
第17表	本城跡出土土錘計測表(1)	86
第18表	本城跡出土土錘計測表(2)	87
第19表	本城跡出土土器観察表(6)	92
第20表	本城跡出土石器観察表	92

図 版 目 次

巻頭図版	北西から見た本城跡	
図版 1	曲輪IV～VI(南から)	97
	曲輪IV～VI(真上から)	

図版2	曲輪IV (真上から)	98
	曲輪V (真上から)	
図版3	曲輪VI (真上から)	99
	曲輪VII~IX (北西から)	
図版4	曲輪VII~IX (北西より)	100
	堀切と曲輪	
	虎口 (正面が曲輪V)	
	虎口と道2	
	調査区外堀切土層断面③地点	
	曲輪VII堀切1検出状況 (東より)	
	曲輪VII堀切1完掘状況 (北より)	
	曲輪VIII・IX堀切2 (西より)	
図版5	曲輪VIII・IX堀切2 (南より)	101
	曲輪VIII SE1 (南より)	
	SC1遺物出土状況 (東より)	
	SC1完掘状況 (東より)	
	SC2完掘状況 (南より)	
	SC8検出状況 (西より)	
	SC25半載状況 (北より)	
	SC25完掘状況 (真上から)	
図版6	SC26完掘状況 (南より)	102
	曲輪V井戸跡	
	S11半載状況 (東より)	
	S12 (南より)	
	S13 (東より)	
	土師器出土状況 (曲輪V)	
	銭貨出土状況 (曲輪V)	
	弥生土器出土状況 (曲輪V)	
図版7	出土遺物 (1) 土師器	103
図版8	出土遺物 (2) 土師器・陶磁器	104
図版9	出土遺物 (3) 陶磁器	105
図版10	出土遺物 (4) 陶磁器・弥生土器・土師器	106
図版11	出土遺物 (5) 銭貨・金属製品・石製品・土製品・縄文土器・石器	107

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（延岡～清武間）は平成元年2月に基本計画がなされ、平成3年12月3日に整備計画策定、そして平成5年11月19日に建設大臣から日本道路公団に東九州自動車道（西部～清武間）の施行命令が出された。その間宮崎県教育委員会文化課では、平成3年度に西部～清武間の遺跡詳細分布調査を行い埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事によって影響を受ける部分について工事着手前に発掘調査を実施することとなった。調査は平成7年度の清武工事区より開始された。本城跡は平成5年度から実施されている中近世城館跡緊急分布調査により、縄張りや見張り台などの施設から城跡であると推定されていた。城跡は谷を挟んで南北に広がっている。路線は城跡の主郭部分には係らないものの、西側の曲輪部分に大きく影響を及ぼしている。

第2節 調査の組織

本城跡の調査の組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長	田原直廣（平成8年度） 岩切重厚（平成9年度） 笹山竹義（平成10～12年度） 岩切正憲（平成13年度）
文化課長	江崎富治（平成8年度） 仲田俊彦（平成9～11年度） 黒岩正博（平成12・13年度）
埋蔵文化財係長	面高哲郎（平成8年度） 北郷泰道（平成9～11年度） 石川悦雄（平成12・13年度）
主査（調整担当）	永友良典（平成8年度） 柳田宏一（平成9年度）
宮崎県埋蔵文化財センター	
所長	藤本健一（平成8・9年度） 田中守（平成10・11年度） 矢野剛（平成12・13年度）
副参事	木幡文夫（平成8年度）
副所長	岩永哲夫（平成8・9・12・13年度） 江口京子（平成11年度） 菊地茂仁（平成12・13年度）
調査第一課長	面高哲郎（平成12・13年度）

調査第一係長	谷口武範（平成13年度）
調査第二係長	長津宗重（平成12・13年度）
主事（調整担当）	飯田博之（平成8年度）
主査（調整担当）	菅付和樹（平成9～11年度）
主任主事（調査担当）	崎田一郎（平成8～11年度・12年度主査）
主事（調査・編集担当）	橋本英俊（平成8～11年度・12年度主任主事）
調査員（囑託）	代田博文（平成9年度）

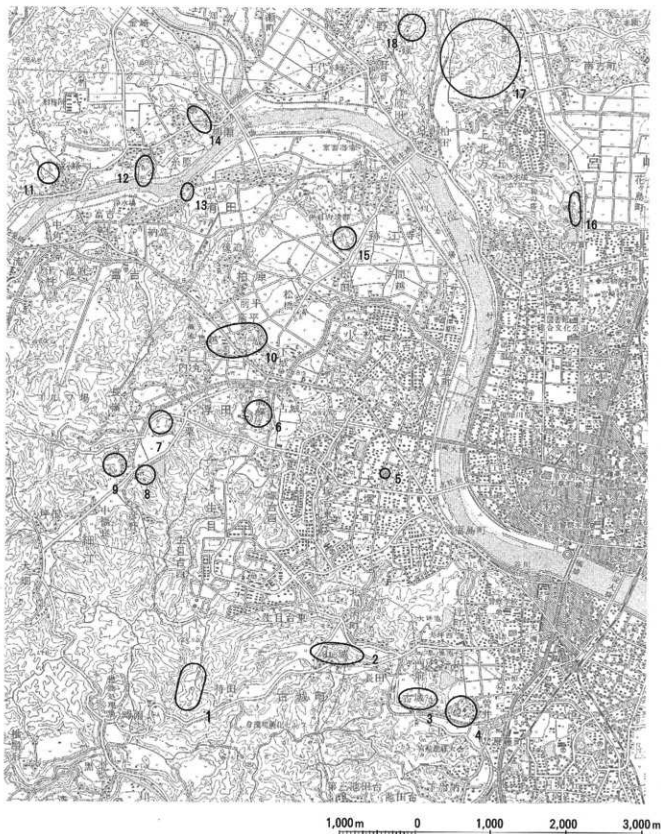
第3節 遺跡の位置と環境

本城跡は宮崎市古城町時雨から字本城にかけて所在する。遺跡は宮崎平野を東に見渡せる標高約110mの比較的急峻な2つの山にわたって築かれている。海岸線から9kmほど西に位置する。城跡の東側には古城谷・北川内谷があり、その谷に挟まれて中世山城跡である山ノ城跡（大田城跡）・古城跡が位置し、さらに東約1kmに伊東氏48城に数えられる曾井城跡（現野崎病院）を望むことができる。一方西側は比高差約60mに古城川を見下ろし、水運が監視できる地勢にある。遠く北側には宮崎城の立地する竹篠台地を見晴らすことができる。

遺跡の所在する古城は、日向国宮崎郡に属し、中世には大田村に含まれ近世に分村している。建久8年（1197）の「日向国図田帳」に、八条女院領国富荘の一円荘のうちに地頭平五の所領として「大田百丁」と見える。大田一帯は大淀川河口部右岸に位置し、南朝方の評付氏の勢力と北朝方の伊東氏や土持氏・島津氏の勢力の争奪の地となった場所である。「日向記」によると、慶長5年（1600）10月、宮崎城を攻め取った伊東勢は稲津掃部助を同城に在城させ、本城など5カ所に陣を張っている。近隣の山ノ城跡は伊東氏庶家の山ノ城氏の居城で、主郭と推定される曲輪や堀切がみられ、古城跡は帯曲輪や堀切が確認できる。周辺には伊満福寺・護東寺などの寺跡も立地している。

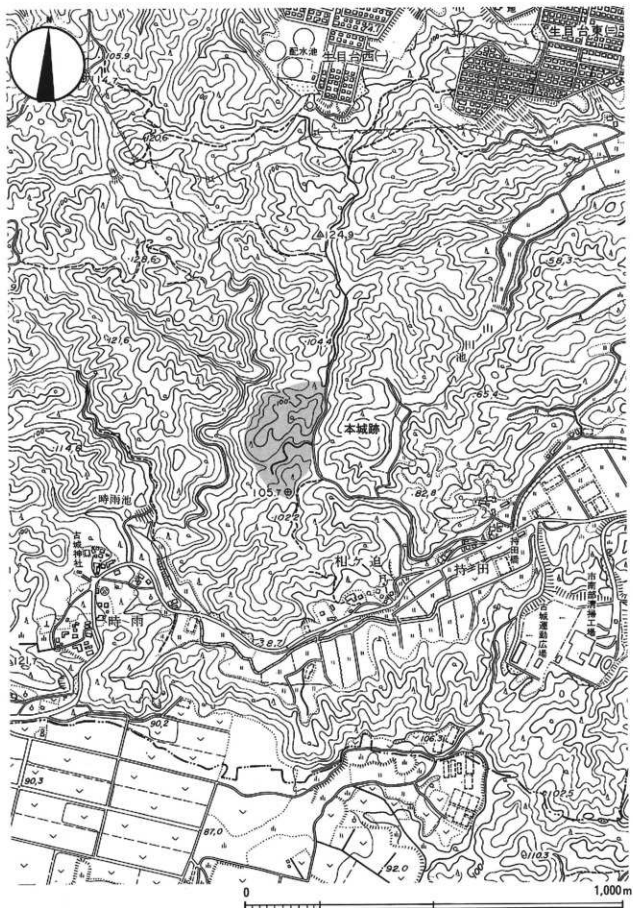
〈参考・引用文献〉

- 宮崎県史刊行会 『宮崎県史』通史編 中世 1998
 宮崎県史刊行会 『宮崎県史 叢書 日向記』2000
 宮崎県教育委員会 『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ』詳説編 1999
 平部鍾南 『日向地誌』1929
 新人物往来社 『日本城郭体系』2 1981
 平凡社 『郷土歴史大事典 宮崎県の地名』1997



- | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|------------------|---------|
| 1 本城跡 | 2 山ノ城跡 | 3 古城跡 | 4 曾井城跡 | 5 蓬萊山城跡 | 6 高蟬城跡 |
| 7 寺ノ下遺跡 | 8 宮ノ城跡 | 9 園城跡 | 10 石塚城跡 | 11 城ノ跡遺跡 | 12 倉岡城跡 |
| 13 白糸城跡 | 14 柿迫遺跡 | 15 跡江城跡 | 16 陣ノ内 | 17 宮崎城跡「池内城・龍峯城」 | |
| 18 竹籬城跡 | | | | | |

第1図 位置と周辺の城跡 (1/50,000)



第2図 遺跡の周辺地形 (1/10,000)

第2章 調査の経過

第1節 調査区の設定

東九州自動車道は、宮崎市古城町時雨から字本城間の丘陵尾根と谷を北東方向に向かう。古城川を望む左岸の丘陵の先端部、および基部が調査対象地区である。調査の初期段階で主郭を含め、縮尺を1,000分の1とする地形測量を行い、グリッドは1辺10mとした。(第3図)

調査は杉の立木等の除去後、調査対象とした尾根を横断するようにトレンチを設け、また傾斜面の形成や曲輪の普請が行われていたか否かの判断のため、曲輪と傾斜面を横断するトレンチも設定した。また城跡としての縄張りを想定するにあたって、周辺の地形を含めて踏査し、丘陵に設けた平坦な地形を「平場」と称した。便宜上アルファベットと番号を付けて区割りを行い発掘調査を行ったが、整理期間中に曲輪として新たに番号を付けた。

第2節 調査日誌

本遺跡の発掘調査は、平成8年4月17日から平成9年8月12日までの約1年4ヶ月の長期にわたった。期間中は長雨や立木の伐採や運び出し・工事用道路の建設などのため数回にわたり、のべ5ヶ月間程調査を断念する日々があった。調査日誌は準備期間を除き順を追って記述を行う。

平成8年4月17日～4月26日

対象となる丘陵南側の県道清武黒北線より踏査を開始する。

平成8年4月18日

中近世城跡緊急分布調査の際、範囲に含まれていなかった南側の山に見張り台と推定される施設を確認する。東側に宮崎平野を一望できる場所であった。縄張り図の作成を行う。

平成8年5月7日～10日

調査面積が広く比較的平坦な部分の多い北側の城より、杉の廃材の処理とトレンチ掘りを行う。

平成8年5月13日

国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏とともに現地調査を行う。北側の城の構造はあまり人工的でなく、一方、南側の城は人工的な構造をしている。城の範囲の推定から縄張り図の修正を行う。

平成8年5月14日～5月23日

調査対象地内には杉が未伐採の部分と廃材が散乱している箇所が多く見られ、調査に着手できそうな箇所の廃材の運び出しと現況が畑地部分のトレンチ掘りを行う。遺構面が削平されている。部分的に重機による表土剥ぎを行う。

平成8年5月24日～8月5日

地権者による杉の伐採や運び出しのため調査は一時中断。

平成8年8月6日～30日

杉の伐採や運び出しに重機や大型の車両を使用したため、虎口と推定される部分や北側の城と南側の城の間にある曲輪の一部の破壊が進行する。斜面地や調査地内に残る廃材の撤去と搬出を行う。

平成8年10月2日～10月20日

工事車両用の道路拡幅工事のため調査一時中断。

平成8年10月21日～12月9日

重機を使用して排土の除去と搬出、北側の城の表土剥ぎを行う。調査区内にグリッド杭を設置。

平成8年12月11日～12月26日

北側の城をジョレンにより精査を開始する。南側の城の廃材処理と排土の処理。

平成9年1月7日～1月21日

北側の城から土坑やピットが検出されはじめ、ようやく調査らしくなってくる。

平成9年1月23日～1月28日

北側の城の虎口部分の調査に着手。

平成9年1月29日～2月3日

南側の城(曲輪Ⅶ～曲輪Ⅸ)の試掘を行う。曲輪Ⅶに堀切が確認される。

平成9年2月4日～2月17日

北側の城の曲輪Ⅳ・Ⅴのコントラインの作成を開始する。

平成9年2月24日～平成9年3月6日

曲輪Ⅵの掘り下げと曲輪Ⅶの調査を開始する。

平成9年3月10日～平成9年3月31日

曲輪Ⅵに柱穴や土坑が検出され、掘り下げを開始する。周辺工事のため曲輪Ⅶ～Ⅸの調査を中断。

平成9年4月2日～4月17日

北側の城の曲輪Ⅳ・Ⅴ・Ⅵのピット群や土坑の精査の後、記録作成を行う。

平成9年4月17日～4月30日

曲輪Ⅳ西側縁辺部の削平を受けている部分にトレンチを設定し、掘り下げを行う。集石遺構2基が検出される。南側の城(曲輪Ⅶ～Ⅸ)の掘り下げを再開する。

平成9年5月1日～5月16日

曲輪Ⅳの造成面の確認と曲輪Ⅵの虎口推定部分の掘削作業を行う。

平成9年5月19日～6月3日

曲輪Ⅳ・Ⅴのピット群の実測作業と、曲輪Ⅶの堀切の掘削作業を行う。

平成9年6月4日～6月12日

曲輪Ⅵの土塁の断ち割り作業を行う。曲輪Ⅶ・Ⅸよりピット・土坑が検出される。

平成9年6月13日～6月30日

北側の城の曲輪Ⅵの土坑・ピット群の記録作成および曲輪Ⅶ・Ⅸ間の堀切の掘削作業を行う。

平成9年7月11日～7月22日

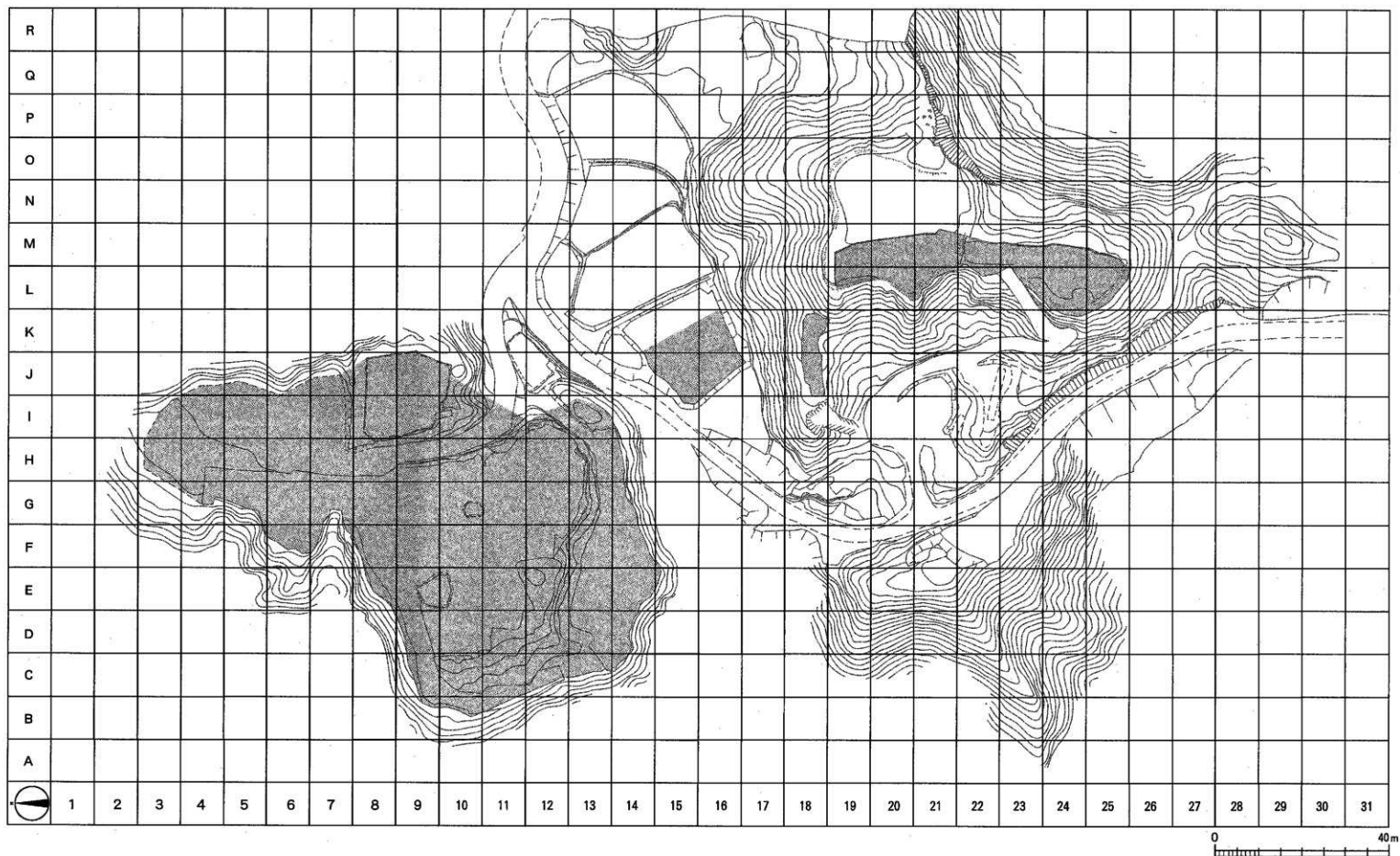
曲輪Ⅶ・Ⅸの土塁痕跡の断ち割りと分層、地山成形後土盛りを行っている状況を確認。

平成9年7月23日～8月9日

堀切2カ所の実測とコントラインの作成を行う。

平成9年8月10日～8月12日

地形図と縄張り図の修正を行い調査を終了する。



第3図 調査区とグリッド配置図 (1/800)



第4圖 本城跡縄張図 (1/750)

第3章 調査の記録

第1節 縄張り図から見た本城跡

本城跡は、縄張り図から最高所の標高約110mを計る曲輪Ⅰが主郭部分に当たると見られ、四方に放射状に小郭を配置する構造である。現況では主郭から南に延びる4段目の曲輪の先端に堀切が1本と、曲輪Ⅰ南端と曲輪Ⅵ東端に土塁が確認できるのみであり、屋敷地的な様相を示している。

谷を挟んだ南側にも曲輪が広がっており、北側とは異なった様相である。曲輪Ⅶでは見張り台と考えられる周囲約30m現況の高さ1mの高まりが認められ、東側からまわりこむように通路状の空間があり土塁状の施設が確認でき、北側に向かって5段の曲輪状の平坦面が延びている。さらに北側の先端に高さ5m、周囲約40mの高まりが認められる。

本城跡では丘陵頂部の曲輪へ登るため、または曲輪間の移動のための道や虎口が設けられている。推定を含めて道が2カ所・虎口が2カ所である。また曲輪Ⅶと曲輪Ⅷとの間に虎口や土塁といった施設が現地地形からも確認できる。構造上からはシラス台地の縁辺の適地を城取りし、掘や土塁によって区画する宮崎県南部地域に多く見られるタイプである。

第2節 中世から近世の遺構・遺物

1 曲輪Ⅳ(第4・5・6図)

調査区のもっとも北側に位置し曲輪Ⅴの北側に隣接する。面積は、1,230㎡を計る。曲輪の西側は縄文時代早期の面まで大きく削平され、本来の曲輪の形状は明確ではない。調査の結果、H-5からH-7グリッド付近で掘立柱建物跡4棟を確認した。柱穴は曲輪の西側へも延びると推定されるが、削平のためさらに掘立柱建物として復元できるものはなかった。現況は平坦地であるが土層壁面の観察から地山成形による造成が3段みられ、複数の曲輪により構成されていた可能性がある。

(1) 掘立柱建物(SB)(第6・15・16図)

曲輪Ⅳでは、掘立柱建物は総数6棟のうち4棟を確認した。計測値の詳細については、表1を参照されたい。SB1が、1間×4間、SB2が1間×3間、SB3が2間×4間、SB4が2間×3間の規模である。根固めの石などは検出されていない。SB1は1棟のみ東に触れるが、SB2からSB4は主軸方位がほぼ同軸上にあり、規格に違いはあるものの同時期の作事の可能性が強いと考えられる。

2 曲輪Ⅴ(第4・5・7図)

調査区のはほぼ中央に位置し、城域の西端にあたる面積2,205㎡を計る城内最大の曲輪である。表土は、5cm～10cmと非常に薄い。基盤層直上のシラス層まで造成を行い平坦地を作り出している。曲輪内から土坑21基、井戸跡1基、柱穴群が検出された。南端部では板状の石を敷設した遺構の一部が確認され、曲輪内通路とも想定されるが曲輪とのつながりについては不明瞭である。また、第7図④地点に現存周囲10mを計る壇上の高まりがあり、ヘラ切り底・糸切り底が混在する土師皿が20数枚重なって出土した。この近辺には神社の伝承も存在することから祭祀関連の遺構の可能性もある。曲輪の西側から南側にかけての縁辺部に若干の高まりが見られることや、曲輪Ⅵおよび虎口

の位置関係等から考えると周囲に土壘が巡っていた可能性が考えられる。

(1) 土坑 (SC) (第7・18~23図)

土坑はシラス層を掘り込み作られている。その規模および平面規模や形態は大小様々である。曲輪Vでは、21基が確認されている。遺物を伴う土坑はSC1・2・4・11の4基のみと少なく、一部を除いて土坑の性格は不明である。ここでは、遺物が出土しているものや特徴的なものについて記述する。規模や形態など詳細については表2を参照されたい。

SC1

曲輪Vの西端、やや北西よりの縁辺に位置する。平面形は不整な円形で、長軸1.01m、短軸0.94mを計る。検出面からの深さは12cmと浅く断面形は皿状を呈する。覆土は黒色土単一である。遺物は人型(第50図399・400)と動物型(第50図401)の土製品が出土している。

SC2

曲輪Vの南西、SC1の南東約15mに位置する。ほぼ北-南方向に長軸を1.9m、東-西方向に短軸を1.4m、深さ1.11mの不整な楕円形状に掘り込んでいる。北壁には緩やかなテラス状の平坦面をもち、床面はほぼ平坦である。遺物は南側に人頭大の砂岩が上にのり、つぶれたような形で、頸部がほぼまっすぐ立ち上がり、口縁は端部を外に折り曲げた玉縁状を呈する15~16世紀代の備前の甕(第34図219)が1個体分が出土し、別個体ではあるが同時期の備前の甕(第34図216~218)が出土している。

SC4

曲輪Vの北縁、SC1の北東約8.8mに位置する。平面形は北-南方向に長軸1.49mを計る不整な楕円形状を呈する。検出面からの深さは1.82mを計る。遺物は最深部の床面から14世紀代の備前播鉢(第35図220)が出土している。

井戸跡(第7図)

曲輪Vはほぼ中央部分で、細長いパイプが地中に差し込まれ埋められた状態で確認された。周囲には扁平な板石状の砂岩が散らばっており、取り囲んでいたと推定される。重機による掘削を行ったが、深さ5m程掘り下げた時点でシラスの壁面が崩落したため調査を断念した。形状は円柱状である。掘削範囲での遺物等の出土はなく、使用された時期については不明である。

3 曲輪VI(第4・5・7図)

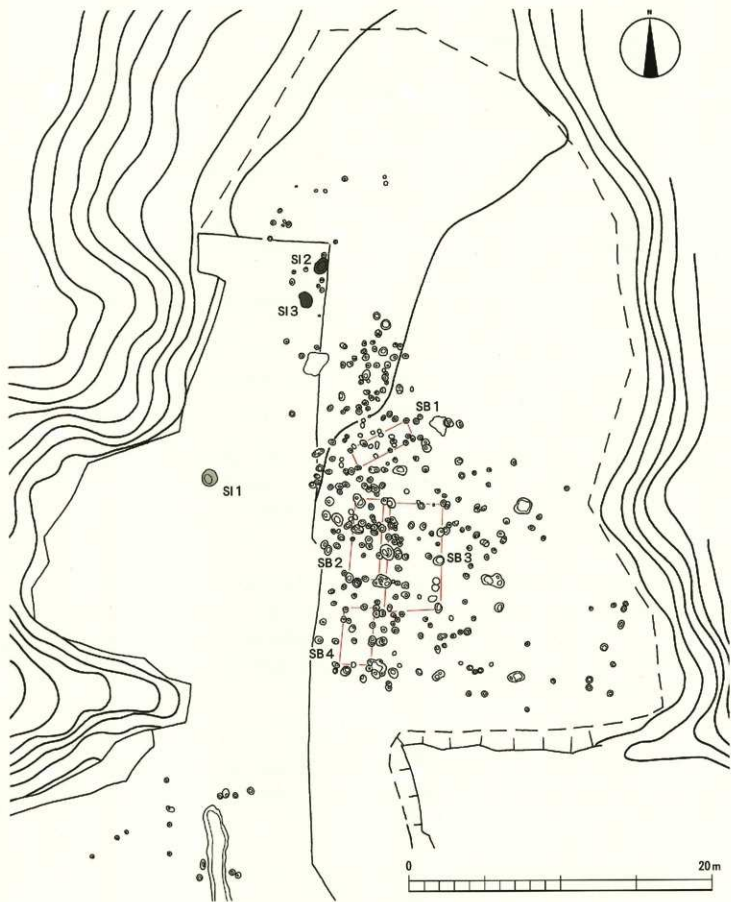
曲輪Vとの比高差は、曲輪V南端部で約3.5mを有する。(第8図)曲輪Vの西側から徐々に標高を減じていく。腰曲輪的な役割を持ち、面積は1,180㎡を計る。土坑3基と東西方向に主軸を持つ掘立柱建物2棟確認された。曲輪東端部で南西から北東にかけて傾斜し、現況で周囲約30mを計る土壘の一部と見られる高まりがあり、第7図の調査範囲外B地点の壁面に断面逆台形状を呈する掘り込みが見られ、虎口の造り替えの可能性も考えられる。

(1) 土壘(第4・7・9図)

土壘は、曲輪VIの東側に位置する。現況で基底部幅7m、高さ2.5mを計る。東に向かって幅が狭くなり起伏も緩やかになる。本来は曲輪の東端部(調査区外)へも続いていた可能性も考えられるが削平が著しく現況では判然としない。土壘は、曲輪基底部の宮崎層群と直上のシラス地山層ま



第5図 曲輪IV~VI 遺構分布図 (1/400)



第6図 曲輪Ⅳ 遺構分布図 (1/250)

で造成を行い、築造したものと思われる。

(2) 道1 (第4・7・10図)

道1は東に向かって標高を減じていく曲輪VIの東側に位置し、比高差3.5mを計る曲輪Vへ入って行く想定される。本来は土塁を回り込んで曲輪内IVへ入って行くと考えられるが、現況は一部拡張されており虎口の形状は確定できない。

(3) 道2 (第4・7図)

道2は主郭から南に延びる曲輪の南端と曲輪VIIIの北側下に挟まれ、一端曲輪VIの方向へ登り、途中で北へ方向をかえ道1と直交する。木材搬出道として開削されたため、現況はL字状を呈し曲輪Vへ直接入り込んでいる。そのため曲輪へのルートとしては想定されるが、曲輪VIとの関係については疑問が残る。本来の道の規模や虎口などの形状については不明である。

(4) 掘立柱建物 (SB) (第7・17図)

曲輪VIでは、掘立柱建物総数6棟のうち2棟 (SB5・6) を確認した。計測値の詳細については、表1を参照されたい。掘立柱建物跡は東側から西側に向かって湾曲する曲輪の形状に沿って確認されている。SB5・SB6ともに2間×3間の規模をもち、SB5は身舎の西側に庇をもつ。ともに柱穴は円形で深さも約30cm程度を基本としている。柱穴からの遺物の出土はみられず、根固めの石なども検出されていない。

(5) 土坑 (第7・21図)

曲輪VIでは、3基 (SC23~25) の土坑が確認された。全て曲輪Vの南側で、掘立柱建物の北側に位置している。床面はシラス基盤層に達しており、覆土もシラスが主体である。主軸は、南北方向であり、遺物の出土はみられない。形態の特徴的なものを記述する。規模や形態などの詳細については表2を参照されたい。

SC25

曲輪Vの南西から南に延びる高まりを断ち割っている作業中に検出された。検出面からの深さは、最深部で3.8mを計る。南北方向に長軸があり、断面形は階段状を呈する。階段は南側から北側に向かって降りており、現状で5段確認される。平面形態は入り口と考えられる南側がすぼまり北側に向かってふくらむ不整な楕円形である。検出面で土師器小片が確認されたものの、覆土中や床面からの遺物の出土はみられない。

4 曲輪VII (第4・11図)

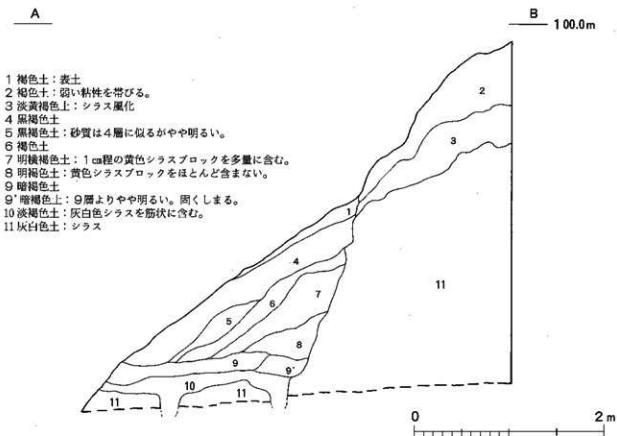
曲輪VIIと比高差7mを計り西に向かって細い尾根状に延びる。面積は182㎡。曲輪VIIIとの間に幅約2m、深さ1.5~2mを計る薬研堀の掘切が検出された。中央部分に地山が掘り残されている痕跡があり、土橋状の施設があった可能性がある。検出された遺構は掘切1本のみで、他の遺構および遺物は確認されていない。

(1) 掘切1 (第4・11・12図)

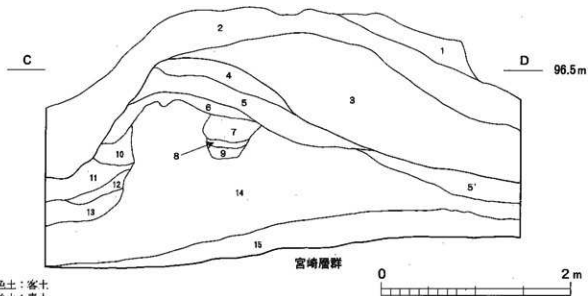
北西へ延びる曲輪VIIの東端に位置し、曲輪VIIIとの間の丘陵基部を南北に分断している。シラス層の尾根を「V」字状に深く掘り込んだ片薬研状の掘切である。長さ(底面の長さ)約6.5m、最大幅2.6m、底面幅約1.4m、中央部の深さは3.6mを計る。床面は、中央部から北西に向かって緩やか



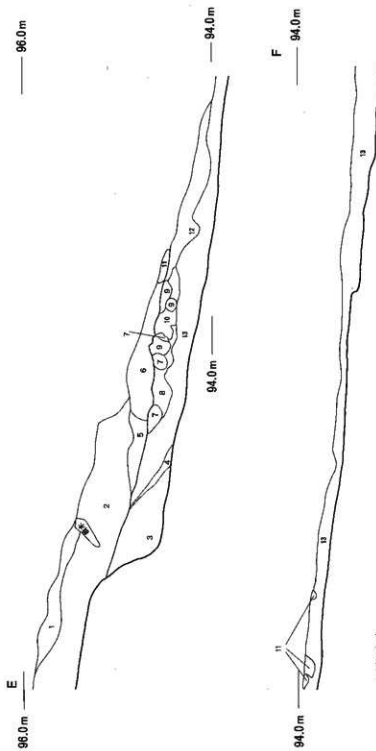
第7図 曲輪V・VI 遺構分布図 (1/250)



第8図 曲輪V-VI断面図 (1/40)

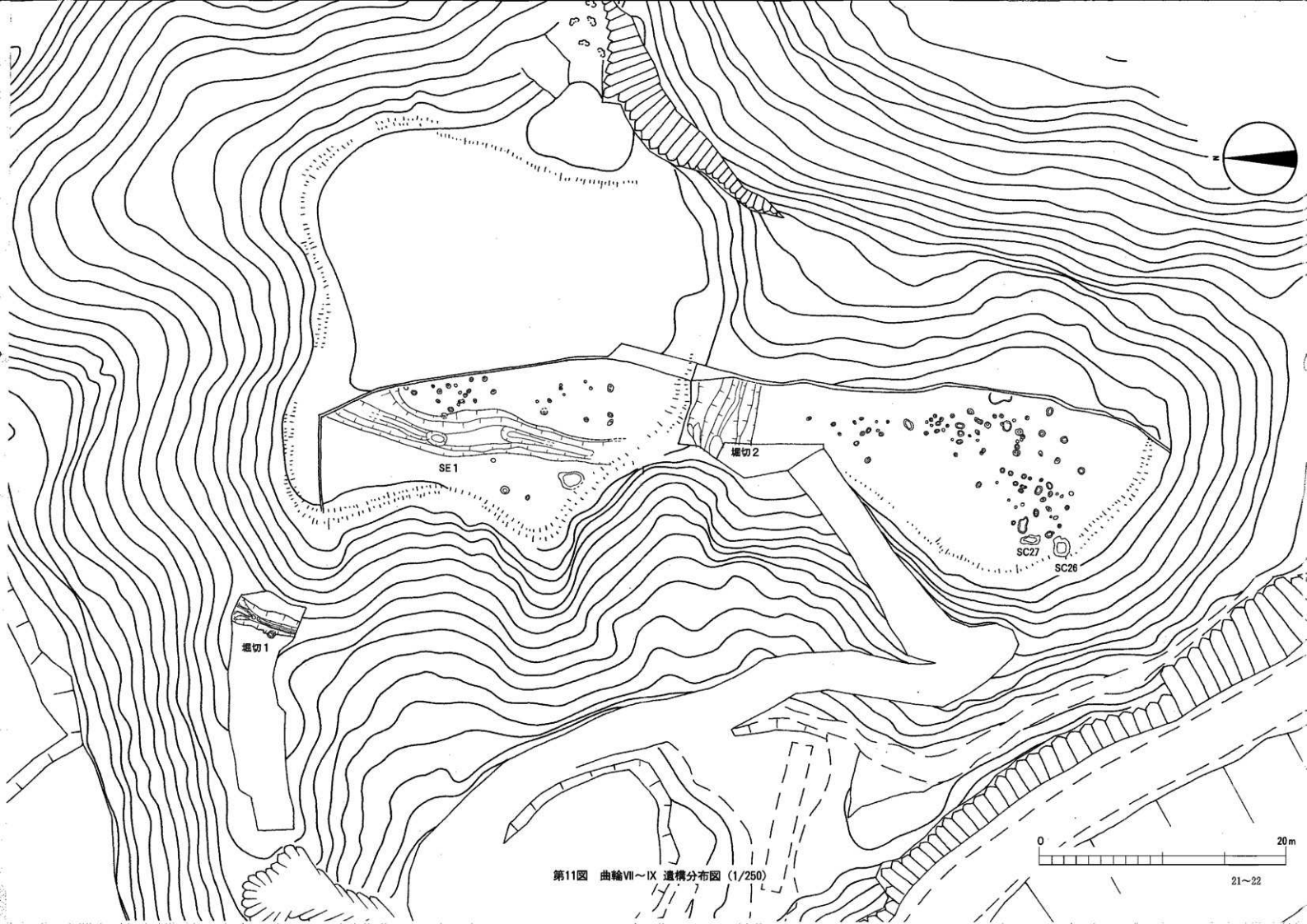


第9図 曲輪VI 土壘断面図 (1/40)

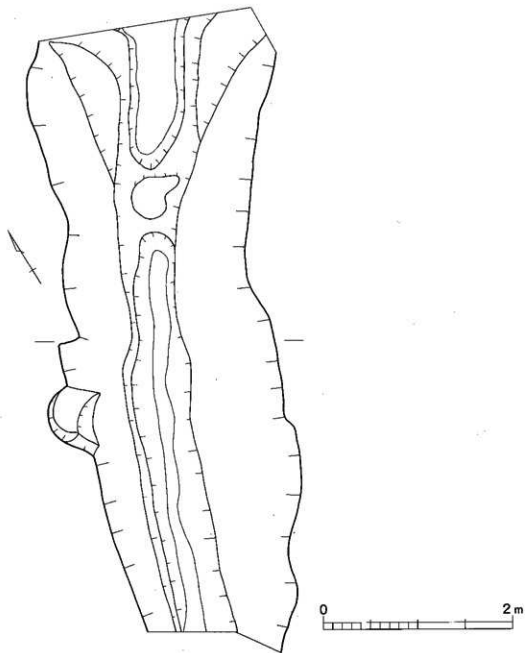


- 1 黒褐色土：シラスの風化？
- 2 淡黄褐色土：淡黄褐色土（シラス風化？）をまばらに含む。
- 3 灰白色土：淡黄褐色土（シラス風化？）をまばらに含む。
- 4 灰白色土：淡黄褐色土（シラス風化？）を多量に含む。
- 5 乳白色土：淡黄褐色土（シラス風化？）を多量に含む。
- 6 明褐色土：2~5cm程度の淡褐色ブロックをまばらに含む。
- 7 灰白色土：ブロックを含む。
- 8 乳白色土：砂質は7層に似る。褐色ブロックを含む。
- 9 灰白色土：褐色ブロックを少量に含む。
- 10 褐色ブロック
- 11 淡黄褐色土ブロック
- 12 灰白色土：褐色・乳白色ブロックを少量含む。
- 13 灰白色土：シラス（地山）

第10図 曲輪VI 道1土層断面図 (1/40)

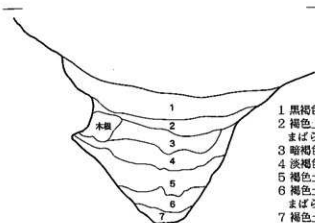


第11図 曲輪VII~IX 遺構分布図 (1/250)



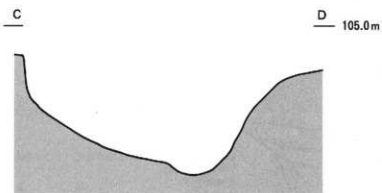
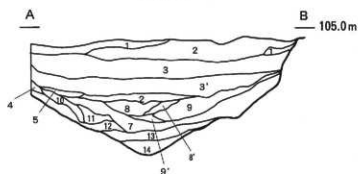
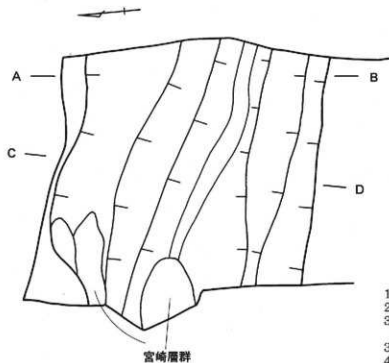
0 2m

— 99.2m



- 1 黒褐色土：表土
- 2 褐色土：1 cm程の黄褐色砂質土（シラス風化？）のブロックをまばらに含む。
- 3 暗褐色土
- 4 淡褐色土
- 5 褐色土
- 6 褐色土：1 cm程の黄褐色砂質土（シラス風化？）のブロックをまばらに含む。弱い粘性あり。
- 7 褐色土：1 cm程の黄褐色砂質土（シラス風化？）のブロックをまんべんなく含む。

第12図 曲輪VII 堀切1平面・土層断面図 (1/40)



- 1 黒色土：表土
- 2 黒褐色土：表土
- 3 暗褐色土：黄色シラス粒をまばらに含む。
- 3' 暗褐色土：黄色シラス粒を少量含む。
- 4 淡黄色土：シラス・硬質
- 5 暗褐色土
- 6 褐色土：砂質は5層に似る。灰白色シラスブロックを混入する。
- 7 暗褐色土：砂質は5層に似るがやや潤る。
- 8 褐色土：炭化物を少量混入する。
- 8' 褐色土：炭化物を多量に混入する。
- 9 灰褐色土：炭化物をまばらに含む。
- 9' 灰褐色土：9層よりやや暗く粘性をもつ。
- 10 明褐色土：2cm~5cmの黄色シラスブロックを少量混入する。
- 11 明褐色土：2cm~5cmの黄色シラスブロックを多量混入する。
- 12 明褐色土：黄色・灰白色シラスブロックを混入する。(硬質)
- 13 明褐色土：黄色・潤った灰白色シラスブロックを混入し、粘性を帯びる。
- 14 橙色シラス



第13図 曲輪Ⅶ 堀切2平面・断面・土層断面図 (1/80)

な傾斜をもつ。曲輪Ⅶ側から掘底床面の標高差は5.8mを計る。堀切1の床面からへら切り底の土師器坏(第24図1)が出土している。

5 曲輪Ⅶ(第4・11図)

谷を挟んで曲輪Ⅴの南に位置し、面積1,145㎡を計る。東側の調査区外に周囲約30m、現況の高さ1mの見張り台と考えられる壇上の高まりがあり、里道を見下ろせる位置関係にある。

南側では地山成形後、造成されたと考えられる土塁の痕跡が認められた。西側縁辺にはわずかながら周囲より高い部分があり土塁の痕跡と考えられたが、土層の断面では確認することはできなかった。曲輪内からは、ほぼ南北方向に延びる溝状遺構1条(SE1)が糸切り底の土師皿を伴って検出された。柱穴は検出されるものの調査区が曲輪の一部であるため掘立柱建物として復元できるものはなかった。柱穴は主として調査区の東側に検出されることから、建物本体の存在はさらに曲輪の東に広がるものと推定される。

(1) 堀切2(第4・11・13図)

堀切2は曲輪Ⅶと曲輪Ⅸを分断している。堀切2の東側は調査対象区域外のため不明であるが、曲輪Ⅸにとりつくと考えられる道への延長が想定される。調査区内における堀切2の長さは6m、最大幅は5.6mを計る。床面幅は底面から立ち上がる角部は既に崩れていると思われ、形状は箱築研状で1.2m幅に掘っている。深さは曲輪Ⅶ側で5.2m、曲輪Ⅸ側で2mを計る。床面は検出面から3mを計り基盤層の宮崎層群に達している。丘陵基部や尾根側から曲輪Ⅶへの進入は非常に困難を伴うと推定される。堀底付近の埋土から15世紀代の龍泉窯系の盤(第33図205)が出土している。

(2) 1号溝状遺構(SE1)(第11・14図)

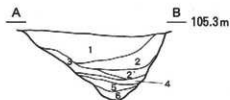
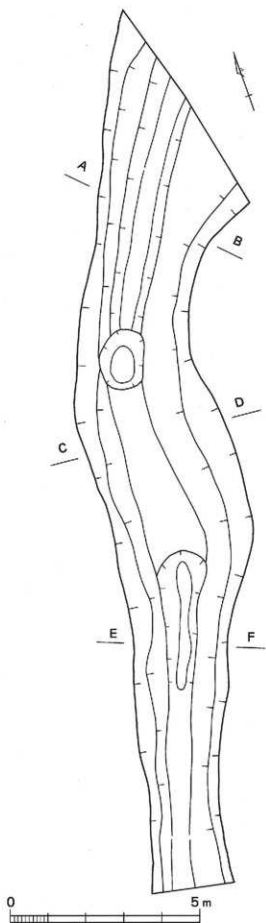
SE1は曲輪Ⅶの西縁、調査区の中央を曲輪Ⅸに向かってN32°Eの方向に延びる。床面は北側から南側にかけて深くなり、断面形は「U」字状を呈する。覆土は褐色土・黄色土・シラスのブロックを多量に含んだ層が主体となり、比較的短時間に埋没したような状況である。覆土中から土師器皿(第24図24)が1点出土している。計測値は、長さ約21.5m、最大幅約4m、深さは最深部で1.8mを計る。溝状遺構より西側は曲輪縁辺にかけて遺構密度は低く、遺物の出土もほとんど見られない。

6 曲輪Ⅸ(第4・11図)

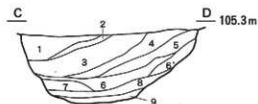
曲輪Ⅶの南側に位置し標高にして約2m程低く、東側に腰曲輪を有する。面積は500㎡。遺構はピットが数個と土坑が2基確認された。西側の斜面部分については、工事に伴う土取りによって下段の曲輪の形状および範囲は確定できなかった。曲輪の南縁には土塁の痕跡が一部現存しており、他方の縁辺部にも若干の高まりも見られることから曲輪の四周に土塁が巡っていた可能性が高いと考えられる。

(1) 土坑(SC)(第11・23図)

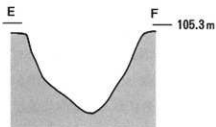
曲輪Ⅸの西縁辺で2基の土坑(SC26・27)を確認した。ともに土塁状の痕跡の残る高まりの内側に南北に並ぶように位置している。遺物を伴っているものはなく、土坑の性格については不明である。遺構の計測値や詳細については表2を参照されたい。



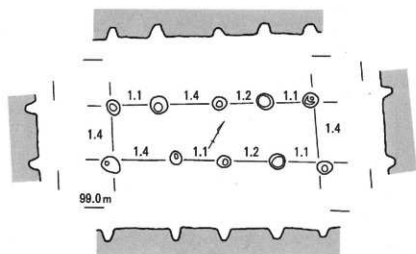
- 1 褐色土：やや橙色味を帯びて濁る。
- 2 明褐色土：1cm程の黄色シラスブロックをわずかに含む。
- 2' 明褐色土：1cm程の黄色シラスブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土：土師器片混入。1cm程の黄色シラスブロックを含む。
- 4 褐色土：青灰色粘質土・黄色土・褐色土のブロックをまんべんなく含む。
- 5 褐色土：2cm程の黄色シラスブロックを含む。
- 6 明褐色土：5層よりやや明るく粘性を帯びる。



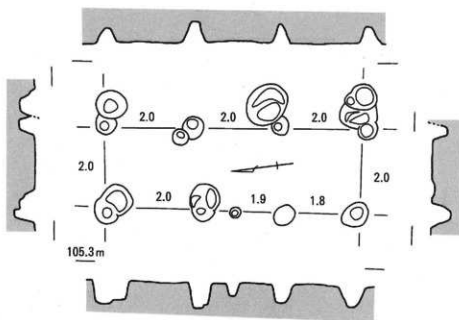
- 1 褐色土：やや橙色味を帯びて濁る。
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土：土師器片混入。1cm程の黄色シラスブロックを含む。
- 4 明褐色土：1cm程の黄色シラスブロックをわずかに含む。
- 5 明褐色土：1cm程の黄色シラスブロックを多量に含む。
- 6 褐色土：青灰色粘質土・黄色土・褐色土のブロックをまんべんなく含む。
- 6' 褐色土：青灰色粘質土・黄色土・褐色土のブロックを少量含む。
- 7 淡褐色土
- 8 褐色土：2cm程の黄色シラスブロックを含む。
- 9 明褐色土：8層よりやや明るく粘性を帯びる。



第14図 曲輪Ⅷ SE1平面(1/100)、断面・土層断面図(1/80)



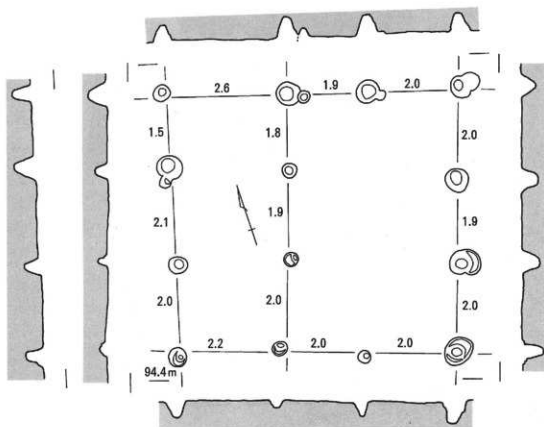
SB 1



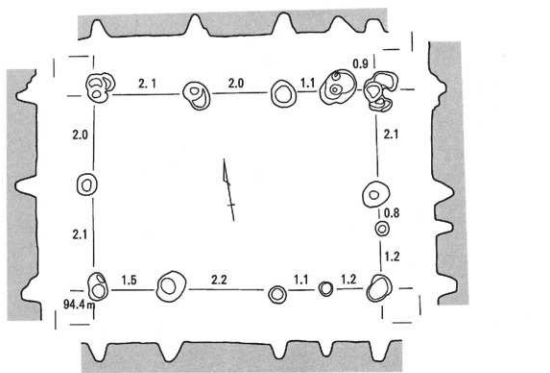
SB 2



第15圖 SB1・SB2 (1/80)



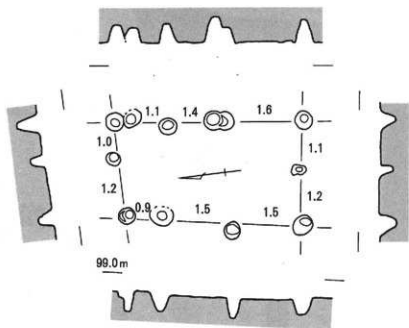
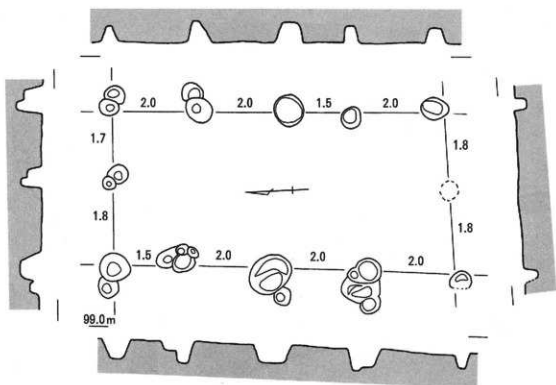
SB 3



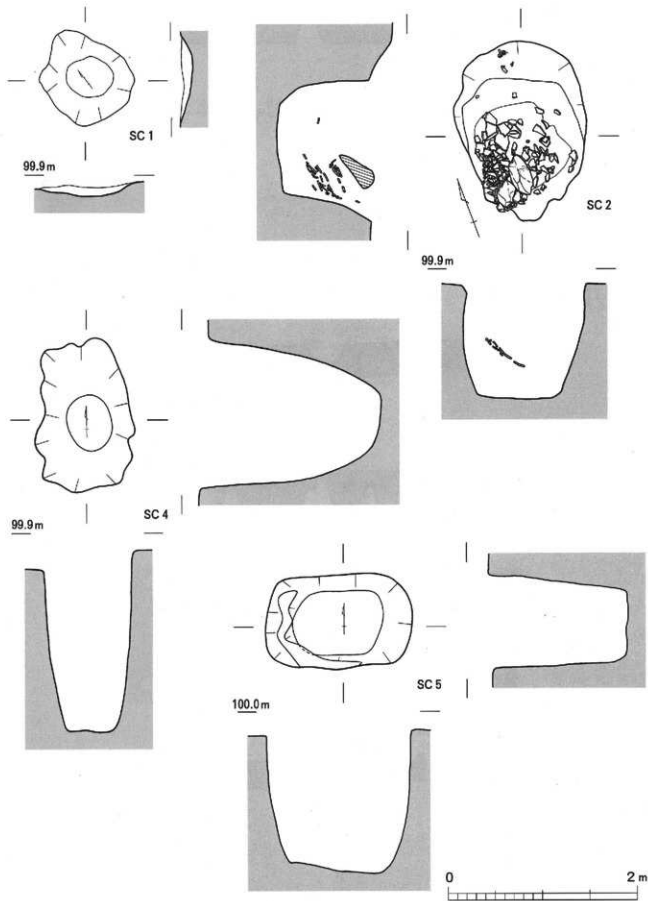
SB 4



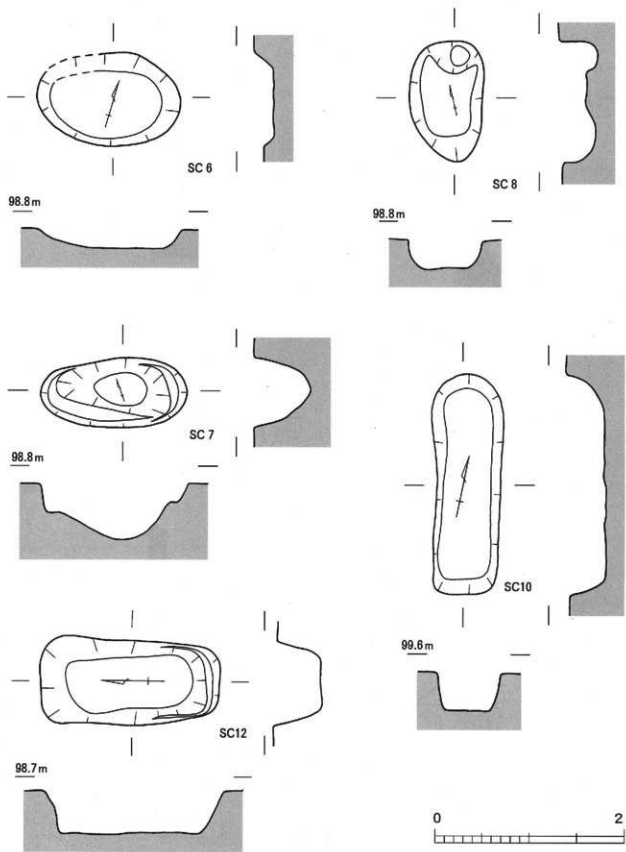
第16圖 SB 3・SB 4 (1/80)



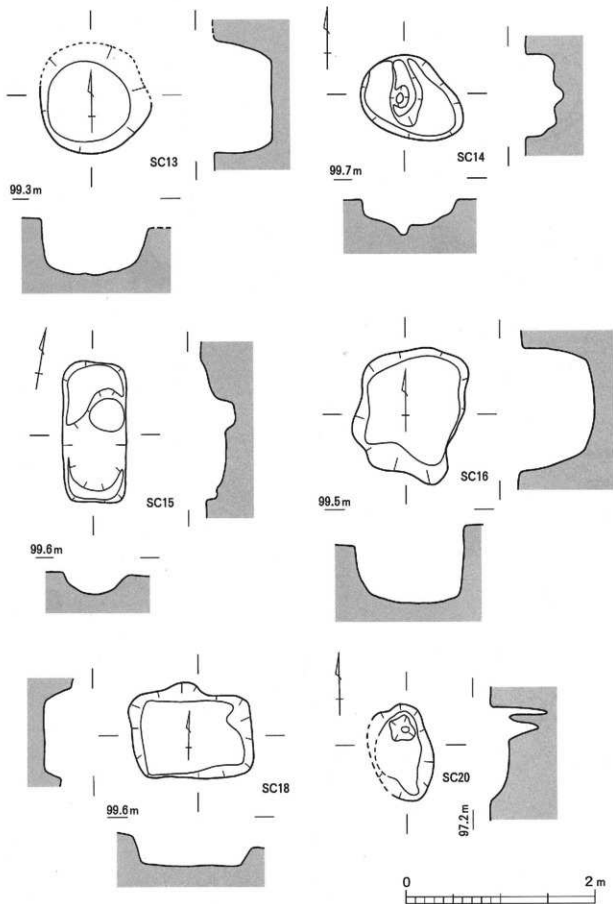
第17圖 SB5・SB6 (1/80)



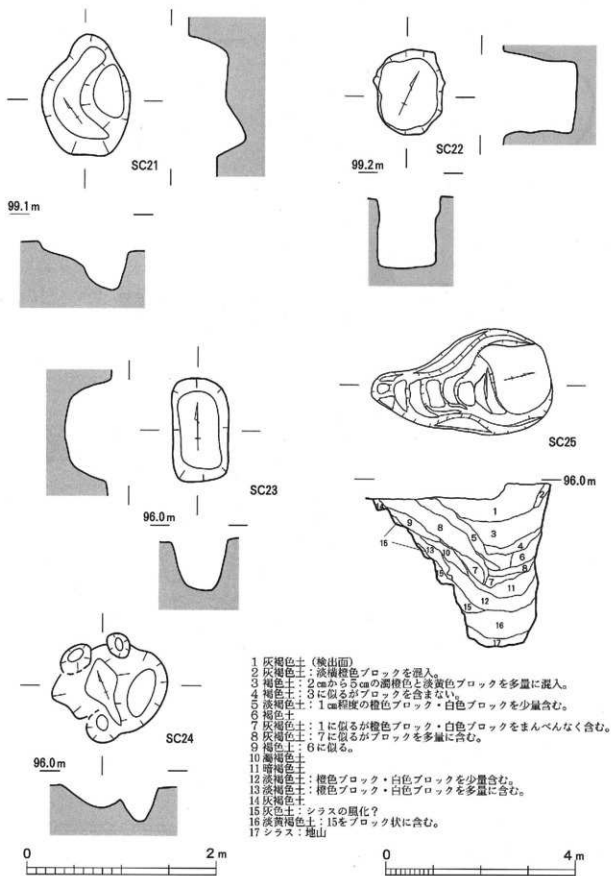
第18图 SC 1 • SC 2 • SC 4 • SC 5 (1/40)



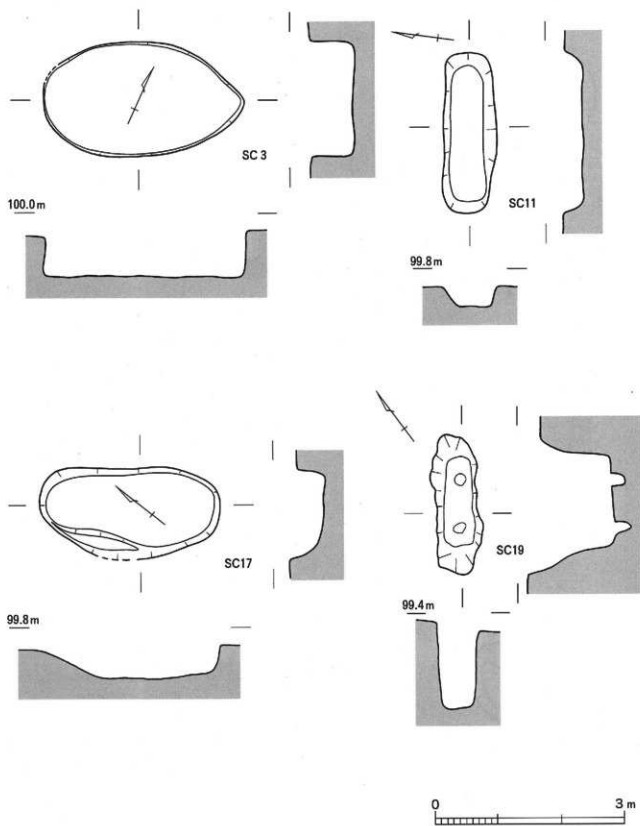
第19圖 SC 6~SC 8・SC 10・SC 12 (1/40)



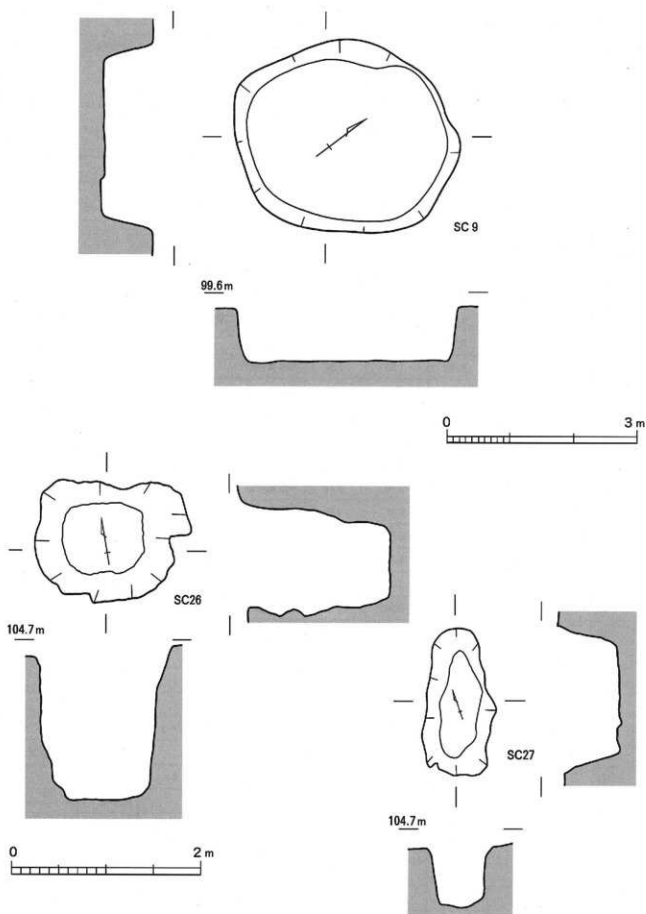
第20図 SC13~SC16・SC18・SC20 (1/40)



第21図 SC21~SC25 (SC21~SC24は1/40、SC25は1/80)



第22図 SC3・SC11・SC17・SC19 (1/60)



第23図 SC9・SC26・SC27 (SC9は1/60、SC26・27は1/40)

第1表 掘立柱建物 (SC) 計測表

遺構番号	検出位置	主軸方位	規模	桁行き(m)	梁行き(m)	面積(m ²)	重複関係	備考
SB1	曲輪IV	N-65°-E	1間×4間	1.4	4.8	6.7		
SB2	曲輪IV	N-7°-E	1間×3間	2.0	6.0	12.0	SB3	
SB3	曲輪IV	N-6°-E	2間×4間	3.6	7.5	27.0	SB2	
SB4	曲輪IV	N-9°-E	2間×3間	2.3	4.0	9.2		
SB5	曲輪VI	N-20°-E	2間×3間	4.0	4.9	19.6		西庇
SB6	曲輪VI	N-5°30'-E	2間×3間	4.1	6.0	24.6		

第2表 土坑 (SC) 計測表

遺構番号	検出位置	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面プラン	断面形態	備考
1	曲輪V北西	1.01	0.94	0.12	不整形	皿形	土製人形
2	曲輪V南西	1.90	1.40	1.11	不整形槽形、北側にテラス	箱形	備前壁
3	曲輪V南西	3.28	1.78	0.76	不整形槽形	箱形	
4	曲輪V北縁	1.49	1.02	1.82	不整形円形	柱状	
5	曲輪V北西	1.52	1.08	1.49	隅丸長方形	柱状	
6	曲輪V南東	1.46	0.87	0.15	槽円形	皿形	
7	曲輪V南東	1.52	0.78	0.43	槽円形、東西に弧状のテラス	舟底形	
8	曲輪V南東縁	1.06	0.64	0.33	隅丸方形	不定凹形	
9	曲輪V北東	3.54	3.10	0.84	不整形槽形	箱形	
10	曲輪V東	2.24	0.66	0.35	隅丸長方形	箱形	
11	曲輪V中央	2.46	0.83	0.33	隅丸長方形	舟底形	土製人形
12	曲輪V南東	1.87	0.89	0.50	隅丸長方形、東側にテラス	舟底形	
13	曲輪V東	1.18	1.10	0.55	円形	箱形	
14	曲輪V北東	1.14	0.90	0.25	不整形、弧状のテラス2	不定凹形	
15	曲輪V東	1.49	0.70	0.32	隅丸長方形、南北にテラス	不定凹形	
16	曲輪V北西縁	1.38	1.14	0.70	不整形	箱形	
17	曲輪V北	2.82	1.64	0.50	槽円形、西側にテラス	箱形	
18	曲輪V南	1.30	1.01	0.27	不整形	舟底形	
19	曲輪V南縁	2.22	0.84	1.56	不整形長方形、床面にピット2	箱形	
20	曲輪V西側	0.97	0.57	0.42	不整形槽形	不定凹形	土製人形
21	曲輪V西縁	1.34	0.86	0.48	不整形槽形、西側にテラス	不定凹形	
22	曲輪V北東	0.90	0.75	0.76	円形	箱形	
23	曲輪VI北	1.23	0.70	0.54	隅丸長方形	舟底形	
24	曲輪VI北	1.26	1.17	0.27	不整形槽形、ピットとの切合	不定凹形	
25	曲輪VI北	3.80	2.20	2.04	不整形槽形	階段状	
26	曲輪VI西縁	1.45	1.26	1.65	不整形	柱状	
27	曲輪VI西縁	1.58	0.74	0.67	不整形槽形	箱形	

7 出土遺物

(1) 土師器

本遺跡で出土した土師器は、そのほとんどが坏・皿類である。底部の切り離しがヘラ切りであるものは坏・皿ともに出土は少量で、多くが糸切り底である。分布は北側の城の曲輪Ⅳ・Ⅴ、および南側の城の曲輪Ⅶに集中している。ヘラ切り底を（Ⅰ類）、糸切り底を（Ⅱ類）とし、底部からの立ち上がりを3種類（1：直線的なもの、2：やや内湾気味のもの、3：やや外反するもの）、口縁部の形態を2種類（a：口縁端部がシャープなもの、b：口縁端部が丸いもの）に分けて分類を行った。

坏Ⅰ類（第24図）

Ⅰ類の坏は出土個体数が少ない。その中で分布は南側の城である曲輪Ⅶからの出土が8割を占める。法量により大きく2つに分かれる。

I-A-1（口径9.7～10.8cm 器高2.9～3.2cm 底径5.7～6.8cm）

底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に立ち上がりそのまま口縁に至る。

a 口縁端部がシャープなもの 1

b 口縁端部が丸みをもつ 2

1・2ともに底部の切り離し痕跡が薄い円盤状を呈する

I-B-1（口径12.1～13.8cm 器高3.3～4.6cm 底径7.6～9.0cm）

底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に外側へ開く。

a 口縁端部がシャープなもの 3～7

b 口縁端部が丸みをもつ 8～10

3・4・6・8は底部が円盤状の高台を有する。

6・8は灯明皿として使用されていたと思われ、6は内面8は内外面ともにススの付着が認められる。

皿Ⅰ類（第24図）

ヘラ切り底の皿は、比較的法量がそろった小皿とそれ以外のやや大きめの皿に分けられる。

I-A-1（口径6.2～7.1cm 器高1.3～1.7cm 底径4.7cm～5.7cm）

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に短く立ち上がる。

b 口縁端部が丸みをもつ 11・12

I-B-2（口径7.2～7.8cm 器高1.4～1.9cm 底径5.4cm～6.3cm）

底部と体部の境は丸みもち、やや内湾気味に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 16

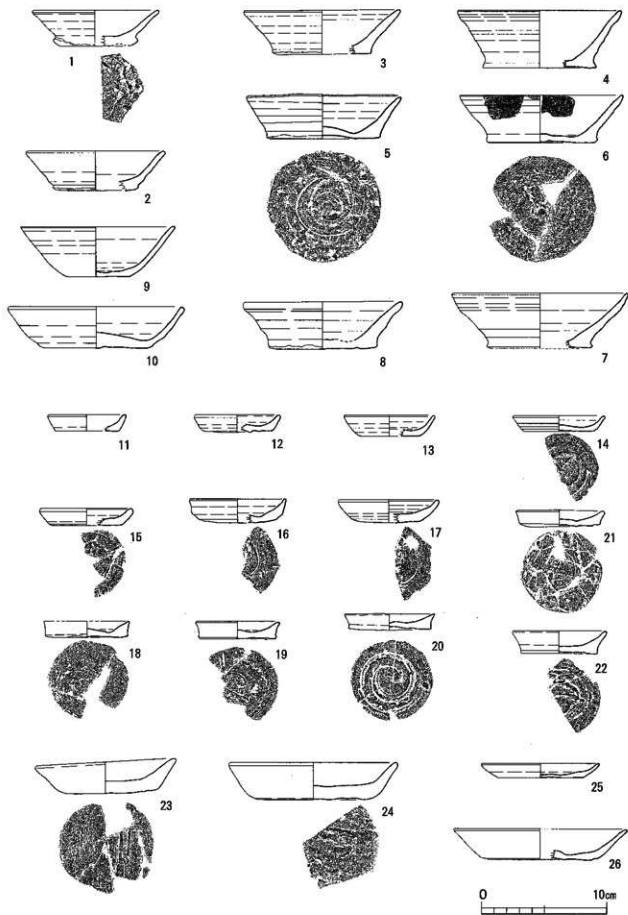
b 口縁端部が丸みをもつ 13～15・17

I-C-3（口径6.7～7.2cm 器高1.3～1.8cm 底径6.0cm～6.6cm）

底部と体部の境は明瞭で、体部はやや外反気味に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 18～20

b 口縁端部が丸みをもつ 21・22



第24図 土師器実測図(1)(1/3)

23~26は、法量にまとまりがみられないやや大きめの皿である。23・24はやや厚手で、体部が外反気味に立ち上がる。25・26は薄手で体部が直線的に立ち上がる。

坏II類 (第25図~第27図)

II類は法量により大きくA~Cの3つのまとまりに分けられる。それを底部付近の調整や立ち上がり、口縁部の形態により細分を行う。

法量	A (口径10.8~11.8cm 器高2.8~3.5cm 底径5.6~8.0cm)
	B (口径11.8~12.5cm 器高3.2~3.8cm 底径5.0~6.5cm)
	C (口径12.5~13.5cm 器高4.0~5.0cm 底径6.5~7.0cm)

底部からの立ち上がり	1 直線的なもの
	2 内湾ぎみなもの
	3 やや外反するもの
口縁部の形態	a 端部がシャープなもの
	b やや丸みを帯びるもの

II-A-1 (口径10.8~11.8cm 器高2.8~3.5cm 底径5.6~8.0cm)

底部と体部の境は丸みをもち、直線的に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 27~33

b 口縁端部が丸みをもつもの 34~38

II-A-2 (口径10.8~11.8cm 器高2.8~3.5cm 底径5.6~8.0cm)

底部と体部の境は丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がる。底部が薄い円盤状となる。

a 口縁端部がシャープなもの 39

II-A-3 (口径10.8~11.8cm 器高2.8~3.5cm 底径5.6~8.0cm)

底部と体部の境は丸みをもち、やや外反気味に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 40~45

b 口縁端部が丸みをもつもの 46~48

aの40・41・43~45の底部に板目状の痕跡が認められる。

bの器壁は、厚手である。

II-B-2 (口径11.8~12.5cm 器高3.2~3.8cm 底径5.0~6.5cm)

底部と体部の境は丸みをもつ。やや内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至る。

a 口縁端部がシャープなもの 49~59

b 口縁端部が丸みをもつもの 60~66

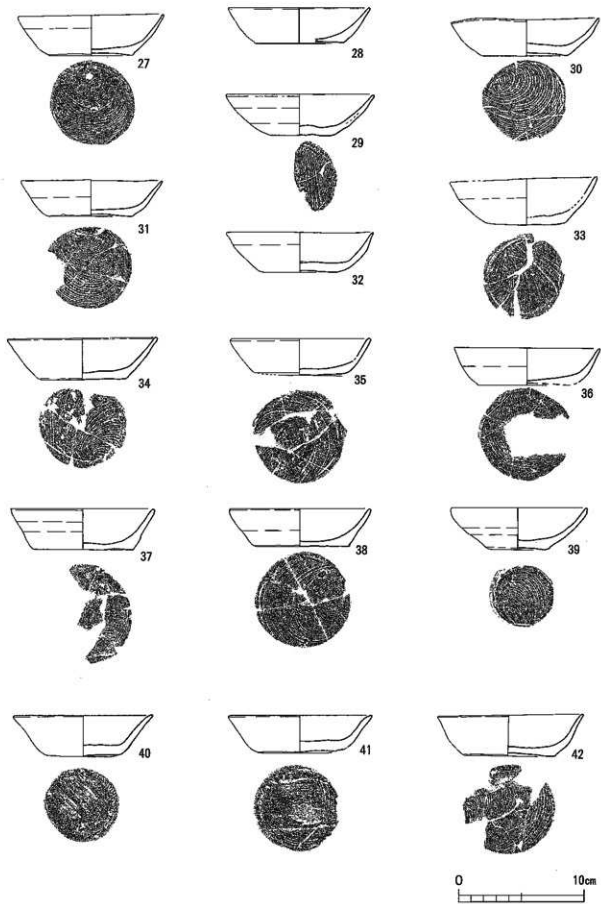
61は、II-A-2類に類似している。

II-B-3 (口径11.8~12.5cm 器高3.2~3.8cm 底径5.0~6.5cm)

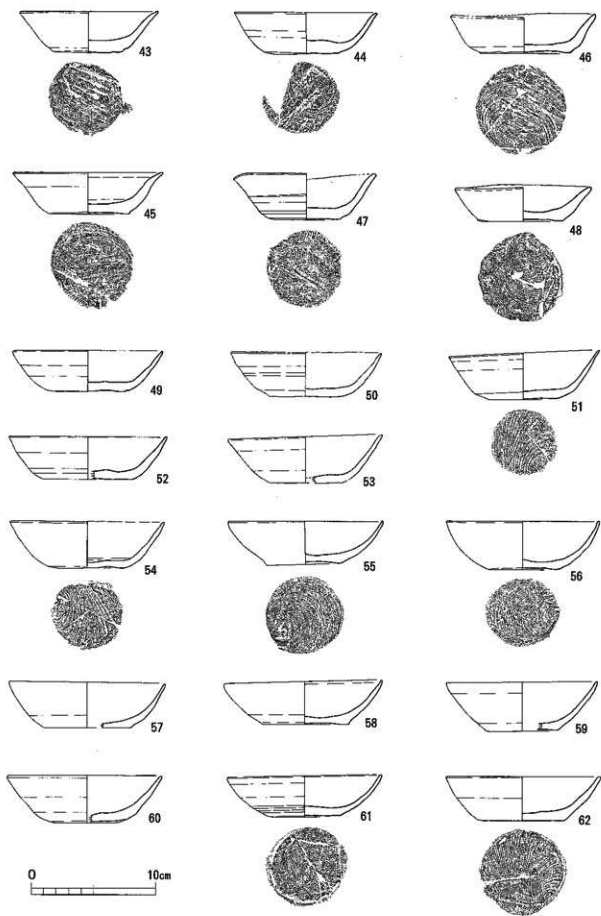
底部と体部の境は丸みをもって立ち上がり、胴部中半より外反する。

a 口縁端部がシャープなもの 67・68

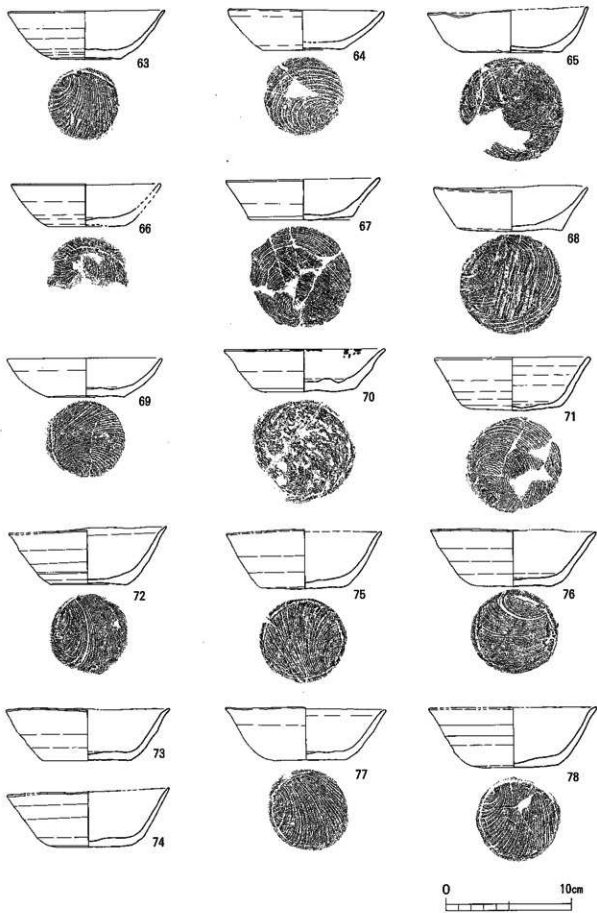
b 口縁端部が丸みをもつもの 69~71



第25図 土師器実測図(2)(1/3)



第26図 土師器実測図(3)(1/3)



第27图 土師器実測図(4)(1/3)

II-C-2 (口径12.5~13.5cm 器高4.0~5.0cm 底径6.5~7.0cm)

底部と体部の境は丸みをもつ。やや内湾気味に立ち上がり口縁部付近で短く外反する。

a 口縁端部がシャープなもの 72~74

b 口縁端部が丸みをもつもの 75~78

皿II類 (第28図~第31図)

糸切り底の皿は、本遺跡の土師器でもっとも出土点数が多く、中でも分布の9割以上が曲輪Vに集中している。法量は、大きくA~Dの4つのまとまりに分けられる。坯同様に底部付近の調整や立ち上がり、口縁部の形態により細分を行う。

法量 A (口径6.8~7.4cm 器高1.6~2.0cm 底径3.8~4.3cm)

B (口径7.4~7.9cm 器高1.4~1.8cm 底径4.0~5.5cm)

C (口径7.4~8.2cm 器高1.8~2.4cm 底径3.8~5.4cm)

D (口径10.9~13.4cm 器高2.1~3.4cm 底径5.8~8.0cm)

底部からの立ち上がり 1 直線的なもの
2 内湾きみなもの
3 やや外反するもの

口縁部の形態 a 端部がシャープなもの
b やや丸みを帯びるもの

II-A-1 (口径6.8~7.4cm 器高1.6~2.0cm 底径3.8~4.3cm)

底部と体部の境は丸みをもち、直線的に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 79~83

b 口縁端部が丸みをもつもの 84~87

II-A-2 (口径6.8~7.4cm 器高1.6~2.0cm 底径3.8~4.3cm)

底部と体部の境は丸みをもつ。やや内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至る。

b 口縁端部が丸みをもつもの 88~94

II-A-3 (口径6.8~7.4cm 器高1.6~2.0cm 底径3.8~4.3cm)

底部と体部の境は丸みをもち、やや外反気味に立ち上がる。

b 口縁端部が丸みをもつもの 95

II-B-1 (口径7.4~7.9cm 器高1.4~1.8cm 底径4.0~5.5cm)

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に短く立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 96~99

b 口縁端部が丸みをもつもの 100

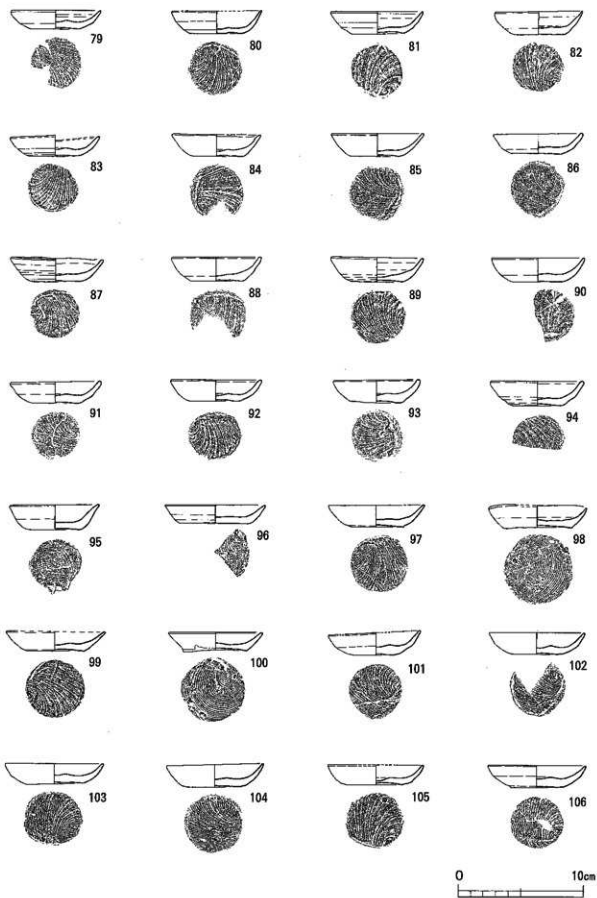
II-B-2 (口径7.4~7.9cm 器高1.4~1.8cm 底径4.0~5.5cm)

底部と体部の境は丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がる。

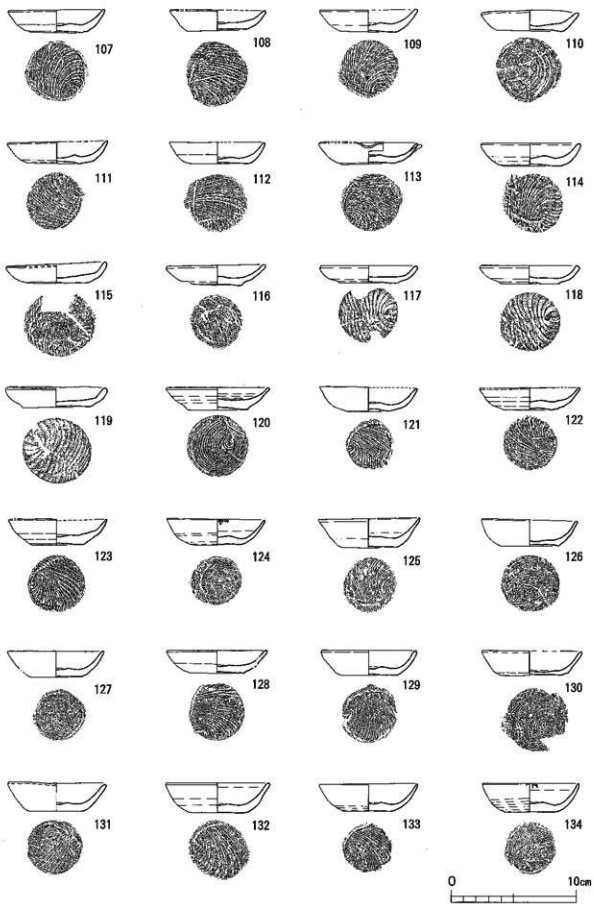
a 口縁端部がシャープなもの 101~106

b 口縁端部が丸みをもつもの 107~119

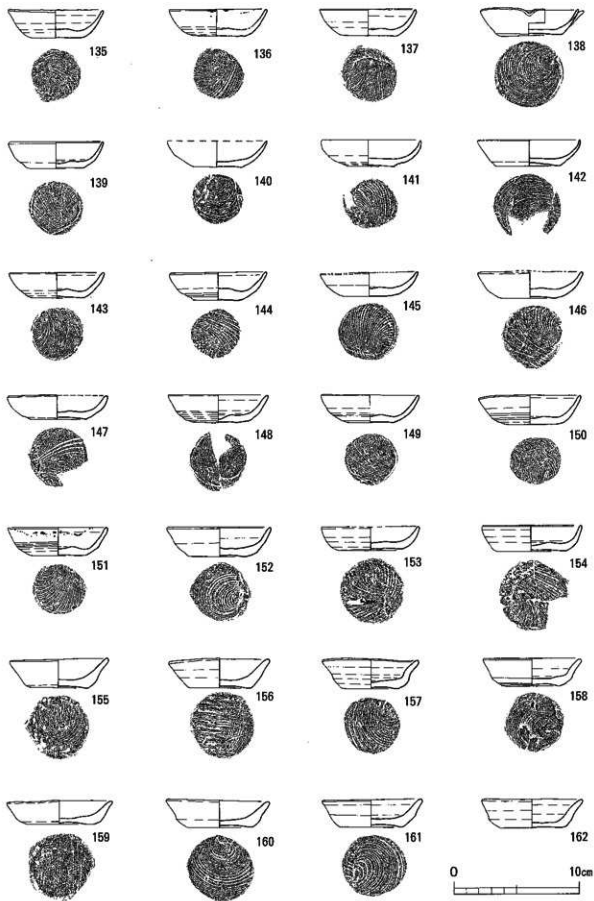
II-C-1 (口径7.4~8.2cm 器高1.8~2.4cm 底径3.8~5.4cm)



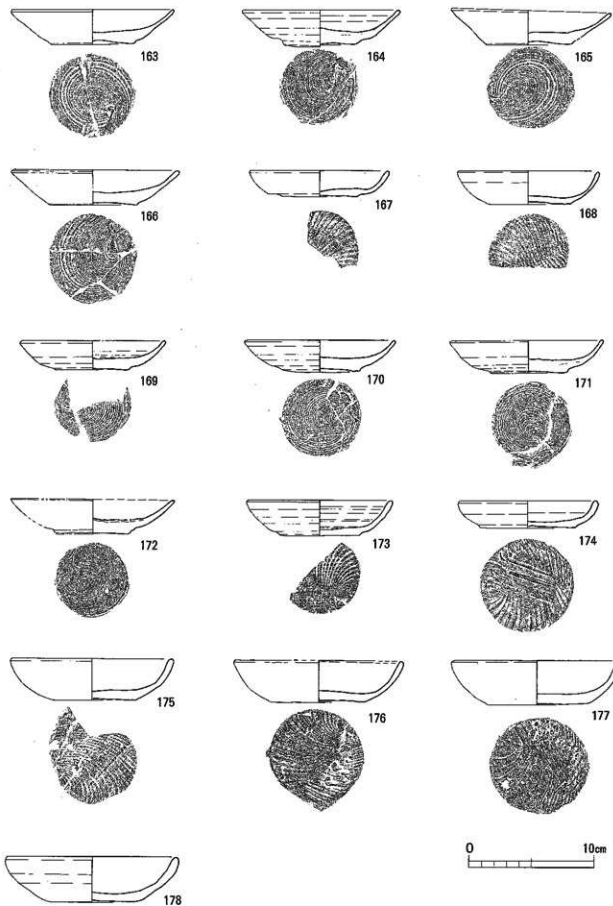
第28図 土師器実測図(5)(1/3)



第29図 土師器実測図(6)(1/3)



第30圖 土師器実測図(7)(1/3)



第31圖 土師器実測圖(8)(1/3)

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に短く立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 120~125

b 口縁端部が丸みをもつもの 126~132

II-C-2 (口径7.4~8.2cm 器高1.8~2.4cm 底径3.8~5.4cm)

底部と体部の境は丸みをもち、やや内湾気味に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 133~142

b 口縁端部が丸みをもつもの 143~154

138は、片口をもち、141・142は強く内湾する。

II-C-3 (口径7.4~8.2cm 器高1.8~2.4cm 底径3.8~5.4cm)

底部と体部の境は丸みをもち、やや外反気味に立ち上がる。

b 口縁端部が丸みをもつもの 155~162

II-D-1 (口径10.9~13.4cm 器高2.1~3.4cm 底径5.8~8.0cm)

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は直線的に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 163

b 口縁端部が丸みをもつもの 164~166

II-D-2 (口径10.9~13.4cm 器高2.1~3.4cm 底径5.8~8.0cm)

底部と体部の境は明瞭に分かれ、体部は内湾気味に立ち上がる。

a 口縁端部がシャープなもの 169~172

b 口縁端部が丸みをもつもの 167・168・173~178

173~178は、口縁部付近がやや厚手である。

(2) 陶磁器

本遺跡出土の陶磁器は、近世から近代の陶磁器の出土数が圧倒的に多く、中世に属する陶磁器は比較的数量が少ない。本城跡の存続期間を検証するために有効と思われる資料を選択して掲載した。

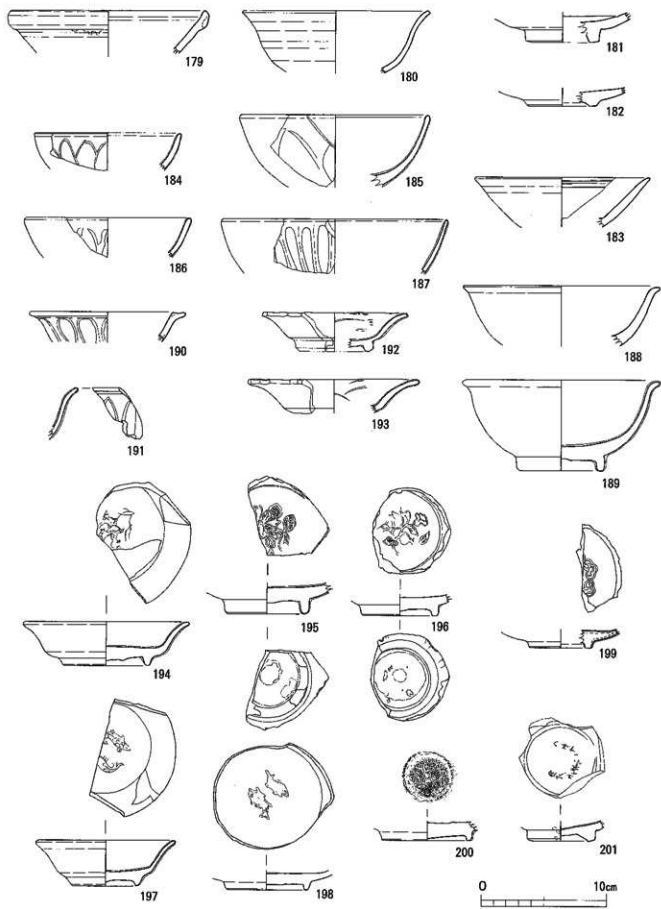
磁器 (中国産) (第32・33図)

白磁 (179~182・201)

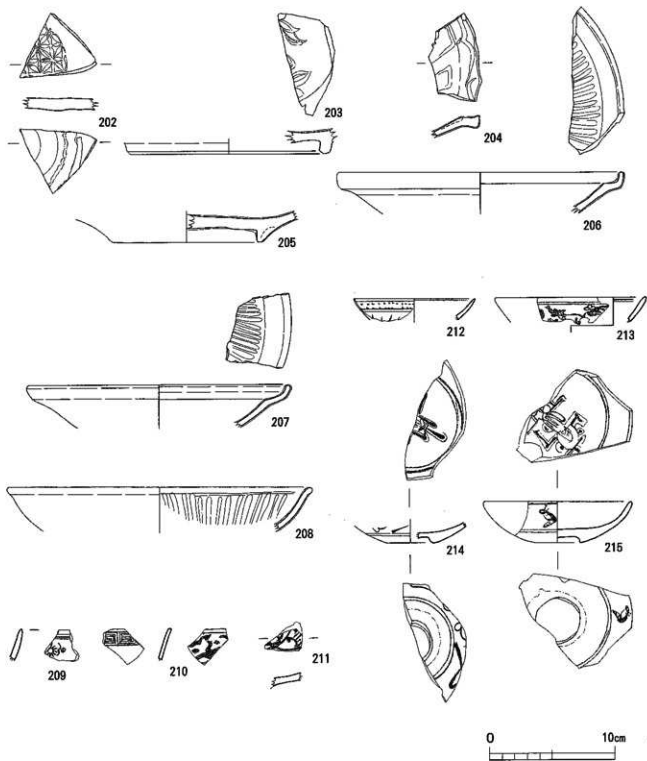
179は皿で口縁端部が玉縁状を呈する。180は口径14.8cmを計る端反碗、181は底部が露胎で見込み外周に線刻が見られる。201は見込みに陰刻で「福〇泰」の文字が認められる。

青磁 (184~200・202~209)

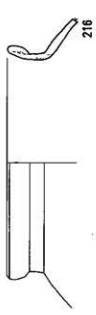
184~187は、龍泉窯の連弁をもつB類の碗である。184は簡略化された連弁が表現され185・186は片切彫である。183は高麗青磁の碗であり、口縁部内面に3条の回線が巡っている。209は外面に3条の回線と菊花文が見られる。188・189は龍泉窯系の端反碗である。190・191は折り縁口縁をもつ環で、190には上面に重ね焼きの痕跡が認められる。192・193は花文被花皿で内面にへら描き文が認められる。194~200は高台付皿である。194~196は見込みに印花文が施されている。199は雲かと思われる象嵌が見られる。197・198は見込みに双魚文、200は羯麻文が見られる。202~208は盤である。202・203は見込みに印花文が施される。204は、口縁が輪花状で内面にへら描き文が見られる。205~208は内面に見込みに向かって蓮花文が施される。206・207は口縁内面に段を有する。



第32图 陶磁器实测图(1)(1/3)



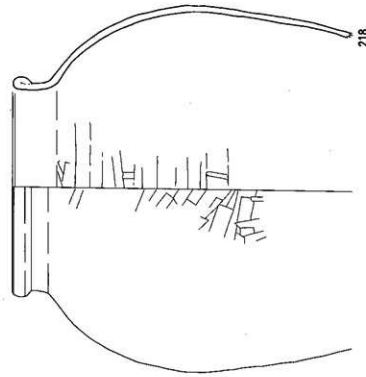
第33图 陶磁器实测图(2)(1/3)



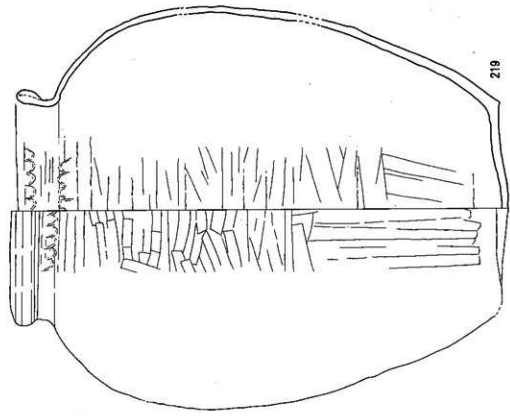
216



217



218



219



第34圖 陶磁器実測図(3)(1/6)

青花 (210~215)

210は外面に1条の回線と鶴文、内面に素描の雷文が表現される。211は小破片のため文様は判然としなが、唐草文かと思われる。212は口縁部外面に簡略化された青海波状文、胴部に芭蕉文が表現されている。213は外面に2条の回線と草花文が見られる。214・215は景德鎮の青花皿であり、蕃笥底を呈する小野正敏氏の編年のC類にあたる。214・215ともに2状の回線の中に唐人文が表現され、214は底部に砂目をはいだよな跡が残る。215は外面に梵字文が見られる。15世紀末~16世紀前半。

備前壺 (第34図)

216~219は備前焼の大甕である。216・217・219は曲輪VのSC2より出土している。頸部はほぼまっすぐ立ち上がり、口縁は端部を外に折り曲げた玉縁状を呈する。間壁忠彦氏のIV期の範囲に含まれると考えられる。15世紀~16世紀。219はほぼ正形に復元され口径36cm、器高79.1cm、底径34.1cmを計る。器胴外内面には叩きの後、刷毛目やヘラ削りが認められる。底部はややいびつであるが平底で丁寧なナデ調整が見られる。器胴上部がら下部にかけて丸く、やや古手の様相を示す。14世紀~15世紀。

播鉢 (第35・36図)

220~222は備前の播鉢である。220・221は口径がともに30cm程であり、口縁上面は少し外下がりの斜めに切ったような作りである。内面には下から上に向けて7本~12本1単位の櫛目が見られる。間壁忠彦氏のIII期の14世紀代。222は曲輪VIII・曲輪IX間の堀切2より出土し、口縁の平坦面がやや広く作られている。14世紀後半~15世紀。

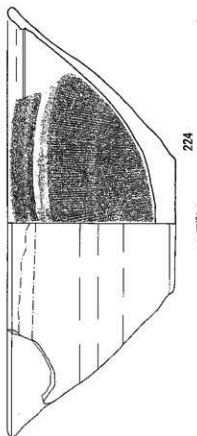
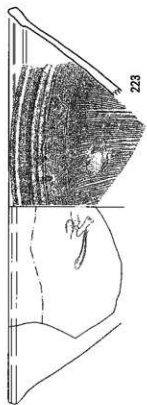
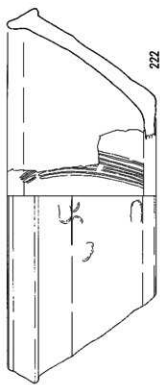
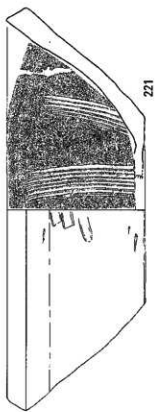
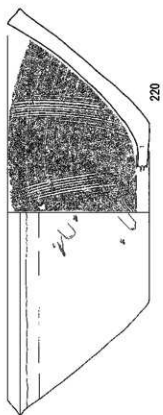
223~225は肥前系の播鉢である。口縁内面の肥厚が形骸化している。口縁部周辺のみを鉄軸を施している。223の櫛目は下から上に向けて施され、先端は引きばなしである。224の底部は平底で糸切りのままである。17世紀中頃~後半。225は櫛目1単位ごとの間隔が狭まり、上端は口縁下でナデそろえられる。227は堺・明石系の播鉢であり、口縁外帯の最下段が大きい。

229は薩摩系の播鉢である。口縁部は玉縁状を呈し、浅い片口が見られる。内外面とも施軸される。底部はしっかりとした貼付高台である。

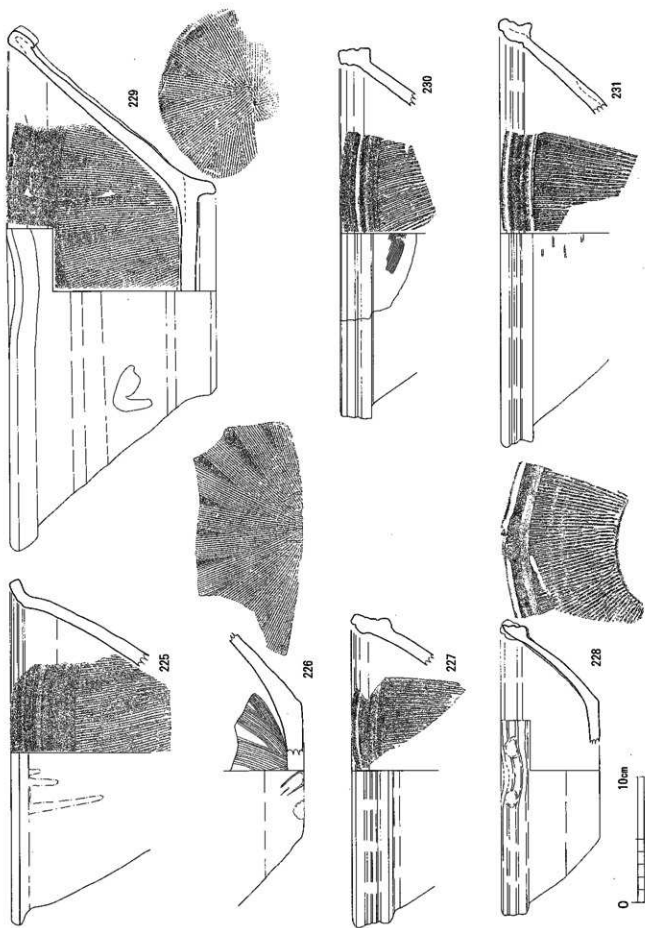
226・228・230・231は、時期および産地不明である。226は14本を1単位とする櫛目が見られる。228には片口が見られる。口縁外帯は3段に成形され口縁内凸帯が大きい。見込みには櫛目は見られない。230は口縁外帯は3段に成形される。口縁上面は斜め上方に平らに仕上げられる。櫛目は上端でナデそろえられる。231は口縁外帯は3段で成形され、最下部が最も大きく断面が三角形状になる。口縁上面は丸い。内面に7本を1単位とする櫛目が見られる。

近世陶磁 (第37図)

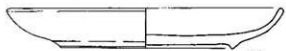
232は肥前の皿である。外面は胴部に唐草文が描かれ、高台脇に2条、高台に2条の回線が巡る。高台内にハリ目が見られる。内面は側面に墨弾きにより菊花文が表現される。見込みには草虫花文が表現される。17世紀後半~18世紀前半。233は陶胎染付の皿である。胴部に1条、高台に2条、高台内に1条の回線を巡らせている。裏銘に「渦福」字がある。234・235は肥前系のそば猪口である。234は、外面に菖蒲文、235は竹文が描かれている。18世紀代。237は瓶であり、外面に竹文が



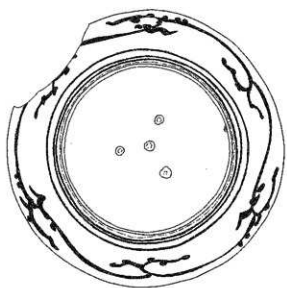
第35图 陶磁器実測図(4)(1/3)



第36图 陶磁器実測图(5) (1/3)



232



233



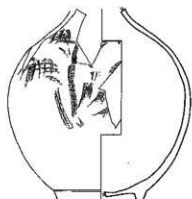
234



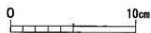
235



236



237

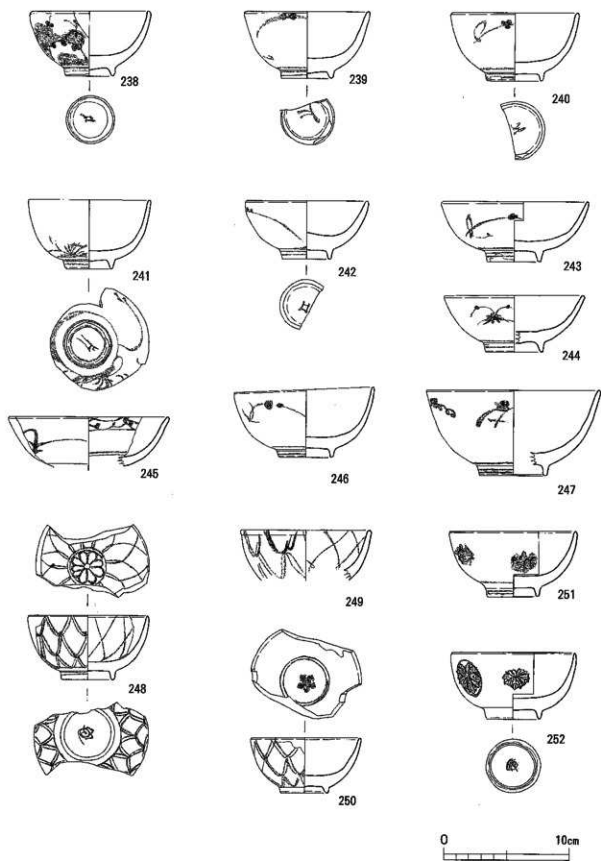


第37图 陶磁器实测图(6)(1/3)

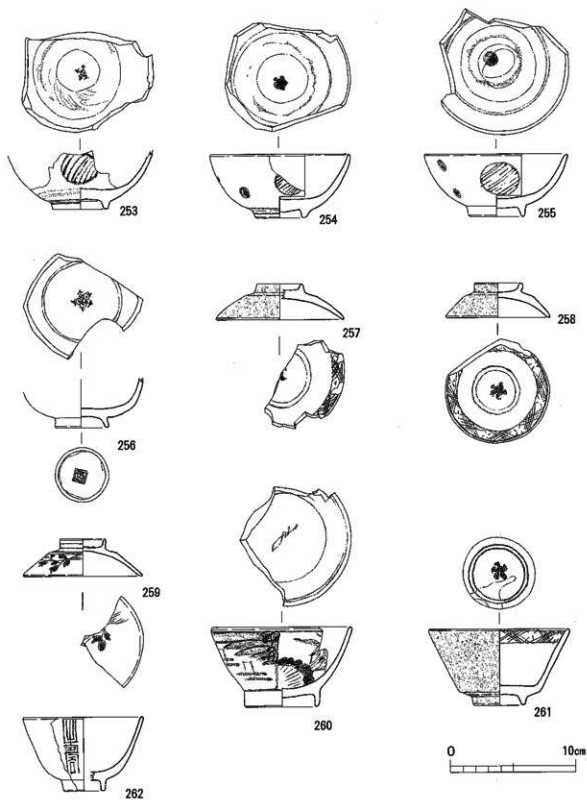
描かれている。

碗（第38～40図）

238～255は肥前及び肥前系の染付碗である。238は外面に雪梅花文が表現され、高台内に崩れた「大明年製」の銘款が入る。胎土に微細な灰色粒を含む。18世紀中頃。239・240は、外面に草花文、高台脇に1条、高台に1条の圏線が巡る。裏銘に「崩し大明年製」。18世紀後半。241は、外面に雪梅花文が描かれ、裏銘に「崩し大明年製」が見られる。高台畳付きは無軸である。17世紀末～19世紀後半。242は、外面に雪梅花文、高台脇に1条高台に2条の圏線が巡る。高台内に「崩し大明年製」。18世紀後半。243は、外面に草花文、高台脇に1条高台に2条の圏線が巡る。内面は、見込みを蛇の目軸剥ぎの後施軸している。18世紀後半。244は外面に折梅花文が描かれ、内面は見込みを蛇の目軸剥ぎの後施軸（泥糞）している。245は外面に草文、口縁部内面に文様帯が見られる。内面胴部に2重圏線、見込みは蛇の目軸剥ぎである。17世紀後半～19世紀。246は、外面に折梅花文、247は草花文。ともに高台脇に1条の圏線や高台に2条の圏線が見られ、見込みには蛇の目軸剥ぎの後、施軸される。248～250は、外面に二重網目文が描かれる。248は高台内に「渦福」銘の落款が入る。内面は一重網目文で見込み2条の圏線の中に菊花文が表現される。1700～1750年代。249は、内面に一重網文。18世紀前半。250は、見込みの2重圏線内にコンニャク印判で五弁花文が施されている。18世紀前半～18世紀中頃。251の外面にはコンニャク印判で、松文が施される。18世紀後半。252は、外面胴部にコンニャク印判で蕙文と内に蕙文を表現した丸文を交互に配置している。裏銘に崩れた「渦福」が見られる。253は外面に丸文・蛍文が描かれ、胴部に飛びガンナ2条を巡らせている。見込みはコンニャク印判で五弁花文が施され、蛇の目軸剥ぎの後鉄葉。18世紀後半。254・255は、ともに外面には丸文・蛍文が描かれ、内面には見込みに254は1条、255は2条の圏線の中にコンニャク印判による崩れた五弁花文が施されている。18世紀後半～19世紀。256は青磁染付碗である。高台内部のみ染付軸が施され、「二重方形枠内渦福」銘が見られる。見込みには手描五弁花文が描かれる。1760～1780年代。257は朝顔形碗の蓋と思われる。外面の高台畳付は、露胎で砂が付着している。内面は口縁部に四方禪文が巡り、見込みには2条の圏線内にコンニャク印判による五弁花文が施される。18世紀後半。258・259は広東碗の蓋である。258は内面に四方禪文が描かれ、見込みには2条の圏線が巡りその中にコンニャク印判で五弁花文が施される。1760～1780年代。259は外面は高台に2条、天井部に1条の圏線が巡り、肩部と内面に草花文が描かれている。260は広東碗である。外面は区画割りをを行い、その中に山水文が描かれている。見込みに崩れた鷺文が見られる。261は青磁染付碗である。高台内のみ染付軸が施される。236は青磁染付の筒形碗である。内面の口縁部に四方禪文が巡り、見込みの2重圏線内にコンニャク印判による崩れた五弁花文が表現される。18世紀半ば～18世紀後半。262は、外面に寿字文が見られる。19世紀前半。263・264は嬉野内野山窯産である。263は端反碗で、内外両面に銅緑軸が施される。17世紀後半。264は外面は銅緑軸、内面は透明軸である。17世紀末～18世紀。265・266は、京焼ないしは京焼風の碗である。内外面に貫入が入り、高台畳付きは露胎である。17世紀末。267は白磁軸がかかり、外面には軸ちぢれが見られる。内面には蛇の目軸剥ぎを施している。肥前系ないし在地産か。18世紀代。268・270は内外面とも透明軸で、貫入が入る。268の見込みは蛇の目軸剥ぎである。269は朝



第38图 陶磁器实测图(7)(1/3)



第39图 陶磁器实测图(8)(1/3)

顔形碗で、高台畳付には釉剥ぎが見られる。在地産か。271は肥前系の碗で、やや小型である。内外面とも透明釉であり、貫入が見られる。見込みは蛇の目釉剥ぎである。18世紀前半。

皿 (第40・41図)

272~274は溝縁皿である。272・274は内外面ともに灰釉で、貫入が見られる。1610~1630年代。273は、透明釉が施される。

275~280は肥前陶器の三島手の皿で、外面は鉄釉と灰緑色釉、内面は象嵌で白化粧を塗った後透明釉が施されている。275・276は内面胴部に化粧土による刷毛目が見られ、見込みに砂目痕が4カ所確認できる。17世紀前半。277~280は内面にスタンプ印花文による象嵌が見られる。17世紀後半。281・282は唐津刷毛目皿で、内面に化粧土を施した後刷毛目を行っている。281は、口縁が輪花となる。外面は化粧土を施した後、刷毛目を行っている。17世紀後半~18世紀前半。282の高台は露胎となる。内面は見込みに蛇の目釉剥ぎを行った後、錆塗りを施している。18世紀前半。

火入れ (第41図)

283は火入れである。化粧土刷毛目を行った後、鉛釉を施している。口唇部に釉剥ぎが見られる。

甕 (第42図)

284~287は肥前系の甕である。底部まで復元できる個体はない。備前焼の大甕をまねた時期のものである。285は口縁外端部におさえによる凹みが見られる。内面にはあて具の痕跡が確認できる。17世紀前半。286・287には内面に格子目叩きが見られ、面に2条の縄状突帯が見られる。286は外器面にも格子目叩きが見られる。口縁部上面は釉剥ぎされ、重ね焼きのための貝目が見られる。17世紀後半に位置づけられる。

壺 (第42図)

288は薩摩系の壺である。頸部がすばまって段をもち、緩やかに内湾しながら外方へ延びる。18世紀後半。289~291は沖縄の壺屋焼の荒焼である。口縁は玉縁状を呈し、肩部に「耳」がつく。内外面とも赤褐色を呈し胎土中に石灰質(珊瑚)を含んでいる。18世紀中頃~19世紀。

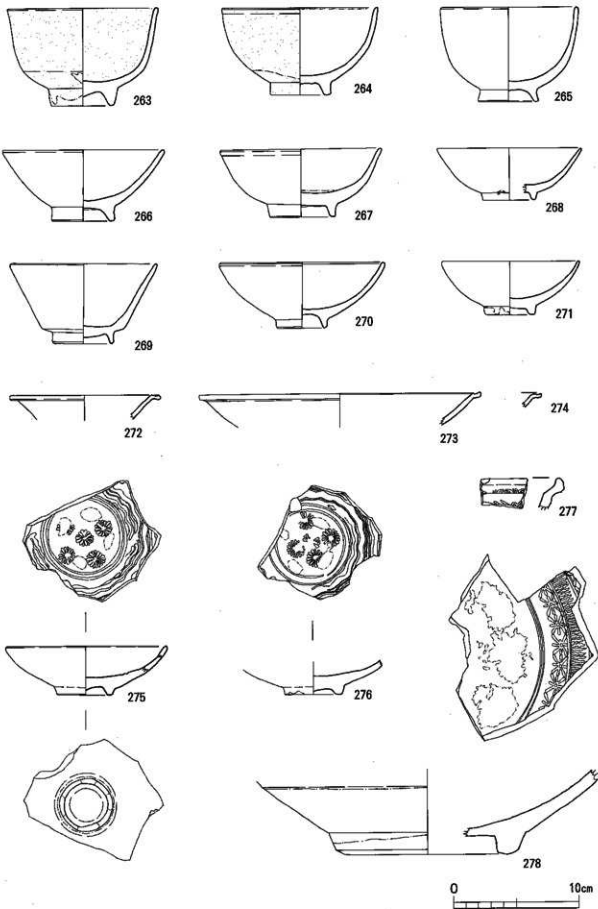
鉢 (第42図)

293は、肥前系の片口鉢である。16世紀末~17世紀。

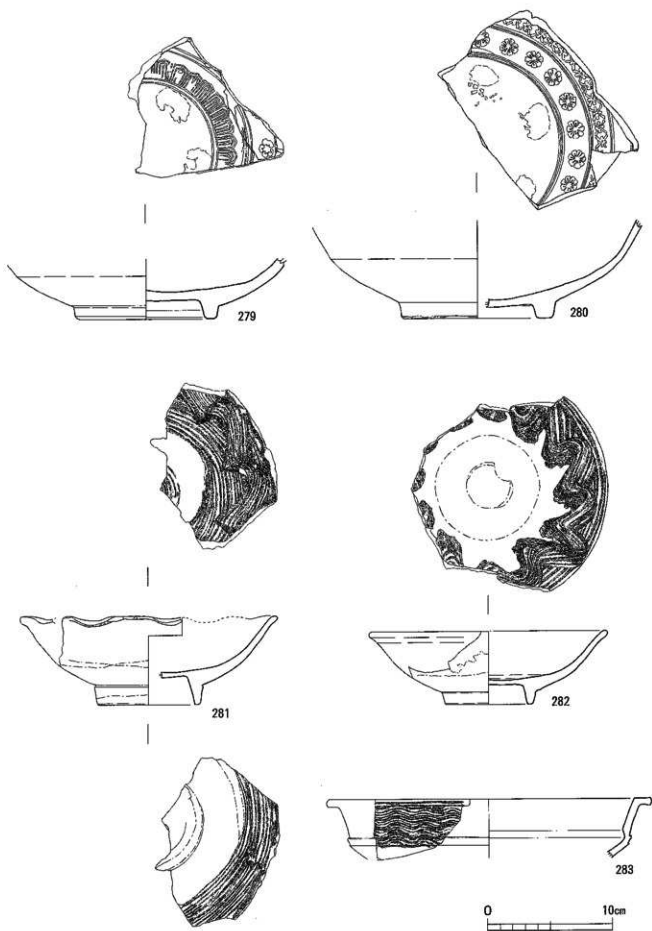
土瓶 (第43図)

本遺跡の土瓶は蓋の数量から20個体以上の出土がある。完形となるものはなく全体の形状や蓋と身のセット関係については不明である。時期および産地については不明である。弦用の耳や若干くぼんだ底部の破片なども出土しているが、ここでは蓋・注口・体部についての大まかな分類を行う。

蓋1類	つまみがボタン状になるもの	294
蓋2類	つまみが丸いもの	295~298
注口1類	上方に立ち上がり先端部の屈曲が緩やかなもの	299~302
注口2類	短く外上方に立ち上がり先端部の屈曲がきついもの	303・304
体部1類	体部が球形をなすもの	300・305・306
体部2類	体部がそろばん玉状になるもの	307~309



第40图 陶磁器実測図(9)(1/3)



第41图 陶磁器实测图(10)(1/3)

焙烙 (第43図)

310～313は、土師質の焙烙である。体部との境に緩い稜を持ち、外内面ともナデ仕上げである。器壁に穿孔が施されている。

高台付皿 (第44図)

314は、肥前系志田窯の高台付皿である。高台内を削り込んで薄くしている。見込みに蛇の目釉剥ぎが施される。17世紀末～18世紀前半。

灯明皿 (第44図)

315・316は、陶器製の灯明皿で内面に泥釉が施されている。口縁部付近に煤が付着している。底部は糸切りで在地座か。18世紀～19世紀。317は瀬戸の灯明皿である。外面は口縁部以外は露胎である。

天目 (第44図)

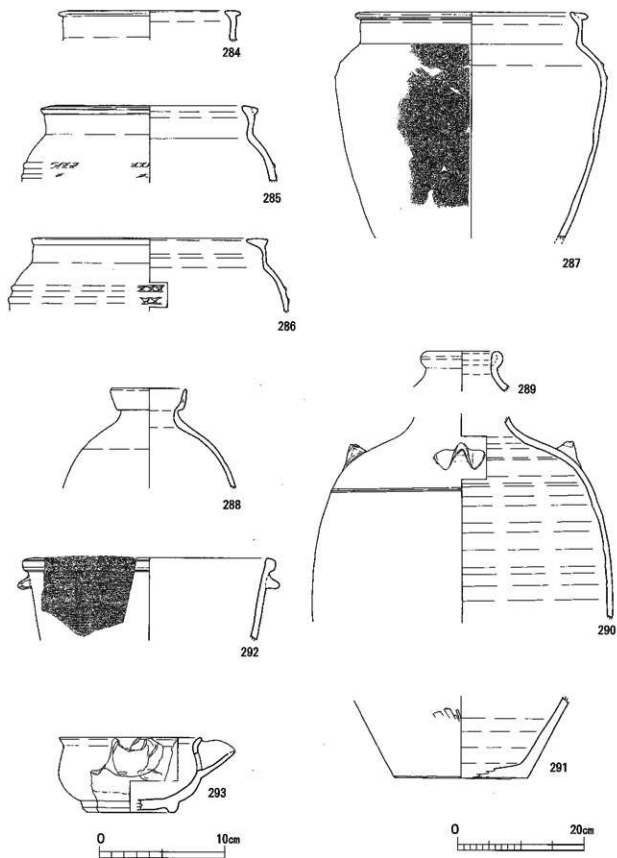
319～321は、瀬戸美濃の天目である。319は内外面とも鉄釉の上から別の釉(天目釉か)を掛け流している。

瓶 (第44図)

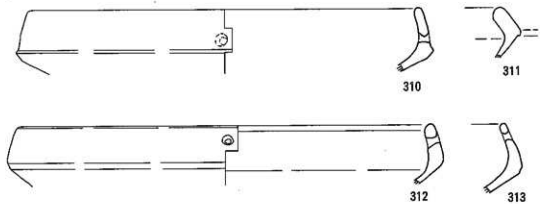
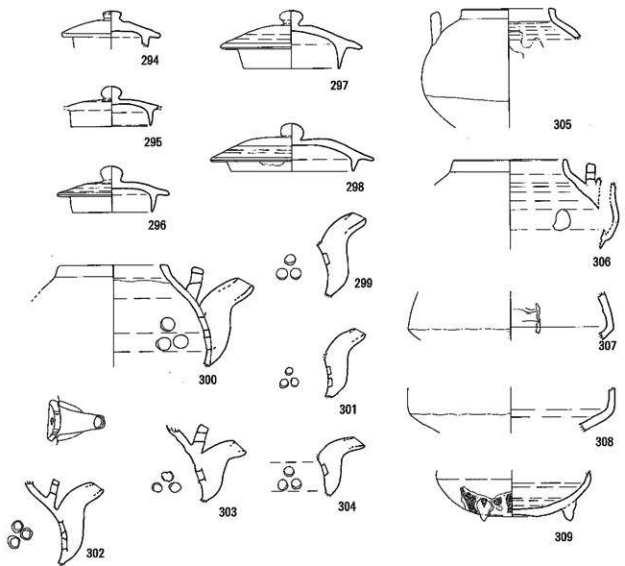
322～324は、18世紀代の肥前系の仏花瓶である。322・323は同一個体と思われる。322は広口形である。口縁部上部に白化粧土、その上から鉛釉をかける。頸部に耳の痕跡が見られる。323は、外面に透明釉を疊付以外に施釉し、その上から鉛釉を胴部上位に施している。内面は底部中央に自然釉が認められる。324は頸部に把手(鳥か?)を横位に貼り付ける。内面は頸部まで薄く施釉されている。325・326は武雄系の瓶である。外面頸部付近は黒釉で胴部は、白化粧土刷毛目である。口縁部はラッパ状に開き、底部は碁笥底を呈するものと思われる。17世紀末～18世紀前半。327は脚が三足で半筒形輪高台を有する。17世紀中頃。

火鉢 (第44図)

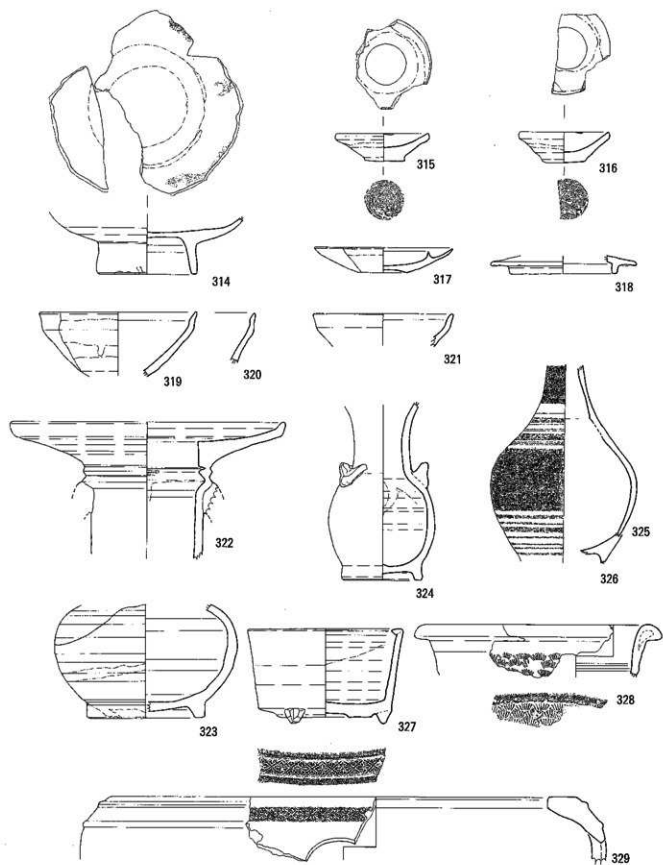
328は瓦質の火鉢で口縁端部は丸くおさまられる。外面にスタンプによる印花が施されている。329は奈良火鉢である。口縁部の外面に2条の凸帯が廻り、その中にスタンプで印花が押捺される。



第42図 陶磁器実測図(11)(293は1/3、他は1/6)



第43图 陶磁器实测图(12) (1/3)



第44图 陶磁器实测图(13)(1/3)

(3) 金属製品

銭貨 (第46図～第47図 第14表)

銭貨29点を採掘した。このほか18点出土しているが銭文不明のものがある。曲輪から出土したものが大半を占めている。銭貨29点の銭文と鑄造年号を見ると中国銭は20点、本邦銭は9点出土している。中国銭は330の開元通宝のみが唐銭でそれ以外は、北宋銭と明銭に分かれるが、圧倒的に北宋銭の出土が多い。330は背上に「月」が見られる。年代順に北宋銭は、天聖元宝(331)、皇宋通宝(332)、至和元宝(333)、嘉祐通宝(334)・熙寧元宝(335～337)、元豊通宝(338)、元祐通宝(339・340)、元符通宝(341)・政和通宝(342)である。明銭7点は全て洪武通宝(343～349)である。346・348の洪武通宝は、背文に「治」の字が認められる。中国銭20点がそれぞれ中国銭なのか模倣銭なのか判断しがたい。また鑄造年代と城の活動期が重ならないこともあり、年代(鑄造年代)より下がり貨幣として本邦銭と同時に流通していたのか、出土状況からは推測できない。

本邦銭は寛永通宝(350～356)と半銭貨(357)、一銭貨(358)である。350には背文に「文」の字が見える。寛永通宝の鑄造は寛永三年(1626)年にはじまり、約240年間鑄造していた。本城跡の曲輪や堀切および斜面から出土している状況から、貨幣以外の使用目的は推測できない。

出土した曲輪を概観すると、曲輪Ⅴが最も多く12点を数え、北宋銭5点(331・335・338・341・342)と明銭の洪武通宝7点(343～349)全てが確認されている。曲輪Ⅵからは北宋銭のみ7点(332～334・336・337・339・340)出土している。その他にもかろうじて聖祖元宝と判読できる銭貨も曲輪Ⅶより表採されている。

煙管 (第48図 第15表)

359・360は銅製の煙管である。359は曲輪Ⅴ、360は曲輪Ⅷから出土している。ともに雁首から胴部小口の部位である。359の遺存部の長さは4.8cm、火皿径、火皿の深さ、小口径の3部位ともに1cmを計る。360は遺存部の長さは5cm、火皿径1.5cm、火皿の深さ1cm、小口径0.8cmを計る。ともに雁首への立ち上がりは低い。江戸時代中期頃と推定される。

その他の金属製品 (第48・49図 第15表)

361～363は銅製品であり、仏具かと推定される。361は飾り金具と思われる。2個一対で何かを挟むような形状をしている。最大長2.5cm、最大幅3.1cmを計る。363は六器かと思われる。推定最大幅7.3cmを計る。362は最大長・最大幅ともに2.3cmを計る。364は簪で最大長18.3cm、最大幅1.2cm、厚さ0.3cmを計り飾りに花模様が見られる。365は剣である。先端部を欠損している。長さ10.7cm、厚さ0.4cm。366は刀子で長さ11.5cm、最大幅1.5cm、厚さ0.2cmを計る。367は分銅で重さ227gを計る。368・369は錠前で筒部断面形は方形である。370～372は鋤先の一部であると思われる。370は現存最大長35.9cm、最大幅、9.6cm、最大厚0.3cmを計る。371は現存最大長9.2cm、最大幅、7.8cm、最大厚0.3cmを計る。372は現存最大長13.8cm、最大幅、12.9cm、最大厚0.5cmを計る。373は鎌と思われる。現存最大長13.8cm、最大幅、12.9cm、最大厚0.5cmを計る。374～377は鉄滓である。374は船底形を呈する。重さはそれぞれ372g、204g、307g、71gである。



330



331



332



333



334



335



336



337



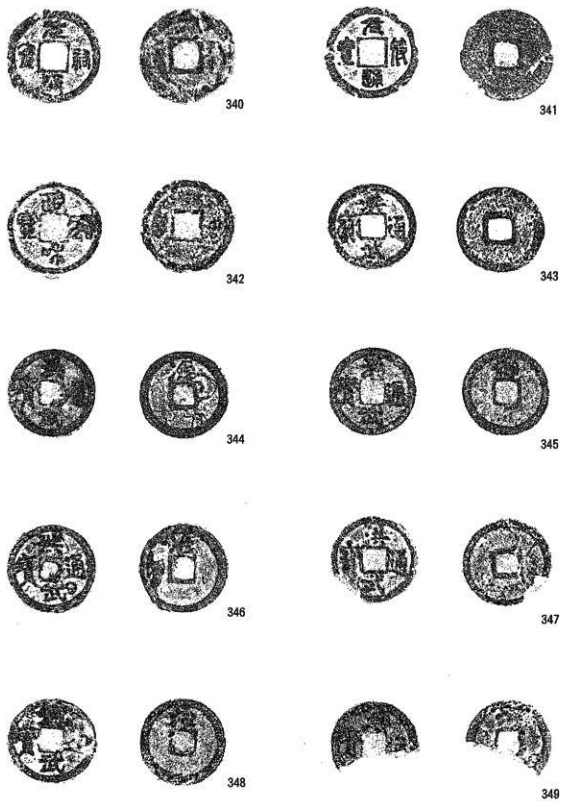
338



339



第45圖 錢貨(1)(1/1)



第46圖 錢貨(2)(1/1)



350



351



352

353



354

355

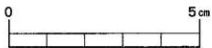


356

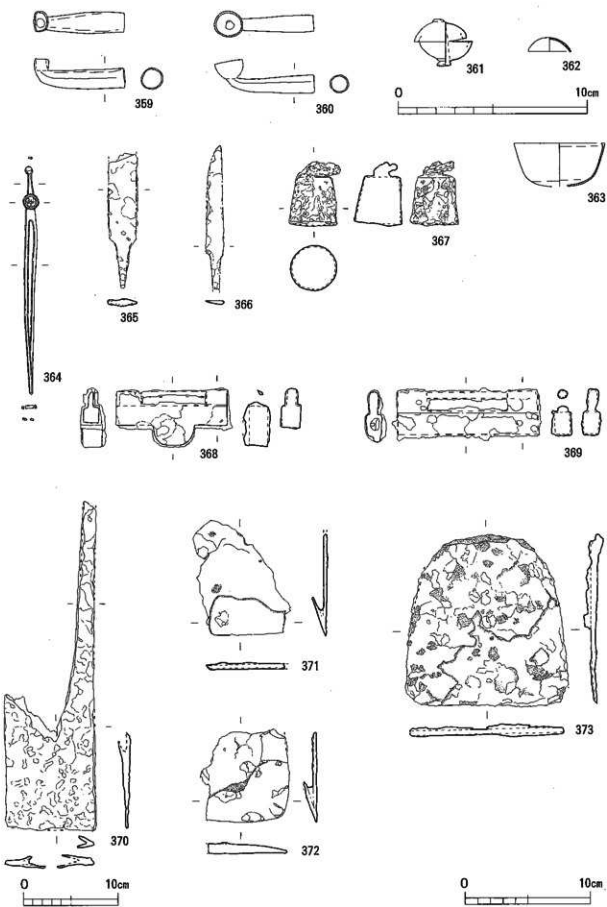
357



358



第47圖 錢貨(3)(1/1)



第48图 金属製品実測図(359~362 1/2、363~369・371~373 1/3、370 1/4)

(4) 石製品

石製品の種別と図化掲載数は、石鍋2点、石臼1点、砥石3点、軽石製品2点、駒石12点である。各個体の計測値の詳細については、第16表を参照されたい。

石鍋 (第49図)

378・379は滑石製の石鍋である。378には蔓取手穴と思われる穿孔が見られる。379は口縁部直下の削り出された鍔がめぐり、胴部に細いノミによる痕跡が認められる。外面の多くに煤の付着が見られる。14世紀末～15世紀。

石臼 (第49図)

380は砂岩製の石臼である。残存率は1/5程度で、重さは2kgを計る。

砥石 (第49図)

381～383は砥石である。381は砂岩製で、大きく2方向に深さ0.5mm程の断面U字形の溝を有する。382はシルト岩製で縦長である。表裏と1側面を使用している。383は泥岩製で、使用頻度のためか湾曲している部分が見られる。

軽石製品 (第49図)

384・385は軽石製品で、漁撈用の浮子等の用途が想定される。384は中央部に穿孔が施され両面・縁周を整形している。385は楕円形を呈し、片面は研磨されている。

駒石 (第50図)

386～397は肉薄でやや不整形の基石である。石材は頁岩製7点、砂岩製3点、ホルンフェルス製2点である。総数は14点出土し、そのうち12点を図化した。

(5) 土製品

羽口 (第50図)

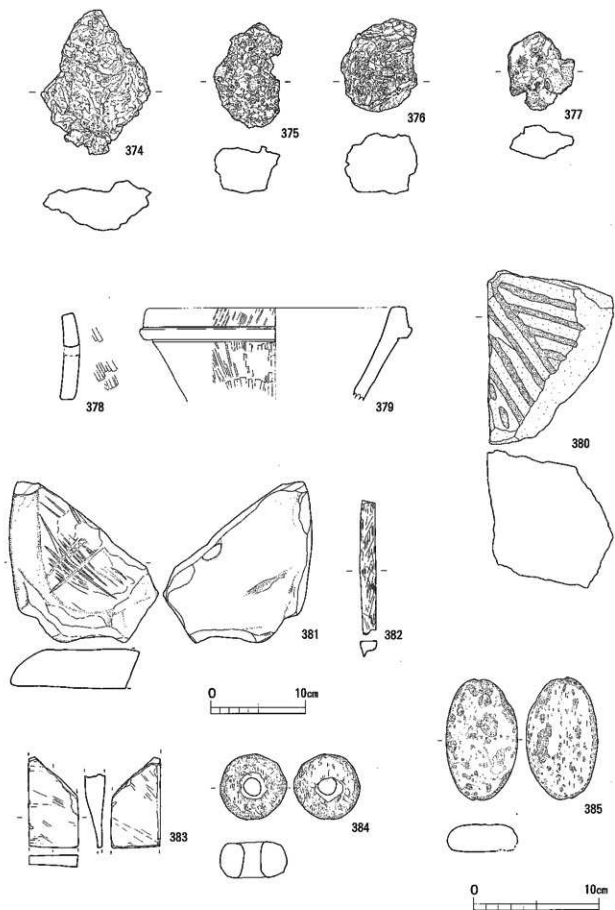
398はフイゴの羽口であり、周囲から鉄滓が出土している。端部の内外面には自然釉がガラス質になったものが付着している。

人形 (第50図)

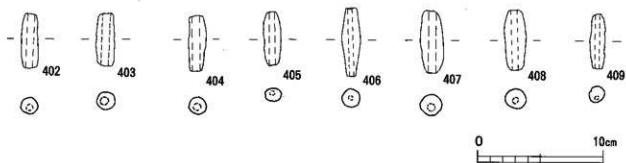
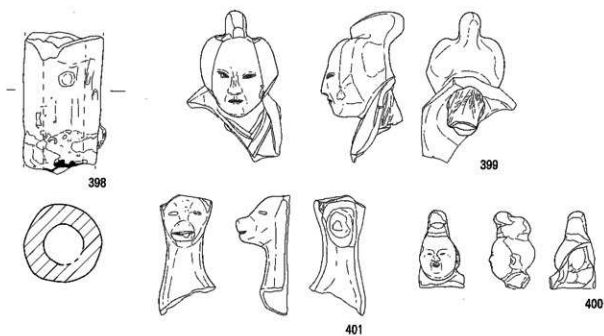
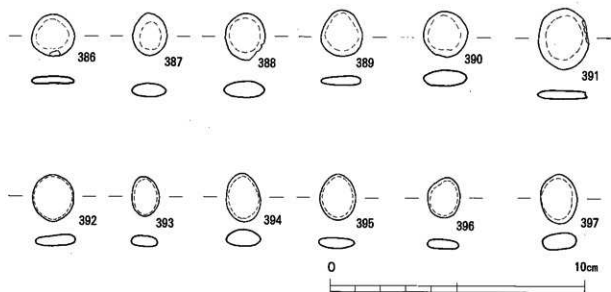
399～401は土製の型作り人形であり全てSC1の埋土上層から出土している。401は犬かと思われる。

土錘 (第50図)

402～409は土師質の土錘である。出土総数は71点でそのうち8点を図化した。曲輪Vと曲輪Ⅶでその9割以上を占める。各個体の計測値については、表17・18に掲載した。



第49図 金属製品・石製品実測図(381 1/4、他は1/3)



第50図 石製品・土製品実測図(381~397 2/3、398~409 1/3)

第3表 本城跡土器観察表(1)

遺物 番号	種別	器 種 類	部位	地点	法 量(m)			手段・調査・文献ほか		色 調		土 土 の 特 徴	備 考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	環 口縁~底部	曲輪V 埋切1	(10)	(6)	(3)	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (7.5YR8/6)	洗黄褐色 (7.5YR8/6)	精良	へう切り底 1-A-1	
2	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	(11)	(7)	(3)	回転ナデ	回転ナデ	褐色 (7.5YR7/6)	洗黄褐色 (7.5YR8/6)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	へう切り底 1-A-1	
3	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	8	4	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 (10YR5/2)	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	精良	へう切り底 1-B-1	
4	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	9	5	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	精良	へう切り底 1-B-1	
5	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	9	3.2	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (10YR8/4)	洗黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の透明な鉱物粒を含む	へう切り底 1-B-1	
6	土師器	灯明皿 口縁~底部	曲輪V	13	9	4	回転ナデ スス付	回転ナデ スス付	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	精良	へう切り底 1-B-1	
7	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	14	8	4	回転ナデ 後ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	1mm以下の黒褐色の砂粒を含む	へう切り底 1-B-1	
8	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	9	4	回転ナデ 高足	回転ナデ 高足	洗黄褐色 (10YR8/2)	洗黄褐色 (10YR7/4)	精良	へう切り底 1-B-1	
9	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	5	4	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色 (10R6/6)	赤褐色 (10R6/6)	2mm以下の灰褐色の砂粒を含む	へう切り底 1-B-1	
10	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	9	3	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (7.5YR8/4)	洗黄褐色 (7.5YR8/4)	精良	へう切り底 1-B-1	
11	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	6	(5)	1	回転ナデ	回転ナデ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	精良	へう切り底 1-A-1	
12	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	7	4	1	回転ナデ	回転ナデ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	精良	へう切り底 1-A-1	
13	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	7	5	2	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (7.5YR7/6)	洗黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	へう切り底 1-B-2	
14	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	7	6	1	回転ナデ	回転ナデ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	精良	へう切り底 1-B-2	
15	土師器	洗黄 口縁~底部	曲輪V	7	5	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	へう切り底 1-B-2	
16	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	8	6	-	回転ナデ	回転ナデ 粘土質	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	2.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む	へう切り底 1-B-2	
17	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	8	6	-	回転ナデ	回転ナデ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	へう切り底 1-B-2	
18	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	7	7	1	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色 (10YR8/4)	洗黄褐色 (10YR8/4)	精良	へう切り底 1-C-3	
19	土師器	環 口縁~底部	曲輪V 埋切2	7	6	-	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (10YR8/4)	洗黄褐色 (10YR8/4)	精良	へう切り底 1-C-3	
20	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	7	7	1	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/6)	にぶい褐色 (7.5YR7/6)	精良	へう切り底 1-C-3	
21	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	6	7	1	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/6)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を含む	へう切り底 1-C-3	
22	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	7	6	2	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (7.5YR8/3)	洗黄褐色 (7.5YR8/3)	精良	へう切り底 1-C-3	
23	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	10	8	3	回転ナデ 敷目瓦	回転ナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	1mm以下の無色透明な鉱物粒を含む	へう切り底 1瓦	
24	土師器	環 口縁~底部	曲輪V SE1	(13)	9	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR8/4)	にぶい褐色 (7.5YR8/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	へう切り底 1瓦	
25	土師器	環 口縁~底部	曲輪V ピット2	9	7	1	回転ナデ	回転ナデ ナデ	褐色 (5YR7/6)	褐色 (5YR7/6)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	へう切り底 1瓦	
26	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	14	8	3	回転ナデ スス付	回転ナデ スス付	灰褐色 (7.5YR5/2)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	1.5mm以下の黒色の粒を含む	へう切り底 1瓦	
27	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/3)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	1~3.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 II-A-1	
28	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (7.5YR8/4)	洗黄褐色 (7.5YR8/4)	精良	赤切り底 II-A-1	
29	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	11	5	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 II-A-1	
30	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	7	3	回転ナデ 高足	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	1.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 II-A-1	
31	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	11	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1~4mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 II-A-1	
32	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	7	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	1~4mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 II-A-1	
33	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	明褐色 (7.5YR7/2)	明褐色 (7.5YR7/2)	1.5mm以下の褐色、黒色の粒を含む	赤切り底 II-A-1	
34	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/3)	にぶい褐色 (10YR7/3)	2mm以下の赤褐色の砂粒、5mm大の 高脚小皿がみられる	赤切り底 II-A-1	
35	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	11	8	3	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (5YR7/4)	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 II-A-1	
36	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	7	3	回転ナデ	回転ナデ	洗黄褐色 (10YR8/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 II-A-1	

第4表 本城跡土器観察表(2)

遺物番号	種別	器種・部位	地山	法 規(m)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
				1径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
37	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	8	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR5/4)	ぶい黄褐色 (10YR6/4)	精良 1~2mm以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-A-1
38	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	7	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	ぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	精良	糸切り底 II-A-1
39	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	4	3	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	淡黄褐色 (7.5YR7/4)	5.5mm大の高脚小粒を含む	糸切り底 II-A-2
40	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	6	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-A-3
41	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	7	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/3)	ぶい黄褐色 (10YR7/3)	精良	糸切り底 II-A-3
42	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	7	3	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	ぶい褐色 (7.5YR8/4)	1mm以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 II-A-3
43	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	6	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-A-3
44	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	6	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/3)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-A-3
45	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (10YR7/3)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-A-3
46	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	7	3	回転ナテ	回転ナテ	褐色 (10YR5/1)	褐色 (10YR5/1)	精良	糸切り底 II-A-3
47	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	6	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-A-3
48	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	11	6	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-A-3
49	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	3	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	2.5mm以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
50	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-2
51	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	5	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-2
52	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	13	7	3	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (10YR8/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-2
53	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	-	4	回転ナテ	回転ナテ	灰 (10YR7/1)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-2
54	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-2
55	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	5	3	回転ナテ	回転ナテ	褐色 (7.5YR7/3)	褐色 (7.5YR7/3)	1~4mm以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
56	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	4	4	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (10YR8/4)	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
57	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	7	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	1~4mm以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
58	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	7	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	2mm以下の褐色の粒、光沢のある半透明の粒を少し含む	糸切り底 II-B-2
59	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-2
60	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	5	4	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	5mm以下で赤褐色の粒が多くみられる	糸切り底 II-B-2
61	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (7.5YR8/4)	ぶい褐色 (7.5YR)	3mm以上の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-B-2
62	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	4	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	3mm以下の赤褐色の砂粒がみられる	糸切り底 II-B-2
63	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	1mm以下の赤褐色の粒を僅かに含む	糸切り底 II-B-2
64	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	3	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	5mm程度の茶色の粒、2mm以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 II-B-2
65	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	13	7	3	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (10YR8/4)	淡黄褐色 (7.5YR8/4)	2mm以下の赤褐色の砂粒と、2.5mm以下の褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
66	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	5	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (7.5YR7/3)	ぶい褐色 (7.5YR7/3)	1~5mm大の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
67	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	8	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-3
68	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	8	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (5YR7/4)	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	精良	糸切り底 II-B-3
69	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	3	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/3)	1~6mm以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-3
70	土師器	灯明皿 口縁→底部	曲輪V	13	8	3	回転ナテ	回転ナテ	淡黄褐色 (10YR8/4)	淡黄褐色 (7.5YR8/3)	8mm内の褐色の粒、2mm以下の褐色の粒を含む	糸切り底 II-B-3
71	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	8	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	ぶい褐色 (7.5YR7/4)	8mm大の赤褐色の粒、2mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-B-3
72	土師器	環 口縁→底部	曲輪V	12	6	4	回転ナテ	回転ナテ	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	ぶい黄褐色 (10YR7/4)	精良 1mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-C-2

第5表 本城跡土器観察表(3)

遺物番号	種別	器 種 位	地 点	法 量 (cm)			子法・測定・文様ほか			色 調		胎土上の特徴	備 考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面			
73	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	7	4	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	縹以	赤切り底 Ⅱ-C-2	
74	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	4	4	回転ナテ ヨコナテ	回転ナテ ヨコナテ	明黄褐色 (10YR7/5)	明黄褐色 (10YR7/5)	1mm次の赤褐色粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2	
75	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	12	7	5	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm次の赤褐色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2	
76	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	7	5	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-C-2	
77	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	6	4	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の赤褐色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2	
78	土師器	環 口縁~底部	曲輪V	13	4	5	回転ナテ ヨコナテ	回転ナテ ヨコナテ	明黄褐色 (10YR7/5)	明黄褐色 (10YR7/5)	1~1.5mm次の赤褐色粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2	
79	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-A-1	
80	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	1mm次の褐色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-A-1	
81	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-1	
82	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	褐色 (7.5YR7/6)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-1	
83	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ 不定形回転ナテ	回転ナテ ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-1	
84	土師器	灯明皿 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ 器の中心部にナテ スス付着	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-1	
85	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-1	
86	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/3)	1mm以下の微細な粒を含む	赤切り底 Ⅱ-A-1	
87	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	縹い回転ナテ ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-1	
88	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ 器の中心部に ナテ付着	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-2	
89	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-2	
90	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-A-2	
91	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	縹以	赤切り底 Ⅱ-A-2	
92	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-2	
93	土師器	灯明皿 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ 裏面	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-2	
94	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/3)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-A-2	
95	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-A-3	
96	土師器	灯明皿 口縁~底部	曲輪V	(8)	5	1	回転ナテ	回転ナテ	褐色 (5YR6/6)	褐色 (2.5YR6/6)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-B-1	
97	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	3mm以下の赤褐色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-1	
98	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	褐色 (7.5YR7/6)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-B-1	
99	土師器	灯明皿 口縁~底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ スス付着	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-1	
100	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	7	1	5	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	縹灰	赤切り底 Ⅱ-B-1	
101	土師器	灯明皿 口縁~底部	曲輪V	8	3	2	回転ナテ スス付着	回転ナテ ヨコナテ	明黄褐色 (10YR7/5)	明黄褐色 (10YR7/5)	4mm大と2~1mm大以下の赤褐色の粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-2	
102	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	3mm以下の赤褐色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-2	
103	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	5mm大の高部小瘤がみられる	赤切り底 Ⅱ-B-2	
104	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (7.5YR7/4)	2mm以下の赤褐色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-2	
105	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	5mm大の高部小瘤を含む, 2.5mm以下の赤褐色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-2	
106	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	3mm以下の茶褐色の粒を少量含む	赤切り底 Ⅱ-B-2	
107	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の茶褐色の粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-2	
108	土師器	蓋 口縁~底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ	におい黄褐色 (7.5YR7/4)	におい黄褐色 (7.5YR7/4)	2mm大程度の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-B-2	

第6表 本城跡土器観察表(4)

通称番号	類別	器 種 類	地 点	法 量(m)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎 土 の 特 徴	備 考
				口徑	取径	器高	外面	内面	外面	内面		
109	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	4mm以下の茶色の粒を含む	糸切り底 II-B-2
110	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	精炭	糸切り底 II-B-2
111	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
112	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ スス付者	回転ナテ 口縁スス付者	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1～3.5mm以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
113	土師器	片口皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	3mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-B-2
114	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ スス付者	回転ナテ スス付者	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	2mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-B-2
115	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	7	5	2	回転ナテ	回転ナテ 指ナテ	褐色 (5YR7/6)	褐色 (5YR7/6)	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-B-2
116	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	7mm以下の黒部小粒を含む	糸切り底 II-B-2
117	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	1	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	4mm以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 II-B-2
118	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	1	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	2mm以下の茶色の粒を少し含む	糸切り底 II-B-2
119	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	6	2	回転ナテ	回転ナテ	褐色 (10YR8/1)	浅黄褐色 (7.5YR8/6)	3mm以下の赤褐色の砂粒がみられる	糸切り底 II-B-2
120	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ スス付者	にぶい黄褐色 (10YR8/3)	にぶい黄褐色 (10YR8/3)	精炭	糸切り底 II-C-1
121	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	3	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1～2.5mm以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-1
122	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	5mm大の褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-1
123	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	4mm大の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-C-1
124	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	3	2	回転ナテ スス付者	回転ナテ スス付者	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1mm大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-1
125	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2.4	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR7/4)	褐色 (5YR7/6)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-1
126	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	7	5	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/3)	1mm大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-1
127	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ 中央部の底ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2.5mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-C-1
128	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	1～5mm大の赤褐色砂粒を含む	糸切り底 II-C-1
129	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	3mm以下の茶色、黒色の粒を含む	糸切り底 II-C-1
130	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1.5mm大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-1
131	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-C-1
132	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ スス付者	回転ナテ スス付者	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-C-1
133	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	精炭	糸切り底 II-C-2
134	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ スス付者	回転ナテ スス付者	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-C-2
135	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ ヨコナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を少量含む	糸切り底 II-C-2
136	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ スス付者	回転ナテ スス付者	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	2mm大の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-2
137	土師器	灯明皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-2
138	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	1mm以下の赤褐色の粒を含む	糸切り底 II-C-2
139	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	7	4	2.2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-2
140	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	黄灰色 (2.5Y5/1)	1～2mm以内の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-2
141	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ スス付者	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	3mm以下の赤褐色の砂粒を含む	糸切り底 II-C-2
142	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	5	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	黒褐色赤褐色砂粒を含む	糸切り底 II-C-2
143	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	7	4	2	回転ナテ	回転ナテ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を含む	糸切り底 II-C-2
144	土師器	皿 口縁～底部	曲輪V	8	4	2	回転ナテ	回転ナテ	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を少量含む	糸切り底 II-C-2

第7表 本城跡土器観察表(5)

遺物番号	種別	器位	地点	法 量(m)			手法・製法・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備 考
				口径	底径	器高	外面	内面	外 面	内 面		
145	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	3mm以下の茶色の粒を少し含む	赤切り底 Ⅱ-C-2
146	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	1mm以下の赤褐色の砂粒がみられる	赤切り底 Ⅱ-C-2
147	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色 (10YR7/4)	におい褐色 (10YR7/4)	3mm以下の赤褐色砂粒と、1mm以下の黒色砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2
148	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2
149	土師器	口縁→底部	曲輪V	7	4	2	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2
150	土師器	口縁→底部	山輪V	8	4	2	回転ナデ 短い縦ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-2
151	土師器	灯明皿 口縁→底部	山輪V	8	5	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を数量含む	赤切り底 Ⅱ-C-2
152	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	2	5	回転ナデ 指ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	内面赤褐色 スス付着 Ⅱ-C-2
153	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	2mm以下の赤褐色の粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2
154	土師器	灯明皿 口縁→底部	曲輪V	8	6	2	回転ナデ スス付着	回転ナデ スス付着	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-C-2
155	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
156	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
157	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ 不定方向ナデ	回転ナデ 不定方向ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
158	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	4	2	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
159	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
160	土師器	口縁→底部	曲輪V	4	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
161	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ 不定方向ナデ	回転ナデ 不定方向ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
162	土師器	口縁→底部	曲輪V	8	5	2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-C-3
163	土師器	口縁→底部	曲輪V	12	7	3	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/3)	精良	赤切り底 Ⅱ-D-1
164	土師器	口縁→底部	曲輪V	12	6	3	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-D-1
165	土師器	灯明皿 口縁→底部	曲輪V	13	7	3	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	灰青褐色 (10YB6/2)	精良	赤切り底 Ⅱ-D-1
166	土師器	口縁→底部	曲輪V	13	7	3	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい黄褐色 (10YR8/3)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-D-1
167	土師器	口縁→底部	曲輪V	(11)	6	2	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい褐色 (7.5YR7/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒がみられる	赤切り底 Ⅱ-D-2
168	土師器	口縁→底部	曲輪V	11	6	3	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-D-2
169	土師器	口縁→底部	曲輪V	11	6	2	回転ナデ 黒斑	回転ナデ 黒斑	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい褐色 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-D-2
170	土師器	口縁→底部	曲輪V	12	4	3	やや渾め の回転ナデ	やや渾め の回転ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい褐色 (7.5YR7/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒がみられる	赤切り底 Ⅱ-D-2
171	土師器	口縁→底部	曲輪V	12	6	3	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい褐色 (7.5YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-D-2
172	土師器	口縁→底部	曲輪V	13	6	3	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色 (10YR7/4)	におい黄褐色 (10YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-D-2
173	土師器	口縁→底部	曲輪V	(11)	6	3	回転ナデ 黒斑	回転ナデ ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	1mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-D-2
174	土師器	口縁→底部	山輪V	11	8	2	回転ナデ 教付板	回転ナデ ナデ	浅黄褐色 (10YR8/4)	浅黄褐色 (10YR8/4)	2mm以下の赤褐色の砂粒を少量含む	赤切り底 Ⅱ-D-2
175	土師器	口縁→底部	曲輪V	(13)	7	3	回転ナデ 黒斑	回転ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい褐色 (7.5YR7/4)	2mm以下の赤褐色の砂粒を含む	赤切り底 Ⅱ-D-2
176	土師器	口縁→底部	曲輪V	13	8	3	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色 (5YR7/4)	におい褐色 (5YR7/4)	1.5mm以下の茶色の粒を少し含む	赤切り底 Ⅱ-D-2
177	土師器	口縁→底部	曲輪V	13	8	4	回転ナデ 黒斑	回転ナデ ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい褐色 (7.5YR7/4)	2mm以下の赤褐色砂粒がみられる	赤切り底 Ⅱ-D-2
178	土師器	口縁→底部	曲輪V	13	7	4	回転ナデ スス付着	回転ナデ	におい褐色 (7.5YR7/4)	におい褐色 (7.5YR7/4)	精良	赤切り底 Ⅱ-D-2

第8表 本城跡出土陶磁器 観察表(1)

遺物番号	種別	器種	地点	法 様 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	
179	白磁	碗	曲輪V	(15)	-	-	口縁部口上げ	施釉	灰白色	灰白色	中国産 白磁 13C
180	白磁	碗底裏	曲輪VII	(15)	-	-	貫入	施釉・貫入	灰白色	淡黄色	中国産 白磁
181	白磁	碗	曲輪VII	-	(4)	-	ヘラズリ調整 底面施釉	見込み外側に線刻	明緑灰色	灰白色	中国産 白磁
182	白磁	皿	曲輪IV	-	(4)	-	全面施釉 裏付砂付層	砂目層・貫入	灰白色	灰白色	中国産 白磁
183	白磁	碗	曲輪VII	(14)	-	-	施釉	施釉 象嵌線	灰	灰	中国産 白磁 13C前後
184	青磁	碗	曲輪VⅡ期	(12)	-	-	蓮弁文	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
185	青磁	碗	曲輪VⅡ期	(15)	-	-	蓮弁文 口縁部はわずかに内積する	釉に気泡を多く含む	灰オリーブ色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯 14C後半～15C初期
186	青磁	碗	曲輪VII	(13)	-	-	蓮弁文	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯 15C～16C
187	青磁	碗	曲輪VII	(18)	-	-	蓮弁文	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯 16C後半
188	磁器	碗底裏	曲輪VII 断切2	(15)	-	-	施釉	施釉	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯系
189	磁器	碗底裏	曲輪V	15	7	7	施釉 砂目有り	施釉	灰オリーブ色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯系
190	白磁	杯	曲輪V	(10)	-	-	蓮弁文 折縁・口縁 上面に 重なり施す	施釉	明オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
191	青磁	杯	曲輪V	-	-	-	蓮弁文	釉に気泡を多く含む	灰オリーブ色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯 14C～15C
192	青磁	花瓶文様花瓶	曲輪IX	(11)	(8)	(2.9)	高台内輪割ぎ	ヘラ掻き文	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
193	青磁	花瓶文様花瓶	曲輪VII	(13)	-	-	施釉 貫入	ヘラ掻き文	暗オリーブ灰色	灰色	中国産 青磁 隆茂窯 15C～16C
194	青磁	高台付皿	曲輪VII	14	7	4	高台内輪割 砂付層	見込み印花の草花文	灰オリーブ色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
195	青磁	高台付皿	曲輪V	-	(5.5)	-	高台内輪の目物割ぎ 裏付一層施す	見込みスタンプ 花文?	明緑灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
196	青磁	高台付皿	曲輪V	-	(5.3)	-	高台内輪の目物割ぎ	見込みスタンプ 花文	明オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
197	白磁	高台付皿	曲輪IX	11	5	4	高台内輪割ぎ	見込みに双象文 (施刻)	明緑灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
198	青磁	高台付皿	曲輪V	-	8	-	高台内輪割ぎ	見込みスタンプ 双象文	明緑灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
199	青磁	碗	曲輪VII	-	5	-	裏付施釉	見込み磨?印ス タンプ象嵌	オリーブ灰色	オリーブ灰色	中国産 青磁 隆茂窯
200	青磁	高台付皿	曲輪IV	-	7	-	高台内輪割ぎ 裏面具?漆有り	見込みにスタンプ 草花文を施し、 その裏面を施刻 ぎ、高濃黄?跡	明オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
201	白磁	碗	曲輪V	-	5	-	高台無輪	見込み施刻文字 「印〇〇巻」?	灰オリーブ色	灰白色	中国産 白磁
202	青磁	蓮花文盤	曲輪V	-	-	-	高台内輪の目物割ぎ 砂土付層	見込みスタンプ 花文?	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
203	青磁	合付皿(蓋)	曲輪VII	-	(16)	-	全面施釉 高台内輪割ぎ	見込みに花文 (施刻)	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯
204	白磁	盤	曲輪VII	-	-	-	口縁を輪状状に 作る	口縁部にヘラ掻 き文 副面に蓮花文? 釉が厚く剥離	オリーブ灰色	灰色	中国産 青磁 隆茂窯 15C～16C
205	白磁	盤	曲輪VII 断切2	-	12	-	高台内輪の目物割 ぎ	見込み花文?割 面蓮花文?	オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯 14C～15C
206	白磁	蓮花文盤	曲輪VII	(20)	-	-	施釉 貫入	蓮花文	灰オリーブ色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯 15C～16C
207	白磁	蓮花文盤	曲輪V	(21)	-	-	施釉	蓮花文	オリーブ灰色	白色	中国産 青磁 隆茂窯 14C～15C
208	青磁	蓮花文盤	曲輪VII	(24)	-	-	施釉	蓮花文	明オリーブ灰色	灰白色	中国産 青磁 隆茂窯 15C～16C
209	磁器	碗	曲輪VII	-	-	-	青磁釉 口縁部に3袋の 線(象嵌) 下部にスタンプ 印花文(象嵌)、 線刻線	貫入	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	中国産 青磁 手割 12C～13C

第9表 本城跡出土陶磁器 観察表(2)

遺物番号	類別	器種	地点	法 量(m)			手法・調査・文様ほか		色 調		備 考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
210	磁器	青花陶	曲輪V	-	-	-	口縁部に1条の 線画文	基部の畫文	灰白色	灰白色	中国産 青花 品 磁器 18C~17C前半
211	磁器	青花陶	曲輪V	-	-	-	輪ちぢれ	西草文?	灰白色	灰白色	中国産 青花 陶器 清初
212	磁器	青花陶	曲輪V	(10)	-	-	口縁部に磨化し た青線画文 胴部に色煎文	口縁部に2条の 線画	明緑灰色	灰白色	中国産 青花 陶器 磁器 16C前半
213	磁器	青花陶	曲輪V	(12)	-	-	口縁部に2条の 線画 青花文	口縁部に2条の 線画を透らす	灰白色	灰白色	中国産 青花 陶器 磁器 16C
214	磁器	青花皿	曲輪V	-	4	-	基部に牡丹草文 文子その下に磨 理2条	見込み線人文 線画2条	明緑灰色	灰白色	中国産 青花 陶器 磁器 16C末~16C前半
215	磁器	青花皿	曲輪V	12	4	3	基部に1条、 胴部に2条透ら す 胴部に文字	見込み線人文 線画2条 口縁部に1本	明緑灰色	灰白色	中国産 青花 陶器 磁器 15C末~16C前半
216	陶器	甕	曲輪V SC2	(9)	-	-	自然釉 指ナゲ	ヨコナデ、自然釉 頸部に工具痕が 散り入る	淡黄色	赤褐色	畿前 15C~16C
217	陶器	甕	曲輪V SC2	(5)	-	-	自然釉 指ナゲ	ヨコナデ、自然釉 頸部に工具痕が 散り入る	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	畿前 15C~16C
218	陶器	甕	曲輪V SC2	(3)	-	-	ヨコナデ 自然 釉	ヨコナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	畿前 15C~16C
219	陶器	甕	曲輪V SC2	36	34	70	ヨコナデ、指痕 により底形痕 有り、叩き上げ のナメ状痕跡	ヨコナデ、指痕 により底形痕 有り、叩き上げ のナメ状痕跡	黄灰色	黄灰色	畿前 14C~15C
220	陶器	甕	曲輪V SC4	31	14	11	輪ちぢみ、指ナ ゲ痕あり	12本1單位のク シ指 輪ちぢみ痕あり	灰色	灰色	畿前 14C代
221	陶器	甕	曲輪V	30	15	10.2	輪ちぢみ痕あり 口縁部のみ磨 化(鉄)	7本1單位のク シ指 輪ちぢみ痕あり	暗赤褐色	にぶい赤褐色	畿前 14C代
222	陶器	甕	曲輪V SC1	(27)	(16)	(11.1)	輪ちぢみ、指ナ ゲ痕あり	下から上へ7本 1單位のクシ指	にぶい褐色	黄褐色	畿前 14C後半~15C
223	陶器	甕	曲輪V	(31)	-	12.8	鉄釉 口縁部のみ磨 化	クシ指11本1 單位 口縁部のみ磨 化	暗灰色	暗灰色	畿前 17C中国~後半
224	陶器	甕	曲輪V	33	11	12.8	口縁部のみ鉄 釉で磨 化 右糸切り痕	10~16本1單位 のクシ指 底面粒目粗 あり	暗褐色	暗灰色	畿前 17C中国~後半
225	陶器	甕	曲輪V	(27)	-	-	鉄釉 口縁部付近から 磨化? 流し掛	クシ指14本1 單位 口縁上部に目 跡有り	黒褐色	にぶい黄褐色	畿前 17C~18C前半
226	陶器	甕	曲輪V	-	(11)	-	基部糸切り痕、 口縁有り	14本1單位ク シ指	明赤褐色	明赤褐色	畿前系か?
227	陶器	甕	曲輪V	(24)	-	-	横方向に砂粒の 散り有り 浅い沈積	すり目の鉄、横 ナゲ 沈積 全 体にすり目	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	堺・明石系
228	陶器	甕	曲輪V	22	11	6.9	形板化した片口	8本1單位ク シ指	暗赤褐色	明赤褐色	時期・産地不明
229	陶器	甕	曲輪V	40	16	16	鉄釉 高台磨 化 胴部に白化粧土 塗布あり 片1 (形板化)	全周曲輪 口縁上部に磨 化? の痕みあり 15本1單位のク シ指	黒色	褐色	畿前系 17C~18C
230	陶器	甕	曲輪V	(29)	-	-	へう状工具によ るヨコナデ ハナ目痕	11か12本1單位 クシ指	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	時期・産地不明
231	陶器	甕	曲輪V	(53)	-	-	沈積 横方向に砂粒の 散り有り	7本1單位のク シ指	灰褐色	灰褐色	時期・産地不明
232	染付	大皿	曲輪V	21	14	3.1	胴部に唐草文 高台部に1条、 高台に2条、高台 内に1条線透 らす 裏面磨	見込み虫花文 側面唐草文 墨書き、ボス リ線	灰白色	灰白色	畿前 17C後半~18C前半
233	陶胎染付	染付大皿	曲輪V	-	13	-	胴部に1条、高 台に2条、高台 内に1条線透 らす 裏面磨	鳥梅花文	灰白色	灰白色	澤村窯 17C

第10表 本城跡出土陶磁器 観察表(3)

遺物番号	種別	器種	地点	法 様(m)			子法・裝飾・文様ほか		色 調		備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	
234	染付	そば罌口	曲輪Ⅲ	8	5	5.3	裏面文? 底部2条線 雲付露胎、砂付書	施釉	灰白色	灰白色	肥前系 18C代
235	染付	そば罌口	曲輪Ⅴ	7	(5)	5.4	竹文	施釉	灰白色	灰白色	肥前系 18C代
236	染付	罌	曲輪Ⅴ	7	3	-	青磁胎 雲付露胎、砂付書		灰オリーブ色	灰色	肥前系 18C後半
237	染付	罌	曲輪Ⅴ	-	7	-	竹文・雲付露胎	施釉	灰白色	灰白色	
238	染付	罌	曲輪Ⅴ	9	4	5.1	梅花文 高台胎に1条、 高台に2条線 露胎「大明平型」 露れ 雲付露胎、砂付書	施釉・染付	明緑灰色	灰白色	肥前系 18C中頃
239	染付	罌	曲輪Ⅴ	10	4	5	草花文 高台胎に1条、 高台に2条線 露胎「大明平型」 露れ 雲付露胎、砂付書	施釉	明緑灰色	灰白色	肥前 18C後半
240	染付	罌	曲輪Ⅴ	10	4	5	草花文 高台胎に1条、 高台に2条線 露胎「大明平型」 露れ 雲付露胎、砂付書	施釉	明緑灰色	灰白色	肥前 18C後半
241	染付	罌	曲輪Ⅴ	9	4	-	梅花文 高台胎に1条、 高台に2条、 高台内に1条線 露胎「大明平型」 露れ 雲付露胎	砂付書	灰白色	灰白色	肥前 17C末~ 19C
242	染付	罌	曲輪Ⅴ	10	4	5	梅花文 高台胎に1条、 高台に2条線 露胎「大明平型」 露れ 貫入	施釉・貫入	灰白色	灰白色	肥前系 18C後半
243	染付	罌	曲輪Ⅴ	12	4	-	草花文 高台胎に1条、 高台に2条線 雲付露胎、砂付書	見込みを絶の目 状に施刻した上 から再び施釉 砂付書	灰白色	灰白色	肥前系 18C後半
244	染付	罌	曲輪Ⅴ	11	5	5	折梅花文 高台胎に1条、 高台に2条、露 胎 雲付露胎、 砂付書	見込み絶の目 状のミその露 所に再び施釉 (肥前?) 砂付書	灰白色	灰白色	肥前系 17C後半~19C
245	染付	罌	曲輪Ⅴ	13	-	-	草文 高台胎に1条、 高台に1条?露 胎	口縁部に文様帯 (おじり文?)、 その下に1条、 露胎に2条線 見込み絶の目 刻す	灰白色	灰白色	肥前系 17C後半~19C
246	染付	罌	曲輪Ⅴ	11	4	5	折梅花文 高台胎に1条、 高台に2条、露 胎 雲付露胎、 砂付書	見込み絶の目 刻すのミその露 所に再び施釉 (肥前?) 砂付書	明オリーブ灰色	灰白色	肥前系 1700~1750年代
247	染付	罌	曲輪Ⅴ	14	5	7	草花文 高台胎に1条、 高台に2条線 雲付露胎、砂付書	見込み絶の目 刻すのミその露 所に再び施釉 (肥前?) 砂付書	明オリーブ灰色	灰白色	肥前系 1700~1750年代
248	染付	罌	曲輪Ⅴ	10	4	5	二重網目文 高台胎に1条、 高台に2条、露 を返らす 裏面露胎	一重網目文 見込み絶二重 内に梅花文	明緑灰色	灰白色	肥前系 1700~1750年代
249	染付	罌	曲輪Ⅴ	10	-	-	二重網目文	一重網目文	灰白色	灰白色	肥前系 18C前半
250	染付	罌	曲輪Ⅴ	9	4	4	二重網目文 雲付露胎	一重網目文 見込み露胎2条 その中に下弁花 コンマエツク印	明緑灰色	灰白色	肥前系 18C前半~18C中頃

第11表 本城跡出土陶磁器 観察表(4)

遺物番号	類別	器種	地点	法 量(m)			手法・図様・文様ほか		色 調		備 考	
				口径	底径	高さ	器高	外面	内面	外面		内面
251	染付	碗	曲輪V	10	4	5	刷縁に松文コン ネクト印刷、高 台に1条、高 台に2条刷縁 兼付露胎、砂付 着	施釉・砂目痕	明緑灰色	灰白色	肥前系 18後半	
252	染付	碗	曲輪V 曲輪III	10	4	5	刷縁コンネクト 印刷 高文と丸文(内 に高文)を交互 に配置 高台に1条、 高台に2条刷縁 兼付「忍履」刷 れ兼付露胎、砂 付着	施釉・染付・コ ンネクト印刷	明緑灰色	灰白色	肥前系 18C後半	
253	染付	碗	曲輪V	-	4	-	丸文・高文 飛びガシラ2条 刷縁に高文 高台に1条、 高台に1条刷縁 兼付露胎、砂付 着	見込み五弁花コ ンネクト印刷 蛇の目物割ぎの ち鉄線 砂付着	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	肥前系 18C後半	
254	染付	碗	曲輪V	11	4	5	丸文、高文 高台に1条、高 台に1条刷縁 兼付露胎、砂付 着	刷縁1条刷縁 見込み五弁花コ ンネクト印刷 蛇の目物割ぎの ち鉄線 砂付着	明青灰色	灰白色	肥前系 18C後半~19C	
255	染付	碗	曲輪III	11	4	5	丸文、高文 高台に1条、高 台に1条刷縁 兼付露胎、砂付 着	刷縁2条刷縁 見込み高文 蛇の目物割ぎの ち鉄線 砂付着	明青灰色	灰白色	肥前系 18C後半~19C	
256	染付	碗	曲輪IX	-	4	-	青磁釉 高台内のみ染付 着 東洋「三」高形 内刷縁 兼付露胎、砂付 着	見込み2条刷縁 内に五弁花文	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	肥前系 1760~1780年代	
257	染付	青磁染付盃	曲輪V	10	4	3	青磁釉 高台内のみ染付 着 兼付露胎、砂付 着	口縁四方唐文 見込み2条刷縁 内に五弁花コ ンネクト印刷	オリーブ灰色	明オリーブ灰色	肥前系 18C後半	
258	染付	青磁染付盃	曲輪V	8	4	2.9	青磁釉 高台内のみ染付 着 兼付露胎、砂付 着	口縁四方唐文 見込み2条刷縁 内に五弁花コ ンネクト印刷	灰色	灰色	肥前系 1760~1780年代	
259	染付	広東碗 重	曲輪V	10	3.3	3	高台刷縁2条 天津部に露胎 1条高台に草花文	草花文	明青灰色	灰白色	肥前? 18C半ば~18C後半	
260	染付	広東碗	曲輪III	11	6	6	区画割りした中 に山水文を高く 高台に1条刷縁 兼付露胎、砂付 着	口縁部2条刷縁 刷縁1条刷縁 見込み高文露胎	明青灰色	灰白色	肥前? 18C半ば~18C後半	
261	染付	青磁染付碗	曲輪III	11	4	6	青磁釉 高台内のみ染付 着 兼付露胎、砂付 着	口縁部四方唐文 見込み2条刷縁 内に五弁花コ ンネクト印刷	明オリーブ灰色	灰白色	肥前系 18C半ば~18C後半	
262	染付	碗	曲輪V 曲輪III	10	00	6	変形字	施釉	明オリーブ灰色	灰白色	肥前 19C前半	
263	陶器	磁灰碗	曲輪V	12	5	8	刷縁 底刷縁	施釉	緑灰色	灰色	雄野内野山 17C後半	
264	陶器	碗	曲輪V	12	5	7	刷縁 底刷縁	透明釉	緑黄色	灰白色	雄野内野山 17C末~18C	
265	陶器	碗	曲輪IV	11	5	8	透明釉 兼付露胎、砂付 着 貫入	施釉・貫入	淡黄色	灰白色	京焼か? 17C末	
266	陶器	碗	曲輪V	13	5	6	透明釉 兼付露胎、砂付 着 貫入	施釉・貫入	淡黄色	灰白色	京焼風 17C末	
267	磁器	碗	曲輪V 曲輪III	13	5.1	5.2	白磁釉 施す可れ有り 兼付露胎、砂付 着	見込み蛇の目物 割ぎ 砂付着	灰白色	灰白色	肥前系 (在地?) 18C代	
268	陶器	碗	曲輪III	11	(4)	4	透明釉 高台露胎 貫入	見込み蛇の目物 割ぎ	灰白色	灰白色	肥前 18C前半	
269	磁器	刷縁型碗	曲輪III	12	5	6	兼付物割ぎ 砂付着	施釉	明緑灰色	灰白色	肥前系 (在地?) 18C前半	

第12表 本城跡出土陶磁器 観察表(5)

遺物番号	類別	器種	地点	法 量(m)			手法・調整・文様ほか	色 調				備 考
				口径	底径	器高		内 面		外 面	内 加	
								外 面	内 面			
270	陶器	甕	曲輪Ⅲ	13	4	6	透明釉? 貫入	施釉・貫入	黄褐色	灰黄色		肥前系 18C前半
271	陶器	甕	曲輪Ⅴ	11	4	4	透明釉 高台露胎 貫入	見込み蛇の目輪 刻ぎ	にぶい黄色	灰白色		肥前系 18C前半
272	陶器	湯鉢Ⅲ	曲輪Ⅴ (12)	-	-	-	灰釉 貫入	施釉・貫入	灰白色	灰白色		肥前 1610~1630年代
273	陶器	湯鉢Ⅲ	曲輪Ⅴ (12)	-	-	-	透明釉 貫入	施釉・貫入	灰オリーブ色	灰白色		肥前 1610~1630年代
274	陶器	湯鉢Ⅲ	曲輪Ⅴ	-	-	-	灰釉・貫入	施釉・貫入	灰白色	灰白色		肥前 1610~1630年代
275	陶器	皿	曲輪Ⅴ	13	4	4	奥付砂目痕 4	胴部に化粧土刷毛目 見込みスタンプ印花象嵌 砂目痕 4	灰褐色	にぶい赤褐色		肥前 三島海岸 17C前半
276	陶器	皿	曲輪Ⅴ	-	(5)	-	奥付輪削ぎ	胴部に化粧土刷毛目 見込みスタンプ印花象嵌 砂目痕 4	オリーブ黄色	オリーブ黄色		肥前 三島海岸 17C前半
277	陶器	皿	曲輪Ⅴ	-	-	-	象嵌	施釉	褐色	にぶい赤褐色		肥前 三島海岸
278	陶器	皿	曲輪Ⅴ	-	13	-	施釉 露胎	施釉・象嵌・砂目痕	黒褐色	暗褐色		肥前 三島海岸
279	陶器	皿	曲輪Ⅴ	-	21	-	高台露胎以外は 施釉 高台内面も一部 施釉	象嵌(スタンプ印花文など) 見込み砂目痕	オリーブ黄色	暗褐色		肥前 三島海岸 17C後半
280	陶器	皿	曲輪Ⅳ 曲輪Ⅴ	-	12	-	胴部~高台縁に 深く刻輪(試産?)、口縁部付近は施釉を施す	胴部にスタンプ印花文による象嵌	灰オリーブ色	灰オリーブ色		肥前 三島海岸 17C後半
281	陶器	輪花皿	曲輪Ⅴ	19	8	7	口縁~胴部、化粧土刷毛目も施釉 高台縁~高台内面 化粧土を施す	全体に化粧土; 見込み蛇の目輪 刻ぎ	淡黄色	赤褐色		肥前 唐津 17C後半~18C前半
282	陶器	皿	曲輪Ⅴ	19	7	6	高台露胎	胴部化粧土 見込み蛇の目輪 刻ぎのち施釉を施す	褐色	にぶい褐色		肥前 唐津 18C前半
283	陶器	火入	曲輪Ⅴ (23)	-	-	-	化粧土刷毛目 その上から施釉 口唇部施釉削ぎ	薄く施釉	黒褐色	黒褐色		火入れ 17C後半
284	陶器	甕	曲輪Ⅴ	29	-	-	口縁上面無釉	自然釉	灰黄色	灰黄色		肥前系 17C前半
285	陶器	甕	曲輪Ⅴ	31	-	-	趾付突弁、口縁 上面無釉	自然釉 格子目タナキ痕	暗赤褐色	にぶい褐色		肥前系 17C前半
286	陶器	甕	曲輪Ⅴ	38	-	-	胴部に黒文突弁 口縁上面無釉	格子目タナキ 文	灰赤色	灰赤色		肥前系 17C後半
287	陶器	甕	曲輪Ⅴ	32	-	-	ヨコナゲ 自然 釉	ヨコナゲ	暗赤褐色	赤褐色		肥前系 17C後半
288	陶器	甕	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅵ SK21	12	-	-	給輪	細かい口ロ口 縁が残る	黒褐色	灰黄色		唐津系 18C後半
289	陶器	甕	曲輪Ⅴ	11	-	-	回転ナゲ	回転ナゲ	にぶい赤褐色	褐色		唐津系(沖縄) 18C前半~19C
290	陶器	甕	曲輪Ⅴ 曲輪Ⅵ	-	-	-	指オサエ痕 上下にナゲ 両面に把手を輪 縁に貼り付ける 手の下に2本の 筋線を残す	指オサエ痕	灰褐色	明赤褐色		唐津系(沖縄) 18C前半~19C
291	陶器	甕	曲輪Ⅵ	-	21	-	口ロ口成形 蓋部(露胎)に 砂付替	薄く施釉(フベ 釉?)	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		唐津系(沖縄) 18C前半
292	陶器	鉢	曲輪Ⅴ (37)	-	-	-	口縁下に取手 指オサエ痕有り	ヨコナゲ・横方 向の筋目	灰赤色	明赤褐色		
293	陶器	片口鉢	曲輪Ⅴ (11)	(7)	(5)		鉄輪を薄く施釉 その上に自然釉 が沁みこんでいる 高台露胎	施釉	灰黄色	にぶい黄褐色		肥前系 16C末~17C
294	陶器	土瓶(黄)	曲輪Ⅴ	-	-	-	自然釉、自然 釉付否	無釉	灰褐色	灰褐色		
295	陶器	土瓶(黄)	曲輪Ⅴ	6	3	-	給輪? 施釉	無釉	暗オリーブ褐色	灰赤色		
296	陶器	土瓶(黄)	曲輪Ⅵ	6	-	4	給輪	無釉	暗褐色	赤褐色		

第13表 本城跡出土陶磁器 観察表(6)

遺物番号	種別	器種	地点	法 量(m)			手法・製造・文様ほか		色 調		備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面	
297	陶器	土瓶(蓋)	曲輪V	7	-	5	鉄輪	無輪	黒褐色	灰青色	
298	陶器	土瓶(蓋)	曲輪V	10	-	4	塗輪	無輪	オリーブ黒色	赤褐色	
299	陶器	土瓶	曲輪V	-	-	-	鉄輪	注ぎ孔3個	暗褐色	黒色	
300	陶器	土瓶	曲輪V	8	-	-	胎輪 口縁部輪割ぎ 全体に自然輪付 き	注ぎ孔3個	黒褐色	黒褐色	
301	陶器	土瓶	曲輪V	-	-	-	鉄輪	灰かぶり 注ぎ孔3個	黒褐色	にぶい赤褐色	
302	陶器	土瓶	曲輪V	-	-	-	鉄輪	胎輪 注ぎ孔3個	暗赤褐色	褐色	
303	陶器	土瓶	曲輪V	-	-	-	胎輪 貫入	胎輪より有り 注ぎ孔3個	オリーブ褐色	にぶい赤褐色	
304	陶器	土瓶	曲輪V	-	-	-	胎輪 貫入	口縁部以外胎輪 注ぎ孔3個	暗オリーブ褐色	褐色	
305	陶器	土瓶	曲輪V	7	-	-	露胎・保付書	一部胎輪 口縁部輪割ぎ	黒褐色	黒褐色	肥前系 埴田町 志田塚
306	陶器	土瓶	曲輪V II層	9	-	-	胎輪	胎輪1個	オリーブ黒色	暗オリーブ褐色	17C後半
307	陶器	土瓶	曲輪V	-	-	-	高厚胎輪 保付書	自然輪付書	黒褐色	灰褐色	肥前か薩摩?
308	陶器	土瓶	曲輪VI	-	-	-	胎輪 底面露胎 保付書 胎土に鳥取有り	自然輪か?	オリーブ黒	灰白色	
309	陶器	土瓶	曲輪V III層	-	4	-	胎輪胎輪 底面露胎 三足付	胎輪	黒褐色	黒褐色	
310	土師質	埴輪	曲輪V	(31)	-	-	穿孔 ココナデ 深い保付書	ココナデ 穿孔	にぶい褐色	にぶい褐色	
311	土師質	埴輪	曲輪V	-	-	-	ココナデ 保付書	ココナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	
312	土師質	埴輪	曲輪V	(35)	-	-	穿孔 深い保付書 ココナデ	穿孔 深い保付書 ココナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	
313	土師質	埴輪	曲輪V	-	-	-	ココナデ 穿孔 保付書	ココナデ 穿孔 一部露胎	褐色	褐色	
314	陶器	高台付皿	曲輪IV 曲輪V 露胎底 露胎底	-	8	-	透明胎 製作露胎 砂付書 貫入	足込み粒の目輪 割ぎ	黄褐色	灰黄色	肥前系 志和原 17C末-18C前半
315	陶器	灯明皿	曲輪V	7	3	2	胎輪 右左切り痕	保付書	にぶい黄褐色	明赤褐色	肥前 18C-19C
316	陶器	灯明皿	曲輪V	7	3	2	露胎 右左切り痕	保付書	黄褐色	褐色	18C-19C
317	陶器	灯明皿	曲輪V	10	4	2	口縁部以外は露 胎	胎輪・貫入・胎が うすくなっている	明オリーブ灰色	灰白色	瀬戸
318	陶器	蓋	曲輪IV	8	-	-	透明胎	無輪	黄褐色	淡黄色	
319	陶器	天目鉢	曲輪V	(12)	-	-	鉄輪の上から別 の輪(大目輪?) 掛け渡し 縦筋露胎	鉄輪の上から別 の輪(天目輪?) 掛け渡し	暗褐色	灰色	瀬戸美濃
320	陶器	天目鉢	曲輪V	-	-	-	胎輪(大目輪)	胎輪(天目輪)	黒色	明オリーブ灰色	瀬戸美濃
321	陶器	天目鉢	曲輪V	(11)	-	-	天目胎	天目胎	褐色	灰白色	瀬戸美濃
322	陶器	仏花瓶	曲輪V	22	-	-	口縁部上部に白 化粧土、その上 から胎輪	口縁部以外は露 胎	オリーブ褐色	暗赤褐色	肥前系 18C代
323	陶器	仏花瓶	曲輪V	-	9	-	透明胎を胎付以 外に胎輪、その 上から胎輪を胎 部より上に施す	胎輪中央に自然 胎	褐色	暗赤褐色	肥前系 18C代
324	磁器	青磁仏花瓶	曲輪V	-	6	-	胎輪(把手(柄?) を横位に貼り付 ける 底付露胎 砂付書	胎輪までは薄く 胎輪	緑灰色	灰白色	肥前 18C代
325	陶器	鉢	曲輪V	-	-	-	胎輪胎輪 胎輪は白化粧土 胎土目	胎輪ナデ 一部、胎れが 見られる	黒色	灰褐色	武蔵系 17C末-18C前半
326	陶器	皿	曲輪V	-	-	-	白化粧土胎土目 胎輪胎輪 胎土目	胎輪ナデ	黄褐色	灰褐色	武蔵系 17C末-18C前半
327	磁器	香炉	曲輪V	12	11	?	胎輪胎輪 高台部分には胎 輪 胎土付書	口縁部のみ胎輪 胎輪胎輪	明緑灰色	灰白色	肥前系 17C中頃
328	瓦質	火鉢	曲輪V	(17)	-	-	スタンプ印花	胎輪ナデ	灰色	灰白色	
329	瓦質	火鉢	曲輪VI	(37)	-	-	突塗 スタンプ 印花	ナデ 面取	灰色	灰色	

第14表 本城跡出土錢貨觀察表

遺物番号	錢貨名	出土地点	錢徑(cm)	錢孔徑(cm)	重量(g)	国名年号	鋳造年号間	背文	備考
330	開元通宝	曲輪V	2.55	0.7	1.6	南唐	960-	月	
331	天聖元宝	曲輪V	2.5	0.7	3.3	北宋	1023-		
332	皇宋通宝	曲輪V	2.45	0.75	2.4	北宋	1038-39		
333	至和元宝	曲輪V	2.4	0.6	2.2	北宋	1064-		
334	嘉祐通宝	曲輪V	2.4	0.75	2.2	北宋	1056-		
335	熙寧元宝	曲輪V	2.45	0.65	1.9	北宋	1068-77		
336	熙寧元宝	曲輪V	2.35	0.55	3.6	北宋	1068-77		
337	熙寧元宝	曲輪V	2.4	0.65	2.7	北宋	1068-77		
338	元豊通宝	曲輪V	2.55	0.7	2.8	北宋	1078-		
339	元祐通宝	曲輪V	2.5	0.7	3.0	北宋	1086-93		
340	元祐通宝	曲輪V	2.5	0.7	2.5	北宋	1086-93		
341	元符通宝	曲輪V	2.5	0.65	1.9	北宋	1098-		
342	政和通宝	曲輪V	2.4	0.65	2.4	北宋	1111-		
343	洪武通宝	曲輪V	2.3	0.6	3.0	明	1368-93		
344	洪武通宝	曲輪V	2.3	0.55	2.6	明	1368-93		
345	洪武通宝	曲輪V	2.3	0.6	2.3	明	1368-93		
346	洪武通宝	曲輪V	2.3	0.6	2.8	明	1368-93	治	
347	洪武通宝	曲輪V	2.3	0.55	1.9	明	1368-93		
348	洪武通宝	曲輪V	2.3	0.55	2.5	明	1368-93	治	
349	洪武通宝	曲輪V	2.3	0.55	2.5	明	1368-93		
350	寛永通宝	曲輪V	2.55	0.6	3.3	寛永	1636-59	文	
351	寛永通宝	曲輪V	2.2	0.65	1.9	寛永	1636-59		
352	寛永通宝	曲輪V	2.5	0.55	3.1	寛永	1636-59		
353	寛永通宝	曲輪V	2.25	0.65	2.2	寛永	1636-59		
354	寛永通宝	曲輪V	2.45	0.65	2.1	寛永	1636-59		
355	寛永通宝	曲輪V	2.3	0.65	2.5	寛永	1636-59		
356	寛永通宝	曲輪V	2.3	0.65	2.4	寛永	1636-59		
357	半銭貨	曲輪V	2.2	-	3.3				
358	一銭貨	曲輪IV	2.8	-	6.9		1874		
	紹聖元宝	曲輪V	2.5	0.75	1.0	北宋	1094		

第15表 本城跡出土金屬製品計測表

遺物番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
359	煙管	曲輪V	5.3	火皿1.0 小口徑1.0	-	銅製
360	煙管	曲輪V	4.8	火皿1.5 小口徑0.8	-	銅製
361	仏具	曲輪V	2.5	3.1	-	銅製
362	仏具	曲輪V	2.3	2.3	-	銅製
363	六器	曲輪V	-	-	-	銅製 推定口徑7.3cm
364	鑿	曲輪V	18.3	1.2	0.3	銅製
365	刺	曲輪V	10.7	2.4	0.4	鉄製
366	刀子	曲輪V	11.5	1.5	0.2	鉄製
367	分銅	曲輪V	5.1	4.1	3.6	鉄製
368	錠前	曲輪V	4.8	9.3	1.6	鉄製
369	錠前	曲輪V	4.2	11.9	1.4	鉄製
370	鋤	曲輪V	35.9	9.6	1.2	鉄製
371	鋤	曲輪V	9.2	7.8	0.3	鉄製
372	鋤	曲輪V	7.5	7.0	0.3	鉄製
373	鍬	曲輪V	13.8	12.9	0.5	鉄製

第16表 本城跡出土石製品計測表

遺物番号	実測番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
380		石臼	曲輪V	13.9	10.0	10.3	2000.0	砂岩
381		砥石	曲輪V	17.2	15.8	4.2	1200.0	砂岩
382		砥石	曲輪IV	10.7	1.3	1.3	23.4	シルト岩
383		砥石	曲輪V	7.2	4.0	1.6	47.6	泥岩
384		砥石製品	曲輪V	5.2	5.3	2.9	19.5	砥石
385		砥石製品	曲輪V	9.6	5.7	2.2	41.5	軽石
386		駒石	曲輪V	1.8	1.7	0.4	1.6	頁岩
387		駒石	曲輪V	1.7	1.4	0.6	1.9	ホルンフェルス
388		駒石	曲輪V	1.8	1.6	0.7	2.6	頁岩
389		駒石	曲輪V	1.9	1.7	0.4	1.9	頁岩
390		駒石	曲輪V	1.8	1.8	0.7	3.1	砂岩
391		駒石	曲輪V	2.4	2.0	0.4	2.7	頁岩
392		駒石	曲輪V	1.8	1.7	0.4	1.7	頁岩
393		駒石	曲輪V	1.6	1.1	0.4	0.9	頁岩
394		駒石	曲輪V	1.9	1.4	0.7	2.5	砂岩
395		駒石	曲輪V	1.8	1.5	0.4	1.4	頁岩
396		駒石	曲輪V	1.6	1.3	0.4	1.0	砂岩
397		駒石	曲輪V	1.9	1.5	0.6	2.3	ホルンフェルス
	1332	駒石	曲輪V	1.8	1.3	0.6	1.9	頁岩
	1334	駒石	曲輪V	2.0	1.9	0.5	2.3	頁岩

第17表 本城跡出土土錘計測表(1)

遺物番号	実測番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	孔径(cm)	備考
402		土錘	曲輪V	4.4	1.3	1.4	8.1	0.5	
403		土錘	曲輪V	4.2	1.5	1.4	7.6	0.7	
404		土錘	曲輪V	4.4	1.4	1.4	7.3	0.7	
405		土錘	曲輪V	4.3	1.4	1.1	6.3	0.4	
406		土錘	曲輪V	5.0	1.8	1.7	12.9	0.6	
407		土錘	曲輪V	4.8	1.8	1.6	11.7	0.5	
408		土錘	曲輪V	4.4	1.3	1.3	6.1	0.4	
409		土錘	曲輪V	4.4	1.3	1.3	6.1	0.3	
	1121	土錘	曲輪IV	3.1	1.3	1.1	4.0	0.4	
	1137	土錘	曲輪IV	4.5	1.5	1.4	9.7	0.3	
	1138	土錘	曲輪IV	4.2	1.3	1.2	6.0	0.3	
	1101	土錘	曲輪V	3.2	1.6	1.4	6.9	0.6	
	1102	土錘	曲輪V	4.3	1.2	1.1	5.1	0.5	
	1104	土錘	曲輪V	4.0	1.5	1.4	6.1	0.5	
	1105	土錘	曲輪V	5.0	1.6	1.5	10.2	0.4	
	1106	土錘	曲輪V	4.8	1.3	1.3	8.5	0.4	
	1107	土錘	曲輪V	4.7	1.5	1.4	9.1	0.7	
	1108	土錘	曲輪V	4.4	1.5	1.4	8.1	0.6	
	1109	土錘	曲輪V	4.9	2.0	1.7	12.9	0.5	
	1110	土錘	曲輪V	3.4	1.6	1.3	6.3	0.6	
	1111	土錘	曲輪V	4.3	1.3	1.2	5.4	0.3	
	1112	土錘	曲輪V	3.6	1.5	1.4	7.5	0.4	
	1113	土錘	曲輪V	2.8	1.4	0.5	3.2	0.6	
	1114	土錘	曲輪V	6.7	1.7	1.4	13.2	0.3	
	1115	土錘	曲輪V	5.7	1.5	1.4	10.6	0.5	
	1116	土錘	曲輪V	4.8	1.7	1.5	10.6	0.5	
	1117	土錘	曲輪V	4.1	1.6	1.5	8.9	0.5	
	1118	土錘	曲輪V	3.0	1.6	1.3	5.9	0.4	
	1119	土錘	曲輪V	3.4	1.4	1.3	4.0	0.6	
	1120	土錘	曲輪V	2.8	1.5	1.4	4.7	0.3	
	1122	土錘	曲輪V	3.9	1.6	1.6	8.6	0.6	
	1123	土錘	曲輪V	3.8	1.6	1.5	7.3	0.5	
	1124	土錘	曲輪V	3.6	1.6	1.6	8.6	0.5	
	1125	土錘	曲輪V	2.5	1.4	1.4	4.5	0.5	
	1127	土錘	曲輪V	3.1	1.3	1.0	3.1	0.6	
	1128	土錘	曲輪V	3.9	1.4	1.2	4.6	0.5	
	1129	土錘	曲輪V	4.1	1.7	1.8	8.1	0.9	

第18表 本城跡出土土錘計測表(2)

遺物番号	次測番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	孔径(cm)	備考
	1130	土錘	曲輪V	4.3	1.3	1.2	5.6	0.4	
	1133	土錘	曲輪V	4.2	1.6	1.6	7.9	0.4	
	1134	土錘	曲輪V	2.0	1.4	1.4	4.3	0.4	
	1135	土錘	曲輪V	4.9	1.5	1.4	9.1	0.4	
	1136	土錘	曲輪V	4.6	1.4	1.2	6.1	0.4	
	1140	土錘	曲輪V	5.1	1.2	1.2	6.8	0.4	
	1141	土錘	曲輪V	3.5	1.2	1.1	3.9	0.3	
	1139	土錘	曲輪VI	2.2	1.4	1.4	3.8	0.5	
	1142	土錘	曲輪VII	4.8	1.4	1.3	8.1	0.4	
	1143	土錘	曲輪VII	4.8	1.6	1.3	7.7	0.3	
	1144	土錘	曲輪VII	4.7	1.3	1.3	6.6	0.3	
	1145	土錘	曲輪VII	3.0	1.3	1.2	3.8	0.4	
	1146	土錘	曲輪VII	3.9	1.2	1.1	4.3	0.5	
	1147	土錘	曲輪VII	3.6	1.3	1.2	4.6	0.4	
	1148	土錘	曲輪VII	5.0	1.6	1.5	12.0	0.4	
	1149	土錘	曲輪VII	5.1	1.7	1.6	13.0	0.5	
	1150	土錘	曲輪VII	4.9	1.6	1.5	11.3	0.5	
	1151	土錘	曲輪VII	4.7	1.6	1.6	9.2	0.5	
	1152	土錘	曲輪VII	4.3	1.3	1.3	6.1	0.3	
	1153	土錘	曲輪VII	4.1	1.6	1.5	8.8	0.5	
	1154	土錘	曲輪VII	4.9	2.0	1.5	10.0	0.5	
	1155	土錘	曲輪VII	4.8	2.0	1.6	11.0	0.4	
	1156	土錘	曲輪VII	4.5	1.4	1.4	7.2	0.4	
	1157	土錘	曲輪VII	5.3	1.3	1.3	8.0	0.4	
	1158	土錘	曲輪VII	3.8	1.6	1.5	8.6	0.5	
	1159	土錘	曲輪VII	3.4	1.3	1.2	5.1	0.5	
	1161	土錘	曲輪VII	3.8	1.9	1.8	11.5	0.5	
	1162	土錘	曲輪VII	1.8	1.2	0.9	1.2	0.6	
	1163	土錘	曲輪VII	4.4	1.3	1.3	6.1	0.4	
	1164	土錘	曲輪VII	4.8	1.3	1.3	5.6	0.4	
	1165	土錘	曲輪VII	5.5	1.5	1.6	9.4	0.4	
	1166	土錘	曲輪VII	5.4	1.4	1.4	9.1	0.3	
	1168	土錘	曲輪VII	4.9	1.5	1.2	7.9	0.3	
	1169	土錘	曲輪VII	2.5	1.3	1.1	2.7	0.4	
	1171	土錘	曲輪IX	4.5	1.7	1.5	10.0	0.5	

第3節 城跡に関わらない遺構・遺物

縄文時代

集石遺構 (第51図)

早期の集石遺構が、曲輪Ⅳの西縁辺部で3基確認された。集石は全て砂岩によって構成されている。遺物を伴っているのはS I 1の1基のみである。

S I 1

0.93m×0.95mのほぼ円形の掘り込みを有し、床面に扁平な礫による配石をもつ。配石の周囲から炭化物が認められた。遺物は尾鈴山酸性岩製の磨石 (第53図19) が1点出土している。

S I 2

礫の重なりはほとんど認められず、数10個の砂岩礫が疎に配されている。礫の赤化は認められるが炭化物は確認されなかった。掘り込みは認められない。

S I 3

10個程度の比較的大きく扁平な砂岩によって構成されている。礫の全てに顕著な赤変がみられる。

土器 (第52図)

縄文時代の早期に位置づけられる土器が5点出土し、そのうち4点を図化した。すべて遺構に伴うものではない。1は前平式土器で、口縁外面に棒状の工具による刺突がみられる。2は手向山式の深鉢である。3・4は壺ノ神式土器である。3は外面に2条の沈線と縦位の撚糸文が施され、4は縦位の貝殻復縁による刺突がみられる。

弥生～古代の土器 (第52図)

5～8は弥生時代後期中葉～後葉にかけての土器である。5～7は壺で、底部が外反し上げ底になる。8は壺で内外面ともにハケ目がみられる。9・10は古代の甕であり、外面に横方向のハケ目、内面にヘラ削りが施される。

石器 (第52図 第20表)

石鏃 (11～13)

11は小型の石鏃であり、石材はチャート。12は黒曜石製、13が頁岩製である。

楔形石器 (14・15)

14は相対する両辺にツブレが観察でき、15は両端に剥離が見られる。14が日東産と推定される黒曜石製、15がチャート製の楔形石器である。

磨製石斧 (16)

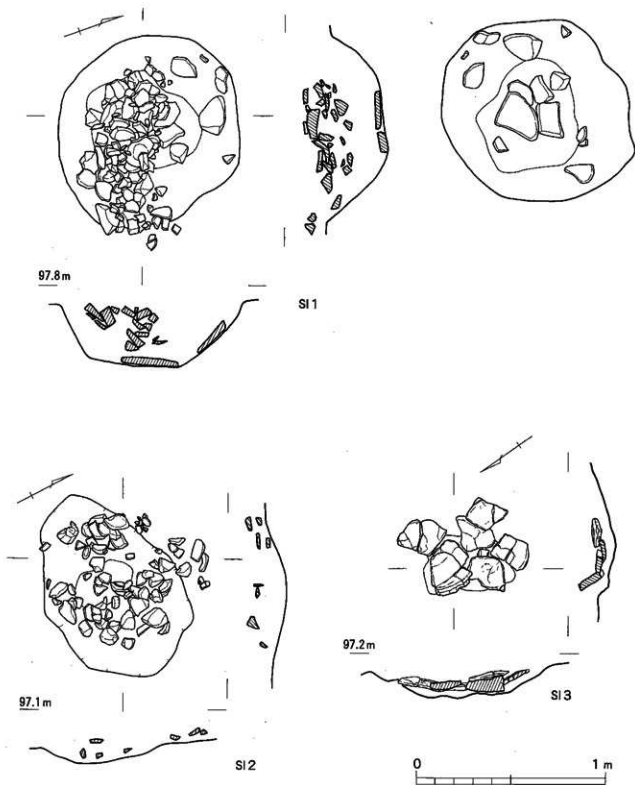
16は磨製石斧で、石材はホルンフェルスである。刃部は両刃で丁寧研磨されている。側面に敲打による成形を行った後、研磨を施している。

凹石 (17)

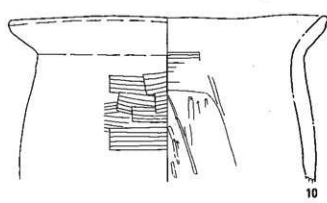
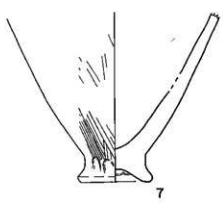
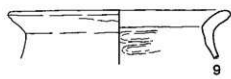
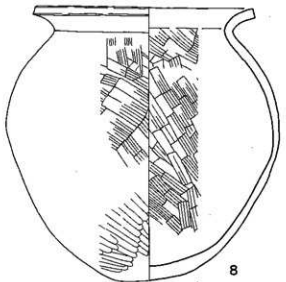
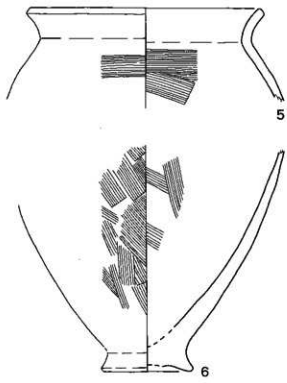
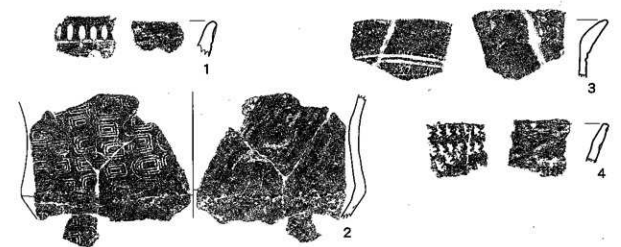
17は砂岩製の凹石である。敲打痕による凹みが表裏両面中央にみられる。

磨石 (18～21)

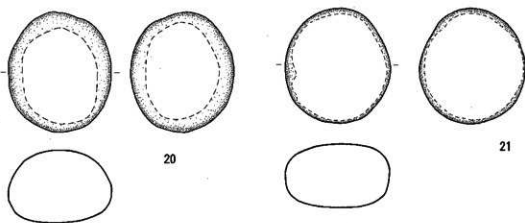
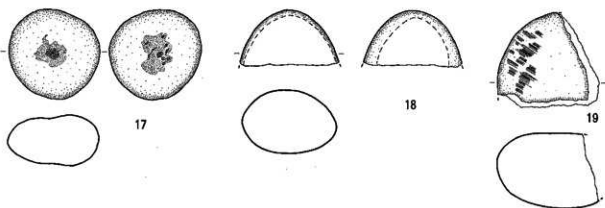
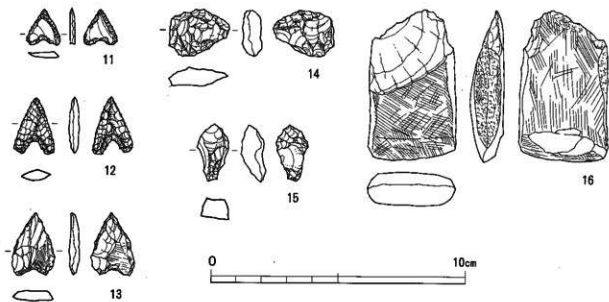
18・20は砂岩製で、19・21は尾鈴山酸性岩製の磨石である。いずれも平面形態はほぼ円形で、表裏両面に磨痕が観察される。



第51図 SI1～SI3 (1/20)



第52図 縄文～古代遺物実測図(1/3)



第53图 石器实测图(11~16 2/3、17~21 1/3)

第19表 本城跡出土土器 観察表(6)

遺物番号	器別	器形・部位	地点	法量(cm)			手法・観察・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢 口縁	曲輪V	-	-	-	ナデ 貝殻漆文 連続押正文 文様有り	横方向のナデ	褐色 (5YR6/6)	褐色 (5YR6/6)	1mm~1.5mm大の黒色透明・白色の鉱物粒を含む。	
2	縄文土器	深鉢 底部~胴部	曲輪V	-	-	-	同心槽押印 型文	斜め方向のナデ	におい黄褐色 (2.5Y6/7)	におい黄褐色 (10YR7/4)	光沢のある2mm以下の粒、1mm以上の白色粒、1.5mm以下の黒色粒を含む	
3	縄文土器	深鉢 口縁	曲輪IX	-	-	-	貝殻漆文 横方向に突 文の上から 沈彫文	ナデ全体的 に黒化	におい黄褐色 (10YR6/6)	におい黄褐色 (10YR6/4)	著明な白色不透明の鉱物粒、1mm大の黒色透明の鉱物粒	
4	縄文土器	深鉢 口縁	曲輪V	-	-	-	貝殻漆文 刺突文	ナデ	におい黄褐色 (2.5Y6/7)	におい黄褐色 (10YR6/4)	1mm以下の黒色粒、白色粒を含む	
5	弥生土器	甕	曲輪V	18	-	-	ハケメ ヨコナデ スス付着	ヨコナデ 横方向のハ ケメ	におい黄褐色 (10YR7/4)	灰(7.5Y5/1)	2.5mm以下の灰色、黒色、褐色粒を含む	
6	弥生土器	甕	曲輪V	-	7	-	縦・斜方向 のハケメ ヨコナデ スス付着	縦・斜方向 のハケメ斜 方向のハケ メヨコナ デ	におい黄褐色 (10YR7/4)	灰(7.5Y5/1)	4.5mm以下の灰色、黒色、褐色の粒を含む	
7	弥生土器	深 口縁~胴部	曲輪V	25	-	-	強めのヨコ ナデ 横方向のハ ケメ	横方向のハ ケメ 下から上へ ケズリ	褐色 (5YR6/6)	褐色(5YR6/6)	1~4mm大で赤褐色砂粒、1~1mm大で灰褐色の岩片、3~10mm大でにおい赤褐色砂粒を含む	
8	弥生土器	甕 口縁~底部	曲輪V	17	8	22	ヨコナデ 斜方向にハ ケ目強い 磨き風ナ デ	ヨコナデ斜 方向にハケ 目風 磨	におい黄褐色 (10YR7/3)	におい黄褐色 (10YR7/3)	1mm程度の黒い粒と1~2mmの光沢粒を含む	
9	土師器	甕 胴部~底部	曲輪V	-	(5)	-	ハケメ ナデ 指跡スス 付着	ナデ全体的 に黒化スス 付着	におい黄褐色 (10YR7/4)	淡黄褐色 (10YR8/4)	3mm以下の砂粒と2mm以下のガラス質の鉱物粒を多く含む	
10	土師器	深 口縁~胴部	曲輪IX	17	-	-	ヨコナデ 斜方向にナ デ スス付着	ヨコナデ 斜方向に指 跡によるナ デ	におい黄褐色 (7.5YR7/4)	におい黄褐色 (7.5YR6/4)	1~4mm程度の灰褐色の粒、1~3mm程度の白色粒を含む	

第20表 本城跡出土土器計測表

遺物番号	器種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
11	石礫	曲輪V	1.4	1.3	0.2	0.3	チャート
12	石礫	曲輪V	2.2	1.6	0.4	0.9	黒曜石
13	石礫	曲輪VII	2.5	1.7	0.4	1.2	頁岩
14	楔形石器	曲輪VII	1.8	2.4	0.7	3.1	黒曜石(日東産)
15	楔形石器	曲輪V	2.3	1.3	0.9	2.1	チャート
16	磨製石斧	曲輪IV	6.0	3.5	1.3	37.8	ホルンフェルス
17	凹石	曲輪V	71.5	7.2	4.0	294.8	砂岩
18	磨石	曲輪IV	(4.5)	(7.8)	5.1	222.3	砂岩
19	磨石	曲輪IV・SII	(7.6)	(8.1)	6.0	502.2	尾鈴山酸性岩
20	磨石	曲輪IV	9.6	8.2	5.9	654.6	砂岩
21	磨石	曲輪VII	9.1	8.3	5.0	596.1	尾鈴山酸性岩

第4章 まとめ

本城跡は平成5年度から始まった中近世城館跡緊急分布調査で、中世から近世にわたる城館跡として認知されていた。今回の調査は主郭部分にはあたらぬもの、6カ所の曲輪が対象となった。調査区の多くの面積を占める曲輪Ⅳから曲輪Ⅵは、現在の古城の集落が昭和初期まで営まれており、中世から近世を主体とするが、縄文時代早期から近現代までの時代幅の多岐にわたる遺物が混在して検出された。ここでは、発掘調査と縄張り調査等の成果から遺跡の性格を考えることでまとめにかえたい。

遺構について

多岐にわたる遺物とその出土量からみると検出された遺構は少なく、掘立柱建物と土坑および柱穴群が主体である。建物は曲輪Ⅳで4棟確認されSB1のみ主軸が大きく東へふれるが、SB2～SB4は、主軸N7°E付近であり、同時期の作事によると推定される。腰曲輪と考えられる曲輪Ⅵでは、北側による位置で2棟の掘立柱建物が検出された。もっとも遺物出土量の多かった曲輪Ⅴでは柱穴や土坑は確認されるものの、建物は1棟も確認できなかった。この結果は、削平に起因するものか本来建物の空白地帯であったか判じ難い。曲輪の性格から考えると前者の可能性を指摘したい。曲輪Ⅶについては調査区の東端で柱穴の並びが一部確認できたが、建物の主体は東側に延びると推定される。

遺物について

出土遺物は日常雑器としての土師皿と国産陶磁器が優勢で、輸入陶磁器の割合は少ない。

土師器は坏・皿がほとんどで、約250点ほど出土している。ヘラ切り底の土師器と糸切り底の土師器の割合は1：9の比率である。遺構などの一括資料として扱えるものはほとんどないため、確実に年代のはっきりするものはない。ヘラ切りを（Ⅰ類）、糸切りを（Ⅱ類）として形態分類をおこなった。その結果、総数に占める割合は、Ⅰ類の坏が5%、皿が5%でⅡ類の坏が21%、皿が69%である。圧倒的多数をしめるⅡ類の皿の中で、Ⅱ-C類（口径7.4～8.2cm、器高1.8～2.4cm、底径3.8～5.4cm）が50%であり、以下Ⅱ-A類20%、Ⅱ-B類20%、Ⅱ-D類10%と続く。『山内石塔群』の年代観にしたがえば、14世紀後半頃と推定される。

陶磁器は、先述したとおり輸入陶磁器は量的には少なく、13世紀代の白磁皿、14世紀～15世紀前半代の青磁碗、15世紀末～16世紀の青花などが曲輪Ⅴを中心として出土している。

国産陶磁器については、SC2出土の備前の甕に代表される14世紀～15世紀の時期（間壁氏編年のⅢ期後半からⅣ期）と17世紀～18世紀の肥前産を中心とした遺物が出土している。分布の中心は曲輪Ⅴや曲輪Ⅶで碗や小皿、播鉢や71点にも及ぶ土錘・水甕と考えられる国産陶器など、曲輪の上で営まれた生活の様子が感じられる遺物が出土している。

銭貨については、北宋銭と明銭の2種に大別できる。出土は、その全てが曲輪Ⅴないし曲輪Ⅶからで、曲輪Ⅶからは北宋銭のみが確認できる。銭貨の鋳造年代と城の活動期が重ならない部分もあり、年代（鋳造年代）より下がり、貨幣として本邦銭と同時に流通している可能性もあると思われる。

本城跡の城域について

本城跡は、先述のとおり中近世城館跡緊急分布調査で城跡と推定され、千田嘉博氏の縄張り調査によってその存在が補強された。調査対象になっている標高約110mの最高所に位置する曲輪Ⅰから西にのびる3段の曲輪で、曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴ間には堀切の可能性も指摘されていた。しかし今回の調査では、痕跡を確認することができなかった。曲輪Ⅳ～曲輪Ⅵと南の城とも言うべき曲輪Ⅶ～曲輪Ⅸの間は、谷を隔てて様相を異にしている。曲輪Ⅰが主郭と推定されるが、求心性としては、北に延びる複数の曲輪をもち、見張り台的な施設を有する曲輪Ⅶも重要な役割りを果たしたと考えられる。調査区域外であるが曲輪Ⅸの南側に、地形的に掘りきったような痕跡が認められる。

『日向地誌』には、本城跡と周囲の城跡についての記述が見られる。

宮崎郡 古城村 古跡

本城址本村ノ西北字時雨ノ東北七八町ニアリ按スルニ此本城ト名ヅク蓋シ上古本城砦アリシヨリ起コリシ名ナリトミュ元禄十一年戊寅十月川崎祐盛其主伊東氏ニ建白セシ書中ニ若シ世間ノ大変トナリ各国動乱ニ及ヒ候ハク中野ノ城ヲ本城トナシ時雨村ノ古城ヲ取立テ戊辰ヲ置キ申スヘシト云云ハ是ナリ 山ノ城址本城ノ東二十町許独立ノ山嶺ニアリ今一段許ノ畦圃トナル左右皆林奔ナリ蓋シ此地本城砦アリ故ニ今地名トナル伊東古系ヲ考フルニ伊東祐時ノ第七子門川祐景ノ子孫十三族アリ山ノ城ヲ氏トスル其一ニ居ル今伊東氏ノ旧臣ニ存ス蓋シ其先此地ヨリ出シナリ古城ノ址山ノ城ノ東十町許西ヨリ東ニ連亘セシ山嶺ニアリ凡ハ七段南ヨリ西又北ニ環リ幅三四間ノ帯ヒ郭ヲ構ヒ唯東一面旧今福寺ニ連ナル山ノ尾アリ今人家九戸其嶺ニアリ蓋シ中古曾井城ノ末ヲ築カサル以前此地古城アリ故ニ今村名トナル今福寺址真言宗古城址の北麓ニアリ凡ハ一町余明治三年庚午廃ス但大塚村長久寺同宗ナルヲ以テ寺僧長久寺ヲ改テ今福寺トナス故ニ本名ハ今大塚村ニ存ス

今福寺（旧太田城址）や山ノ城址・古城址との位置関係からすると、記載の「本城址」と今回の調査地の本城跡とは同一箇所ないし、かなり近辺を指すものと考えられる。

以上のことから、本城跡の存続期間を想定するのは困難であるが、伊東氏と島津氏の攻防が盛んな14世紀末～15世紀前半には、城（砦）としての役割を果たしていたものと考えられる。

<参考・引用文献>

平部橋南 『日向地誌』 1929

間壁忠彦 『備前』世界陶磁全集3 1977

谷口武範 「第4節土師器に関する二・三の問題について」『山内石塔群』宮崎県教育委員会 1982

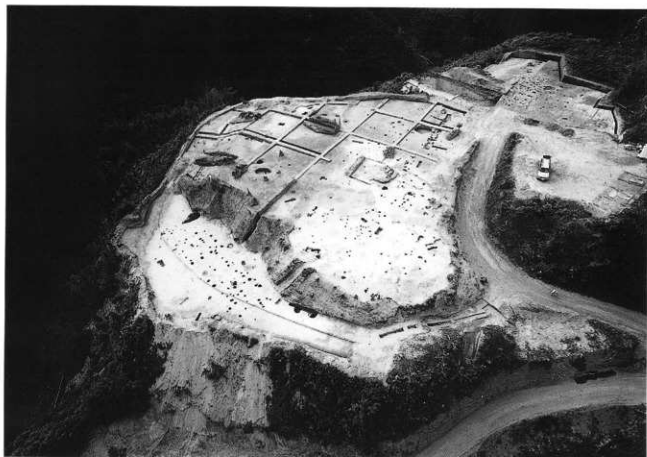
おわりに

今回の調査では、時代が多岐にわたることや遺物が複雑なためと、城跡の評価についてわからないことが多く、筆者の力量の不足を痛切に感じた。調査や整理作業の中で想起した問題点について、今後深化させたい。また、多くの方の御指導・御協力を頂いた。文末ながら記して謝意を表したい。

崎田一郎 菅付和樹 鈴木公子 千田嘉博 谷口武範 中井均 永友良典 浜砂雅子

日高広人 福田泰典 北郷泰道 柳田晴子 吉本正典（敬称略・五十音順）

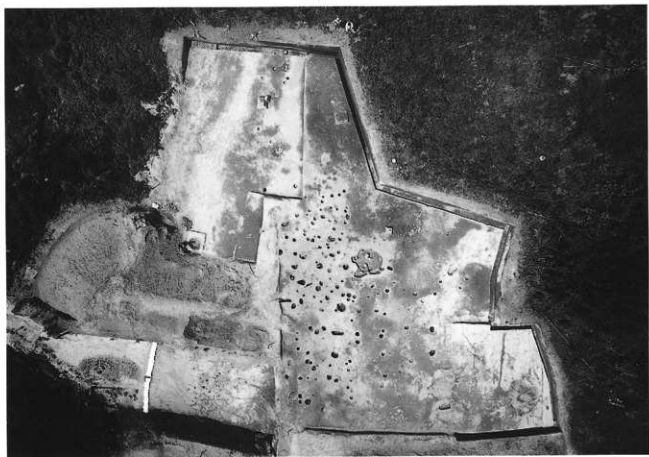
圖 版



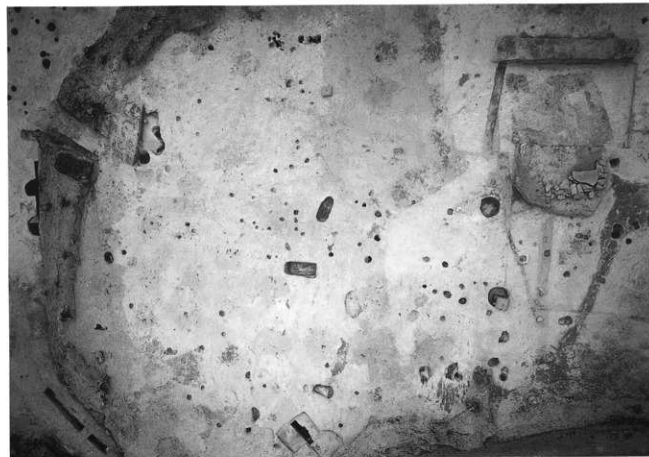
曲輪IV～VI(南から)



曲輪IV～VI(真上から)



曲輪IV(真上から)



曲輪V(真上から)